41261
教科書文庫
4
920
42-1936
20000
71208

磯畑せい
村瀬初代 共著

新裁縫教科書

巻一

東京 冨山房 神田

4b
930
昭11

資料室

文部省檢定濟

昭和十一年十二月七日　高等女學校裁縫科・實業學校家事及裁縫科用

磯畑せい
村瀬初代　共著

新裁縫教科書

卷一

広島大学
教
71208
図書

東京　冨山房　神田

和服裁縫室の整頓

輕いものは上に，重いものは下に，度々使用するものは便利な中段に置き，布類は分類して皺にならぬやうに保存する。

凡　例

1. 本書は文部省所定の教授要目に準據して,高等女學校·女子師範學校及びこれ等と同程度の各種女學校の裁縫科教科書として編纂したものである。

2. 裁縫教授の効果は基礎教授の徹底に俟つものが多い。本書は,裁縫の基礎知識を充分理解し得るやう組織的に整理し,それによつて技術の上達と應用·創作の能力養成とを期した。

3. 洋裁の教材はその範圍廣く,種類が多種多樣であり,且つスタイルの流行變遷に伴ひ,裁方·縫方にも變化がある。本書は,それ等の基調たるべき型の殆んど全部について,その型紙のつくり方,布の裁方·縫方を說明し,以て流行の變化に際し,自由に應用し得るやう注意を拂つた。

4. 從來,和服裁縫上の名稱が不完全なため,教授上少なからざる不便があつた。本書は,その不便を除くため充分の創意を加へた。

5. 學習者の理解を助け且つ自學自習に便ならしめるため,記述を懇切にし,著者の新工夫

に成る挿圖を多くした。なほ洋裁の色刷圖は單なる參考圖ではなく,本文の記述と完全に有機的な連絡を保つたものであるから,教授上にも自學自習上にも多大の便宜あるべきことと信ずる。

6. 製圖と型紙のつくり方とは,著者多年にわたる實際の經驗により,最も簡易な方法でなし得るやう工夫したものであり,且つ總べて實物の正しい縮尺を以てした。

7. 教材は,地方の狀況,教授時數等に應じて取捨選擇を自由にし得るやう,その配列に注意した。

昭和十年十一月

著者識

目次

緒言 裁縫學習上の心得……1

第一章 基礎技術……3

第一節 布接……3

1. 縫方……3

2. 布の縫合……12

第二節 單類の縫代……19

1. 縫代を表布に縫ひつけて縫目を丈夫にする仕方……20

2. 縫代を開かぬやうに綴縫をして縫目を丈夫にする仕方……20

第三節 單類の端の整理……21

1. 耳の整理……21

2. 裁目の整理……22

第四節 本紬……25

第五節 形の基礎縫……26

1. 風呂敷形布接……26

2. 單の角……26

3. 岐縫……28

4. 濶袖形布接……31

5. 筒袖形布接……33
6. 角 縫……33
7. 丸み縫……36
8. 布 留……38
第二章 綿布單衣……41
第一節 小裁單衣……41
1. 用 布……41
2. 身丈·身幅·裄……41
3. 小裁着物の形狀及び各部の名稱……42
4. 小裁着物仕立上寸法表……44
5. 裁方(一つ身裁)……45
6. 仕立方準備……49
7. 單衣各部の形狀と縫方の觀察……50
8. 仕立方……51
第二節 女物單衣……70
1. 出來上り圖……70
2. 女物單衣寸法表……72
3. 女物仕立上寸法の注意……73
4. 大 裁……74
5. 仕立方……79
6. 疊み方……85
第三節 中裁單衣……85

1. 用 布……85
2. 中裁單衣仕立上寸法表……87
3. 裁 方……88
4. 仕立方……89
第四節 男物單衣……94
1. 男物と女物の形の異る點……94
2. 男物單衣仕立上寸法表……96
3. 本裁男物裁方注意……96
第三章 着物の裁方總論……103
1. 一つ身裁……103
2. 三つ身裁……103
3. 四つ身裁……104
4. 二つ身裁·胸接裁·肩接裁の身頃の裁方……106
第四章 袷基礎縫……107
第一節 袷の布合……107
1. 袱紗形布合……107
2. 二つ折形布合……107
3. 濶袖形布合……107
4. 筒袖形布合……108
第二節 袷の縫目……108
1. 表裏別縫……108

2. 四つ縫……108
第三節 袷の端の整へ方……109
1. 表折返……110
2. 毛抜合……110
3. 裏 控……110
4. 衽……110
5. 褄……110
第五章 袷着物……115
第一節 仕立上寸法及び裁方の大要……115
第二節 小裁(一つ身袷)……115
1. 裏の裁方……115
2. 仕立方……117
第三節 中裁四つ身袷……125
1. 裏の裁方……125
2. 仕立方……126
第四節 女物袷……129
1. 裏の裁方……129
2. 仕立方……131
第五節 男物袷……136
1. 裏の裁方……136

2. 仕立方(衽附を四つ縫にする仕方)……136
第六章 襦 袢……139
第一節 女物袷長襦袢……139
1. 女物長襦袢寸法表……140
2. 裁 方……140
3. 仕立方……143
第二節 男物袷長襦袢……148
第三節 單長襦袢……148
第四節 半襦袢……148
第七章 女 帶……149
第一節 腹合帶……150
第二節 各種帶側についての注意……155
第三節 名古屋帶……156
第四節 裏附帶……159
第八章 綿布補綴……160
第一節 接 方……160
第二節 繼 方……162
第九章 綿 入……168
第一節 木綿綿……170

第二節　綿入の着物……170
第三節　一つ身綿入(紵仕立)……171
1. 袖(濶袖·筒袖……171
2. 身頃·衿·衽……171
3. 綿　含……172
4. 綿の入方……174
第四節　袂袖の綿入……181
第五節　古綿の入方……182

新裁縫教科書

卷一

緒　言

裁縫學習上の心得

1. 姿勢　裁縫をする時は姿勢が崩れ易いから,いつも腰を張つて確かと据え,脊骨と頭とを眞直にするやうに注意する。

正しい姿勢と適當な高さの机

2. 用具·用品　用具·用品は,便利に,且つ危險の虞がないやうに一定して配置し,これを亂さぬやうに使用することが大切である。使用後は丁寧に仕末しておかねばならぬ。

掛張の位置は,姿勢と

掛針の位置

作業能率とに大なる關係があるから適當に定めねばならぬ。その位置は,姿勢を正しくして右手を下げ,肱から下を直角に上げて,その拇指先より握拳だけ上つた所に掛張の先端が來るやうにする。

3. **裁縫の仕方の理解**　裁縫の仕方は,自然の道理に基いて最も便利な方法に考へられてあるから,何故にこの方法をとるかを充分に理解しておけば,技術の上達が早く,且つ工夫力が養はれる。

4. **鑑識眼**　技術を進歩させるには,その良否を見分ける力が必要であるから,常にこれを養ふやうに心掛けねばならぬ。

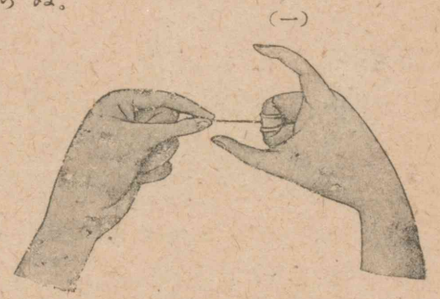
第一章

基礎技術

第一節 布接

1. 縫方

(イ)並縫運針　運針は,裁縫の基礎技術の中で最も大切な技術であるから,充分に練習するやうに心掛けねばならぬ。



(一)

縫針の持方　針は,(一)のやうに指貫に當て,(二)のやうに持つ。針は,指先から0.4cmほど出るものが適當である。

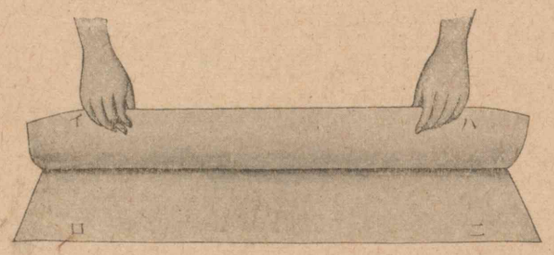
(二)

縫針の持方
㊀縫針を指貫に當てたところ。
㊁持つたところ。

木綿縫針の種類と長さ

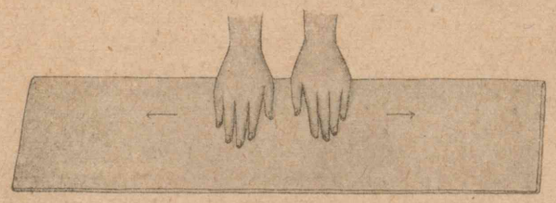
小ちやぼ	3.5cm
中ちやぼ	3.8cm
印針三の二	3.6cm
同　三の三	4cm
メリケン六番	3.2cm

運針用布の幅を二つ折にする仕方　下圖の(一)(二)(三)の順序にする.



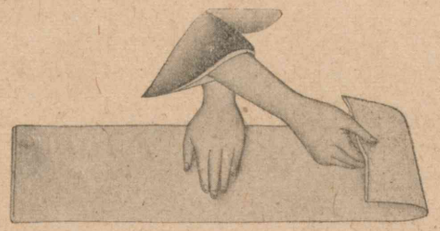
㊀ 布を机上に擴げて，イをロに，ハをニに重ねるつもりで自然に布を放す。

㊁ 指先を輕く動かして兩耳を揃へる。

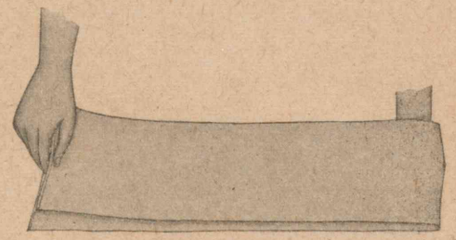


㊂ 輪の方に折を附ける。

用布の疊み方　運針用布は,使用し終つたならば,下圖のやうな手付と順序で正しく疊んでおく.

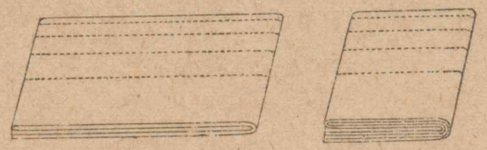


㊀ 丈を二つ折にする手付。



㊁ 兩端を正しく揃へる手付。

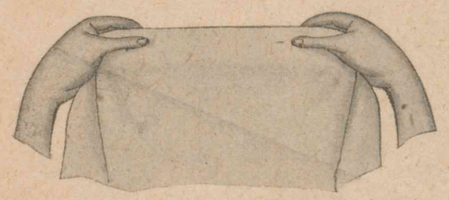
㊂ 輪の方を押へる手付。



㊃ 同じ手付で四つ折または八つ折にする。

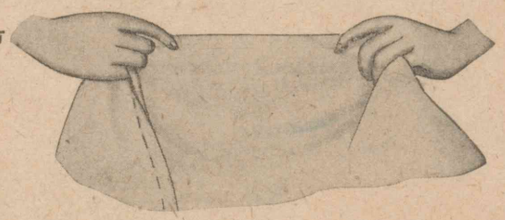
縫道　布の折山より1cmほど内の經(たていと)1本を縫道と定める。

布の持方　下圖のやうに持つ。



㊀ 運針の布の持方(手前)
右手は縫道を1針縫つた針を布と共に持つ。左手は右の拇指から凡そ15cm離し，縫道で指先と指先とが正しく向ひ合ふやうにする。

㊁ 運針の布の持方
(向側)



針の運び方

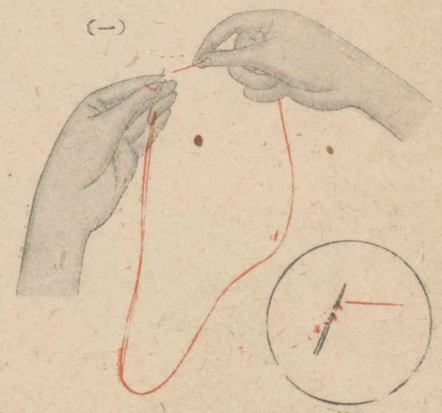
針の運び方の腕構

針の運び方は,前頁下圖のやうな腕構で,布を左右に張つたまま,腕を肩から正確に動かして,針尖に布を直角に當てるやうにする。針目は,普通0.4cm,細縫(こまぬひ)は0.15cm乃至0.1cmぐらゐである。

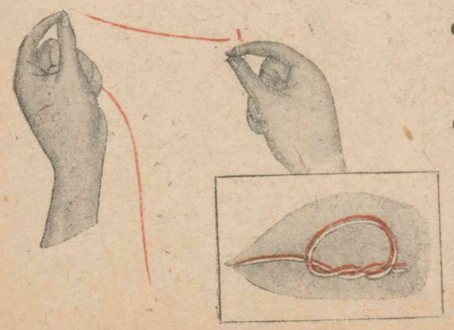
運針練習の注意　縫道と針目の大きさを定め,絲の端を留結にして留め,絲こきの練習もする。

留結　針でつくつた留結は,絲の太さに相當したものが出來るから,食指でつくる時も,その大きさを標準とする。

(一)



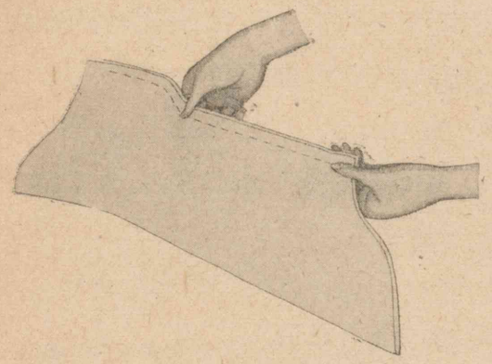
(二)



留結

㊀針を用ひて留結をつくる仕方。
針尖に絲を2卷してから針を拔く。

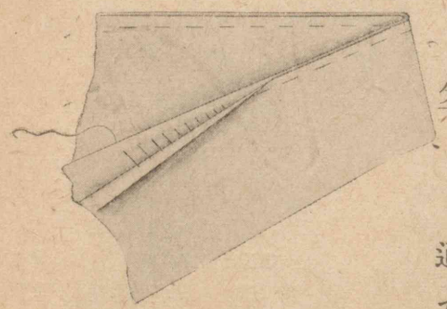
㊁食指で留結をつくる仕方。
右の食指に絲を卷き，縒つてこく。



絲をこく手付

絲のこき方

一定の所まで縫つたならば,一通り絲をこき,次に一方の手で縫目を確かと持ち,他の拇指と食指とで縫目を稍強く挾み,拇指の爪際の肉で10cm乃至20cmほどづつ數回こいて,絲を布と平らにする。



正しい縫目

縫目の良否の見分方

正しい縫目

各針目が縫道の通りに正しく縫つてあるもの。

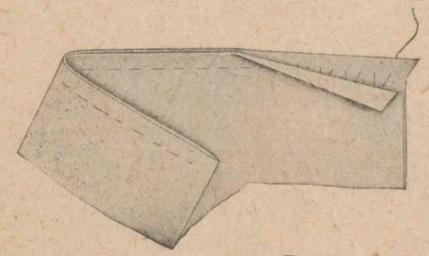
縫目を布の間から見て,絲が布と直角にわたつてゐるもの。

絲こきがよく出來てゐるもの。

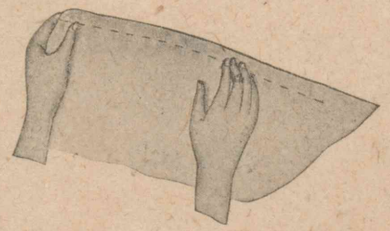
正しくない縫目 下圖のやうな縫目は正しくない。

㊀ 縫目が縫道の通りでないもの。

㊁ 各針目が縫道に乘つてゐないもの(おどり針といふ)。



㊂ 縫道の通りに縫つてあるが,針目に大小と裏表とがあつて布の間は絲が八字形にわたつてゐるもの



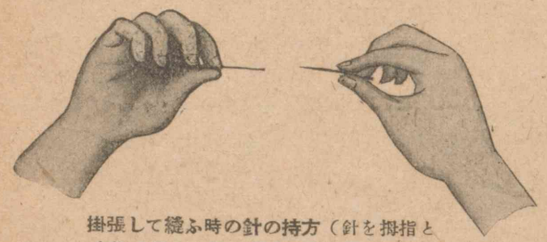
㊃ 絲こきの惡いもの(縫目が縮んでゐる。手で輕く撫でると縫絲が手に當る)。

注意 (1)縫目が曲るのは,拇指が縫道に正しく向つてゐないからである。

(2)おどり針は,指貫の塡め方が淺く中指の据りが惡いとき,肩の關節をみだりに動かしたときに出來る。

(3)絲が八字形になるのは,針尖に布を直角に當てぬからで,針目の大小は,針を押す力が不同のためである。

(4)絲がこけないのは,布を挾む力が弱いからである。



掛張して縫ふ時の針の持方（針を拇指と食指で持ち，針の本に中指を添へる）

(ロ)特種縫

布を掛張して縫ふ時,躾をする時,紮ける時などの針の持方は,上圖のやうにして,中指で針を進める。

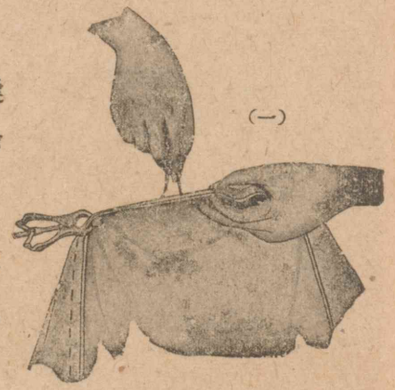
(1)抄縫・一針拔縫

特長 抄縫・一針拔縫は,縫目が確實で縫皺が出來ない特長がある。

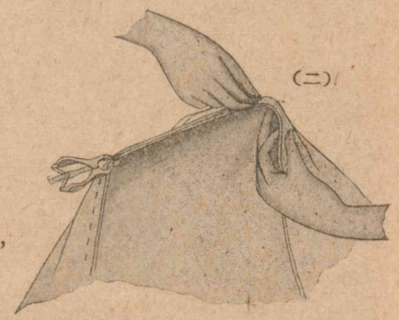
用途 厚地物または布を3,4枚合せて縫ふ時に用ひる。

抄縫 縫道を掛張して1針づつ抄つて絲を整へながら縫ふ。

一針拔縫 縫道を掛張して,針を布に直角に,前から向ふに,向ふから前に1針づつ拔いて絲を整へながら縫ふ。



(一)



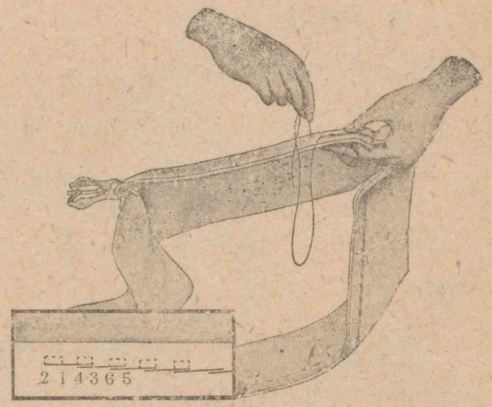
(二)

抄縫

㊀左手の中指を下に出た針の脇に當てて布を整へる。㊁左手の中指を針尖に當てて針を上に出すことを助ける。

(2)半返縫

特長 半返縫は,縫目の確實なことと縫皺の出來ないこととは一針拔縫・抄縫と同じで,その上,布を締める力は縫方のうちで最も強い。



半返縫

（上） 布の左端から縫ふ仕方

（下） 針使ひの順序。

用途 厚地の毛織物・帶地などを縫ふ時に用ひる。縫方の手付は抄縫と同じにする。

注意 半返縫は,縫道を充分に張つて絲を引かぬと,縫目が縮まる。

本返縫

(3)本返縫 表針目はミシンの縫目と同じやうに見えるから,一名ミシン縫といひ,主に飾りに用ひる。

2. 布の縫合

(イ)布合　甲學習用布の表を上にして机上に正しく擴げ,次に,乙學習用布の表を甲の表に合せて靜かに重ね(幅の中央部を主とする),掌を上下に動かして全體を輕く押へる。

注意

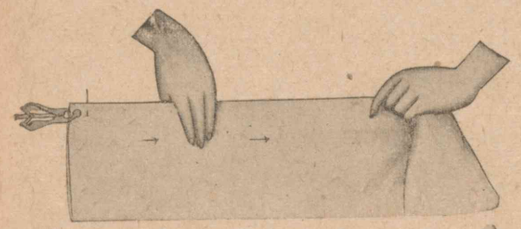
(1)布合の時,手に力を入れて上の布を撫でると,その方向に下の布が緩む。

(2)一方の布の一部が特に縮んだ物は,これを伸し,また弛みの直らぬ物は,その部分に自然に落ちつける。

(ロ)待針　待針は,布合がずれぬやうに押へておくものである。

待針の打方　待針を縫道に垂直に刺して,縫道と直角に 0.3 cm 抄つて打つ(多く抄ふと不正確になり易い)。距離は,運針の時の左右の手の間ほどにする。

掛張して布合をする仕方　布が平らなものは,縫道の右端を合せて押へ,掛張して張り,次頁の圖のやうな手付で布を合せ,終りに待針を打ち,間は $\frac{1}{2}$,$\frac{1}{4}$,$\frac{1}{8}$ といふ順序に打つ。

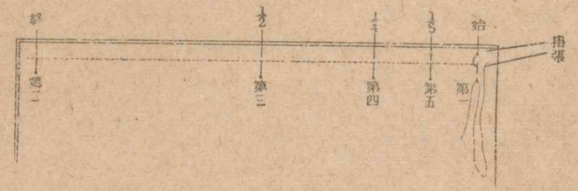


㊀ 縫道の右端を合せ待針して張り布をこき合せる。

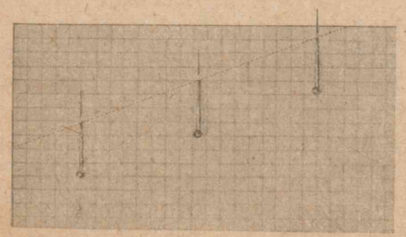
㊁ 縫道と直角に待針を刺す手付

㊂ 針際の縫代を左指で整へる。

㊃ 布を 0.3cm ほど抄ひ縫道と直角に打つ。



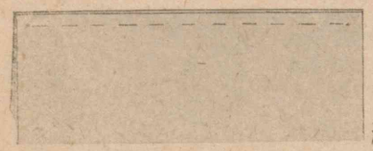
㊄ 待針を打つ順序



2 枚とも縫道が斜のときの待針の打方　机上で布を合せ,布目にならつて待針を打つ。

(ハ)絲留　縫目の初めと終りは,その個所に從つて,それぞれ適當な絲留をする。

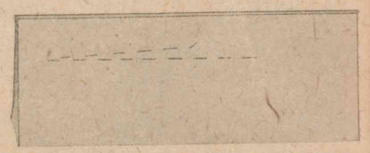
結留　留結で留める仕方で,力が最も弱いから,輕く留める個所に用ひる(7頁留結參照)。



並留

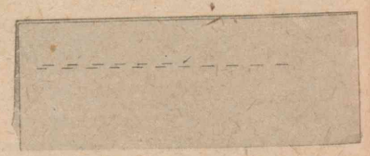
並留　絲留の所が縫込まれる個所に用ひる。縫始は留結一針返縫,終は一針返留結にする。

返留　結玉を嫌ふ所や縫目を丈夫にしたい所に用ひる。



返留

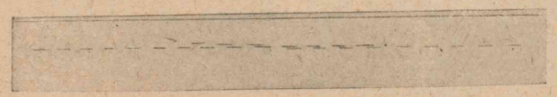
注意　力の最も強い留は抄留・細結留などであるが,その仕方は後で説明する。



斜返留

(ニ)絲繼　縫目の途中で絲が不足した時は,その個所に適當した仕方で絲繼をする。

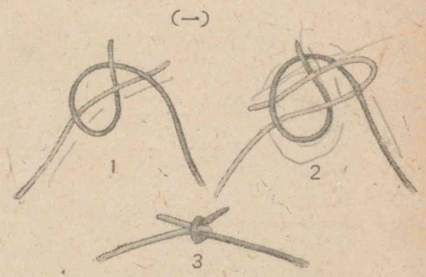
重繼　最も丈夫な繼方である。新たに繼ぐ方の絲に留結をつくり,前の縫目に



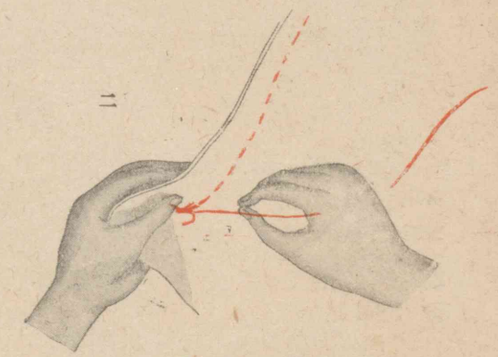
重繼

5cm ほど重ねて縫ふのである。

結繼　右圖のやうな順序で機結にし,1針返して縫ひ始める。



注意　機結は解れ易いから,丈夫に繼ぐ個所や絹絲の時には用ひられぬ。

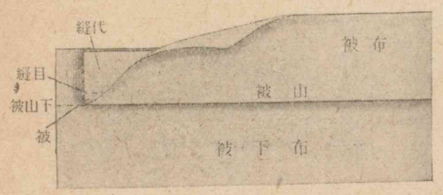


機結
㊀結び方順序。㊁縫目の途中で機結をする手付。

(ホ)縫代・縫込　並縫代は1cm乃至1.5cmぐらゐである。これより多い時は縫込といふ。丈の縫込は,普通,立込といつてゐる。

縫代や縫込は,割り開くことも,片返にすることもある。縫代・縫込は,表布と布合の關係になるから,表布に合せて平らに落ちつけねばならぬ。

(ヘ)被　縫代を片返にする時は,縫目に被をかける。縫代を返して高くなつた方を被布(ひぜぬの),被の山を被山といひ,低い方の布を被下布,その被山に合ふ所を被山下といふ。

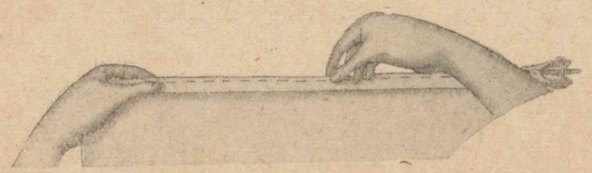


縫代と被

被の深さ　普通0.15cm乃至0.2cmぐらゐにする。針目が0.2cmほどで,確實に縫つたものは0.1cmぐらゐでよい。

被の掛方

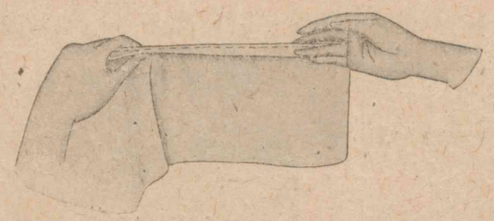
掛張を用ひて被を掛ける仕方　掛張して縫目を輕くこいて整へ,下圖のやうに左手で被の深さを定め,右手で折をつける。



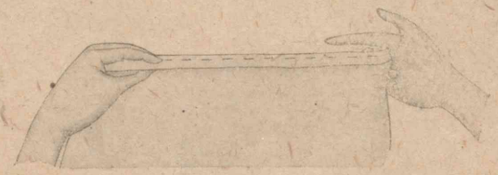
掛張して被を掛ける手付

注意　布を斜または横に縫つたものは,この仕方にすると伸すことがあるから,机上で折り,上から押へる。

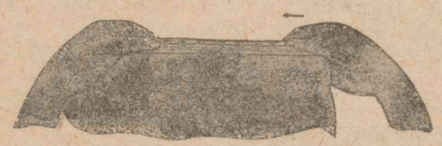
掛張を用ひずに被を掛ける仕方　下圖のやうな順序と手付でする。



㊀ 縫目を張り兩手で被を折つて右手の指の間に挾む。



㊁ 右手の中指先に折目を掛けて張る。



㊂ 布を張つた右手の3指を屈しながら拇指と食指を進めて折をつける。

㊃ 布を張つた3指を伸しながら拇指と食指をもどして折を一層よくつける。

裏から被を掛けるのは便利であるが,被山下に折がついて見苦しくなるから,丁寧にする個所は表から被を掛け,折目のつかないものには鞭を掛ける。

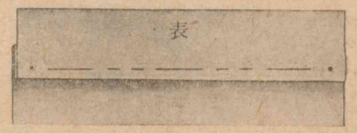
(ト)鞭　主に被を崩さぬやうに押へるもので

あるが,布合の假綴をすることもある。

並躾　躾絲で被を押へておき,仕上をしてから取り去るもので,一目落·二目落·三目落などの種類がある。

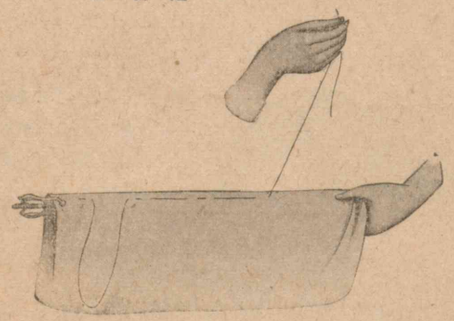
一目落

二目落



三目落

並躾の仕方　被山より0.5cmの所を針道として掛張にし,大針は3cm,小針は0.5cmぐらゐにするのが普通である。針は躾針もあるが,絎針を用ひても差支ない。



躾の掛方手付

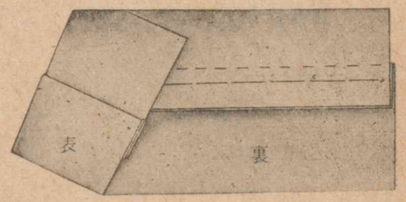
縫躾　躾絲で並縫と同じ針目にして,仕上後は取り去る。縫躾は,縮緬·毛織物類に用ひる。

縫躾

並躾·縫躾の力　布を押へる力は,縫躾が最も強く,三目落·二目落これに次ぎ,一目落は最も弱い。

隱躾　地質が硬く被の折がつかぬもの,または被が崩れ易い個所などを,布地と同色の縫絲で目立たぬやうに押へ,取り去らずにそのまま使用する。

隱躾の仕方　針道は被山より0.5cmの所にして,表針目は0.1cm,裏針目は凡そ2cmにする。手付は,裏を見て,表針目を出す所に左食指を當て,針が指に觸れたら直ちに針を上げて針目を加減する。また掛張してする手付は,耳絎の仕方と同じである。特に丁寧にする所は,表を見てすることもある。



隱躾

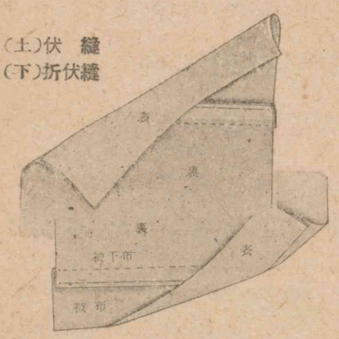
第二節　單類の縫代

單(ひとへ)類の縫方はすべて縫目を丈夫にし,縫代を見苦しからぬやうに,また邪魔にならぬやうに整へなければならぬ。

1. 縫代を表布に綴ぢつけて縫目を丈夫にす

る仕方

(イ)伏縫　縫代が耳の時にする仕方である。

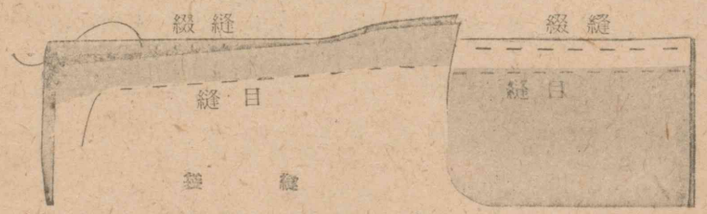


伏縫の針目　表は 0.1 cm, 裏は 1.5cm 乃至 3cm

(ロ)折伏縫　縫代が裁目の時,被下布の縫代を0.5cm深くして縫代をくるみ,表に縫附ける仕方である。

注意　隱躾と伏縫とは,針目は同じであるが,隱躾は被を押へ,伏縫は縫代を押へる點が異なる。

2. 縫代に綴縫をして縫目を丈夫にする仕方



(イ)袋縫　縫代が裁目の時,耳が見苦しい時にする。この仕方は,布の表を外に端の縫込まれる部分を殘し,極めて淺く縫ひ,次に布の裏から縫目を縫ふ。

(ロ)二重縫　縫代が耳の時にする。

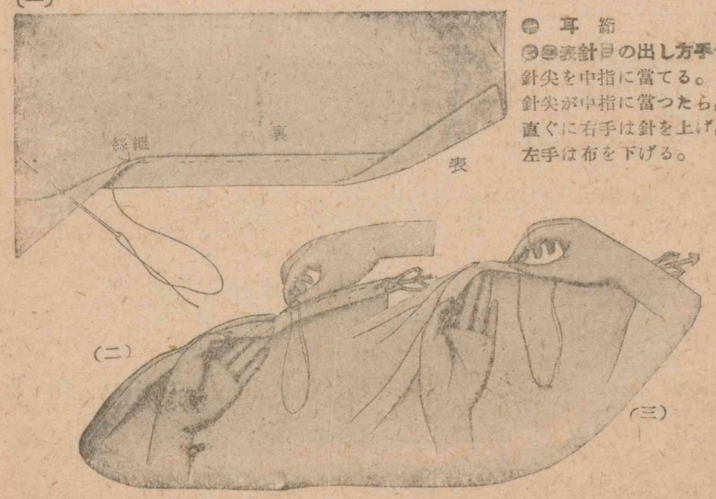
第三節　單類の端の整理

1. **耳の整理**　耳は,そのまま使用することもあり,丈夫にするため二通りほど並縫をしておくこともあるが,普通は,耳絎か三つ折絎にする。

(イ)耳絎　針は絎針を用ひ,掛張して絎ける。

絎代の折方　經は布目が眞直に通つてゐるから,布目通りに折る(被掛と同じ手付で)。

絎方　絎道は耳際 0.2 cm の所,表針目は 0.1cm, 裏針目0.2cm,表針目の距離は凡そ折代×1.5ほどにする(但し最大は 4 cm)。



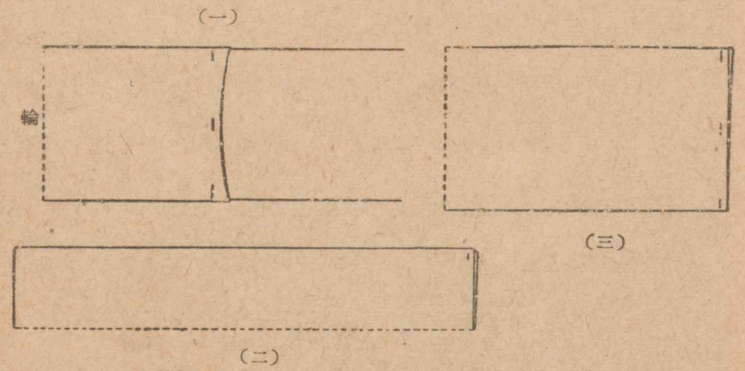
耳絎
表針目の出し方手付
針尖を中指に當てる。
針尖が中指に當つたら,直ぐに右手は針を上げ,左手は布を下げる。

絲留絲繼　布の間で目立たぬやうにする。

注意　すべて絎ける時に絲をあまり長くすると,時間と勞力を浪費する上に,絲を傷める。

2. 裁目の整理　布の裁目は,三つ折絎・折絎・三つ折縫などにし,また布やテープなどでくるんでおくこともある。

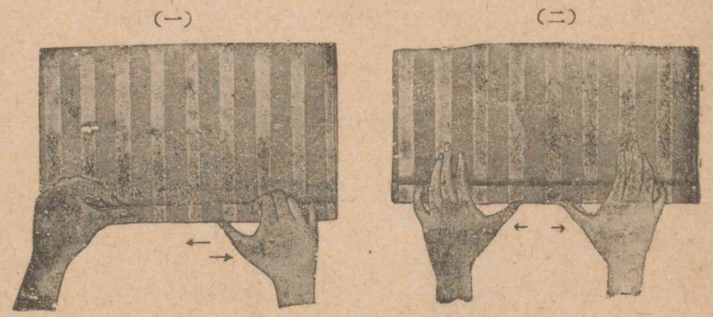
(イ)裁目の歪みを正しく裁ち切る仕方　下圖のやうな方法にする。



㊀ 丈の端より凡そ幅と同寸ほど耳を揃へて折り,輪の方より同寸に計つて裁ち切る。 ㊁ 布幅を二つに折り,合標をして擴げ,その間に通篦をして裁ち切る。 ㊂ 布丈を二つに折り,山から同寸に計り,通篦をして裁ち切る。

(ロ)三つ折絎

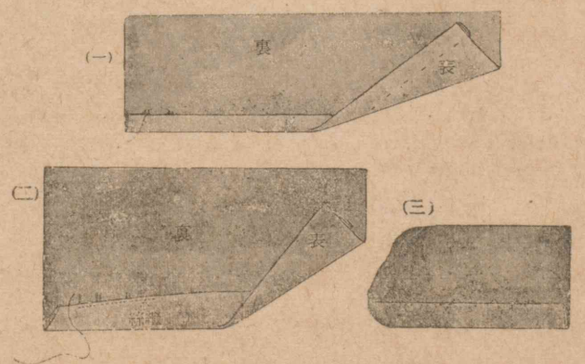
三つ折の仕方　先づ折代を折つて,それを二つ折にする。布を横に淺く正しく折るには,机上で各經を折り重ねるつもりで折る



布を横に淺く折る仕方

㊀ 幅の廣い所を折る時の手付(兩手で折代を定め,右手の小指で折代を押へ,拇指で折をつけながら左方に進める)。 ㊁ 並幅ぐらゐのものを折る時の手付(兩小指で折代を押へ,兩拇指で同時に中より左右に折をつける)。

絎方　掛張して,表針目は 0.1 cm, その距離は凡そ 1.2cm にし,裏針は折山の中を通して被がかからぬやう,また布の間から絲が八字形に現はれぬやうに注意する。表針目は耳絎と同じに中指で加減し,絲留と絲繼は折山の中でする。

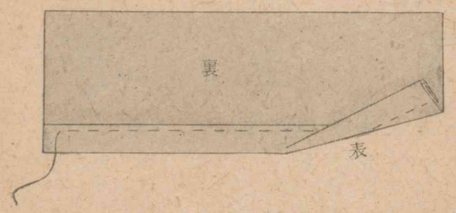


㊀ 三つ折絎　㊁ 折絎　㊂ 絎方の悪いもの

(ハ)折絎　折代を定め,次に絎代を1cmにして,三つ折絎と同じ絎方にする(前頁圖)。

(ニ)三つ折縫　布を三つ折にして並縫にする。

(ホ)縢縫(かがりぬひ)　裁目を解れぬやうにする仕方で,手付は並縫と同じにして,布をまきながら縫ひ,絲をつれぬやうに注意して整へる。



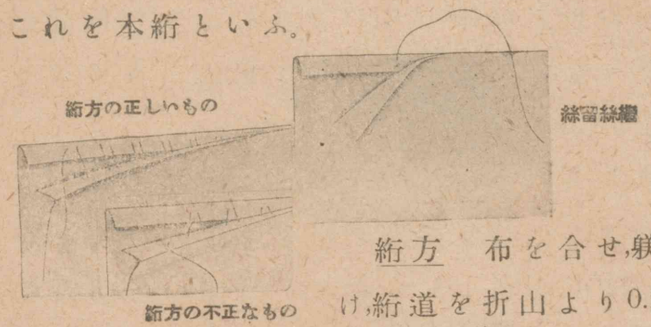
三つ折縫

縢縫

(ヘ)裁目を布でくるむ仕方　布の端に別布を縫ひ附け,端をくるみ,裏側で表に針目を出さずに絎ける(次節參照)。

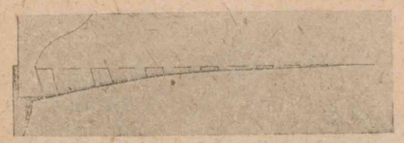
第四節　本　絎

布を2枚合せてその端を整へるのに,縫ふことの出來ぬ所は,表から布を折合せて絎ける。これを本絎といふ。



絎方　布を合せ,朕をかけ,絎道を折山より0.2cm乃至0.3cmの所にする。針目は手前を凡そ1cm,向側を小針にして,絲を直角にわたす。絲が八字形になつたものは,細かく絎けても布のしまりが悪い。

絲留・絲繼　絎け始は,絎道の奥で結留にし,終は返絎にする。絲繼は絲留と同じ仕方又は裏絎にする。



縫目の所を本絎にする仕方　普通に絎ける時は一針目おきに,細かく絎ける時は針目ごとに絎ける。

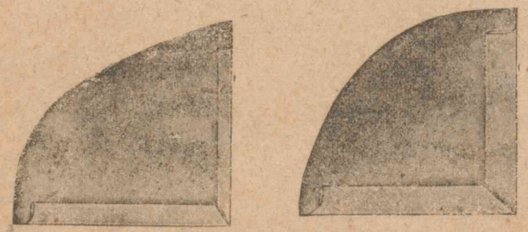
第五節　形の基礎縫

1. 風呂敷形布接　幾枚かの布を縫ひ合せて大きい風呂敷のやうな平らなものをつくる時は,先づ各布を伸縮がないやうに平らに地直しして形を整へ,平らに布合して(縫道のみでなく布全體を)接ぎ合せる。

2. 單の角

(イ)折方　布の横と縦を正しく折つて,角を直角にし,折代は固くならぬやうに開いて額縁に整へる。

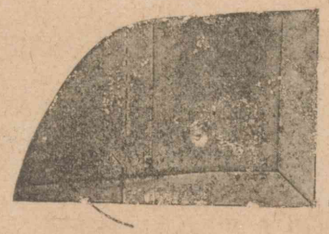
三つ折紵の額縁の折方



同上出來上り
(左)折代の深さが縦と横と異るもの。
(右)同上の同じもの。

(ロ)縫目及び角の紵方　耳紵・三つ折紵の途中に縫目があつた時は,拔針にして縫代の端と表縫目の被布の方とに針目を出して押へる。角の額縁は下圖説明のやうに紵ける。

(裏)



(表)

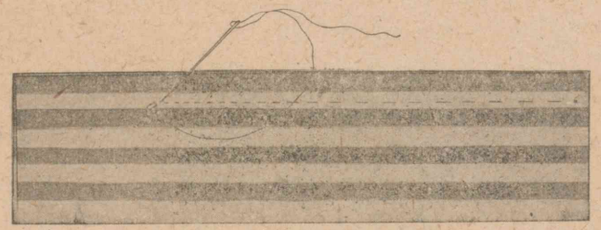
單角及び縫目の紵方

イロの間は本紵。
イハ・イニの間は各々0.5cm にしてハイニに針目を出す。
ホ(縫代の端)・ヘ(縫目)とに針目を出して押へる。

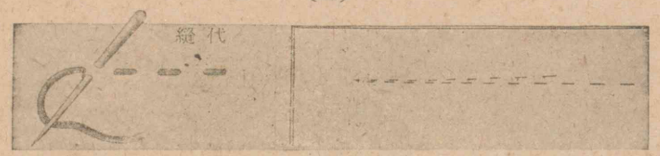
3. 岐縫　岐縫とは,布の途中まで縫ひ合せてその先を二つに割つておく仕方をいふ。

(イ)絲留　岐際は最も丈夫な抄留にする。

(一)



(二)



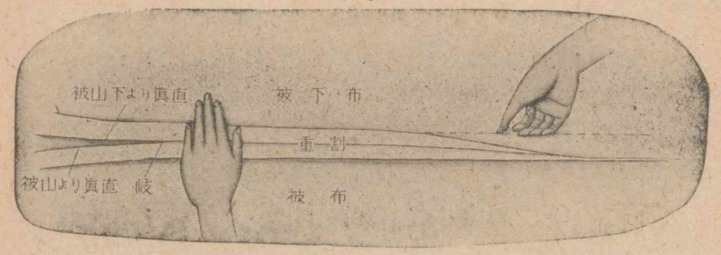
(三)

抄　留

㊀ 留の凡そ 5cm 手前から縫目を小針にして，**縫代**の方から絲と布を斜に抄ひ，針に絲を掛ける。
㊁ 斜返は3針ほど縫目に揃へてからする。
㊂ 絲を充分に引き締める手付。

(ロ)縫代の整へ方　重割の長さは,縫代の深さに比例する。重割が10cm以上になる時は割綴をする。

(一)

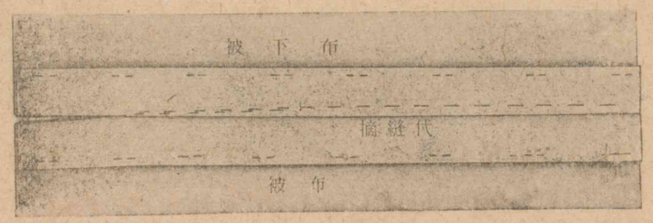


(二)

縫代の重割の仕方

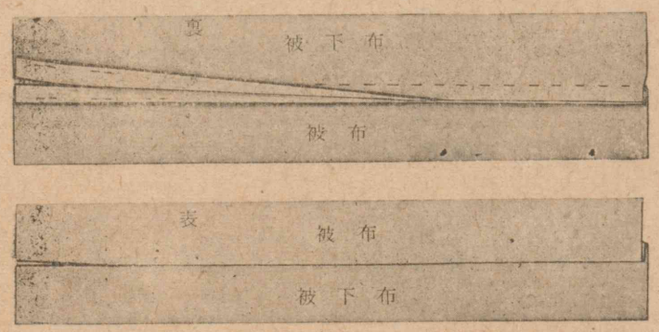
㊀ 岐の方を正しく整へ左手で押へ，右手で縫目を張り加減にすると，被下布の縫代が自然に折れ返へるから，その通りに重割をする。
㊁ 縫込の多いものは，岐際より 8cm の所から全體に 0.5cm の重割にして割綴をする。

(ハ)重割の摘縫　被下布の縫道を定め,縫合せぬ前に重割をして,それを縫代にする。摘縫は割綴を省くから簡單であるが,綻び易い缺點がある。



岐縫の摘縫

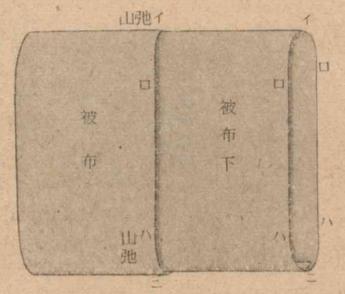
(ニ)絎方　岐を絎ける時は,耳絎・三つ折絎の別なく,岐際の左右には必ず針目を出し,並縫代の時は,岐際の被布の縫代を1,2針綴ぢつける。



岐際の絎方

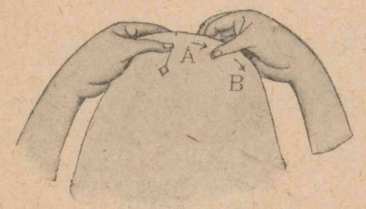
4. 濶袖形布接

(イ)布合　2枚の學習用布の丈を平らに合せて,縫代を片返にして濶袖形(下圖)にし,表縫目イロ・ロハの間を見ると,被布の方は張り,被下布の方は弛み,上部(イロ)・下部(ハニ)の曲形になつてゐる所は一層目立つ。それは,被布が外側,被下布が内側の關係になつてゐるので,被布を布の厚さだけ弛めなければ平らな縫合が出來ないわけである。ロイロ・ハニハで被布を弛めるのを山弛(やまゆるめ)といひ,ロハの間で被下布を張るのを釣合張(つりあひばり)といふ。

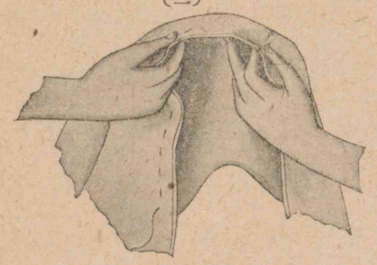


濶袖形

(一)



(二)

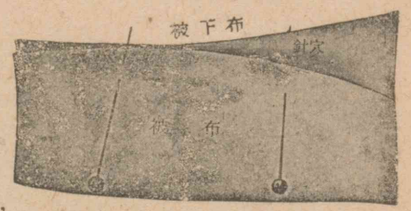


山弛

㊀ 布合手付　㊁ 縫方手付

山弛の布合待針　被布を前にして,山を合せて待針をAに打ち,次に被布を外側にして,曲面のままで平らに布を合せ,Bに待針を打つ。

釣合張　濶袖形布合の上下兩山弛の間は曲形に續いてゐる釣合で,被下布が弛み加減になるから,被下布をその長さの凡そ $\frac{1}{300}$ 張つて縫ふ。



釣合張の待針

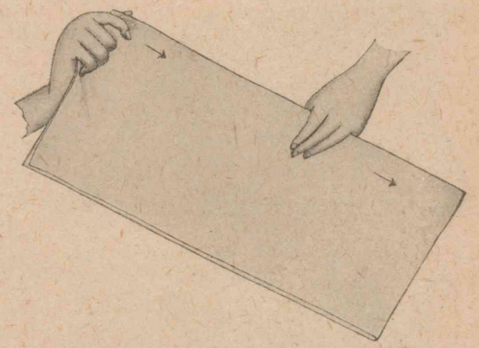
待針の仕方は,被下布を向側にして始め,平らに布を合せて待針を刺し,向側だけを拔き,針跡を目標にしてつめるのも便利である。

(ロ)縫方　弛んだ方を手前にして,布を充分に張り,弛みを平均にして縫ふ。

5. **筒袖形布接**　筒袖のやうな圓筒形の布合は,被布全體を山弛にする。

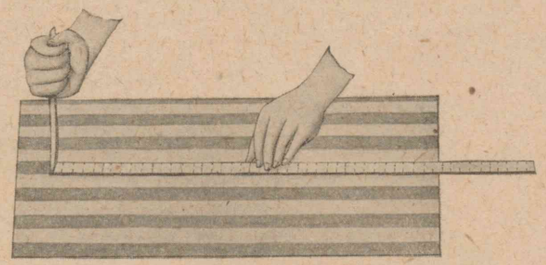
6. **角縫**(かくぬひ)

(イ)布合　丈の兩端を合せて右手に深く持ち,左手でこき,一度振つて,輪を左にして机に置き,全體を掌で押へて平らに合せる。

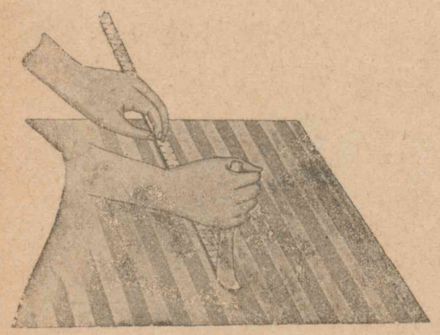


持つて丈を二つ折にして布合をする仕方

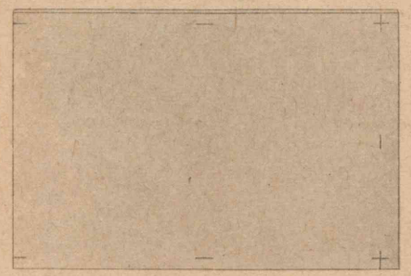
(ロ)標附　丈標は,幅の眞中・兩脇の順に物差を縦の布目に添へ,左から右に進め,物差の右端に篦を添へて標をするのが普通である。



丈の標附



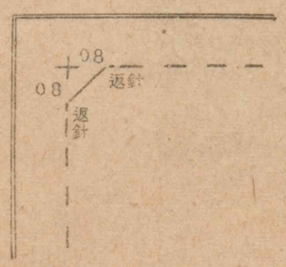
幅標は,左上圖のやうに,先づ物差を耳または縦の布目と直角に當て,物差の端に篦を添へて標す。



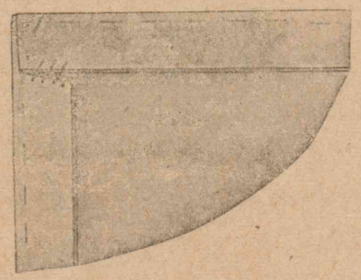
丈・幅の標附

注意 篦標は,こすらずに上より押して,1cm ぐらゐの大きさにする。

(ハ)縫方 物を入れる袋などは,角で1針返して標通りに縫ふが,帶や袂の角のやうに表から見て直角に美しく仕上げる時は角を縫ひ殘す。

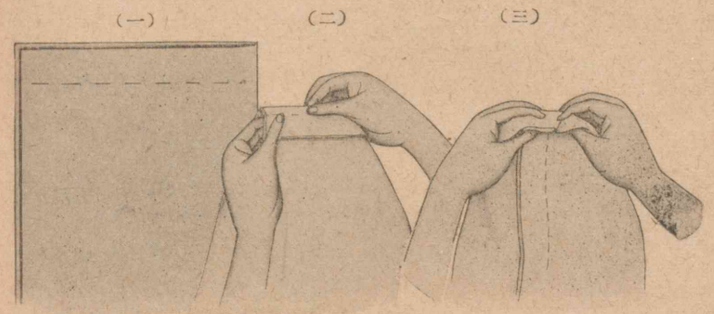


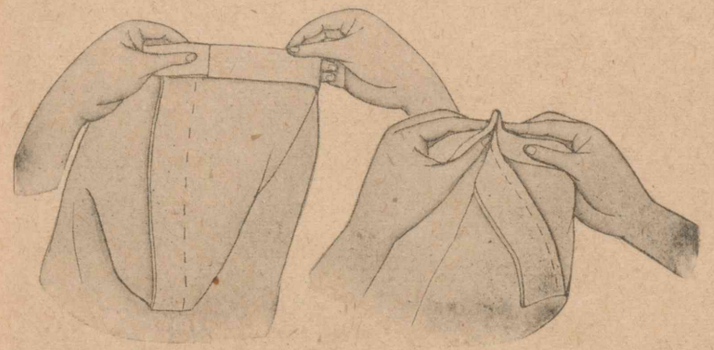
角の縫方



角の縫代の整へ方

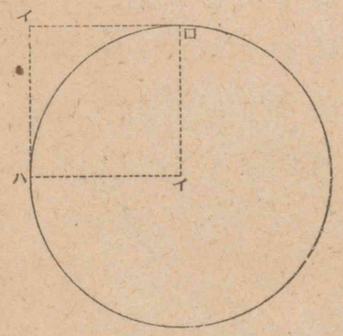
(ニ)直角の一邊を縫ひ一邊を紵ける仕方 布の幅を二つ折にし,兩端の幅と丈を定め,下圖のやうに布を正確に整へて隙なく押へつつ次の仕事をするやうにして直角に折り,本紵をする。



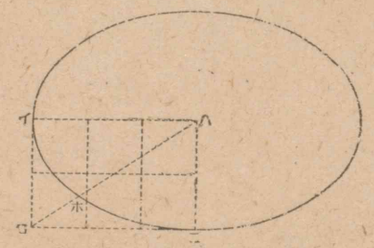


直角の一邊を縫ひ一邊を折る手付

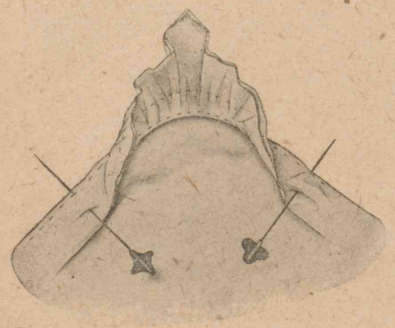
㊀輪の角は 0.5cm 縫ひ殘す。
㊁被を表裏からもち直す。
㊂被を押へながら,折山を指の間に挾んで折る。
㊃縫目を正しく合せて紵代を折る。
㊄折り重つた布を押へて角の布合をする。
㊅角に待針を打つ。



丸　み　形



楕圓丸みの形



丸みの縫代は丸みのうちにおさめる

7. 丸み縫

(イ)標附　和服に用ひる丸みは,大小とも圓周の$\frac{1}{4}$か楕圓周の$\frac{1}{4}$に限る。

丸みの形

イロ・イハを丸みの寸法にして直角にする。

イロを半徑とし,ロよりハまで弧をつくる。

楕圓丸みの形

イロ＝丸みの寸法

ロニ＝凡そイロ×1.5として長方形をつくる。

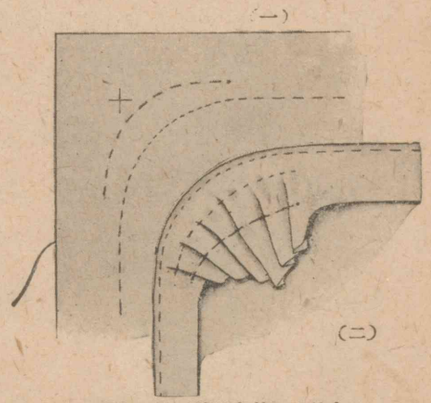
ハホ＝$\frac{イロ+ロニ}{2}$

イホニ＝曲線

(ロ)縫方　丸みの部分は小針に縫ひ,絲を少し釣り加減にする。

(ハ)縫代の整へ方　丸みの左右の縫代を表側の布と正しく布

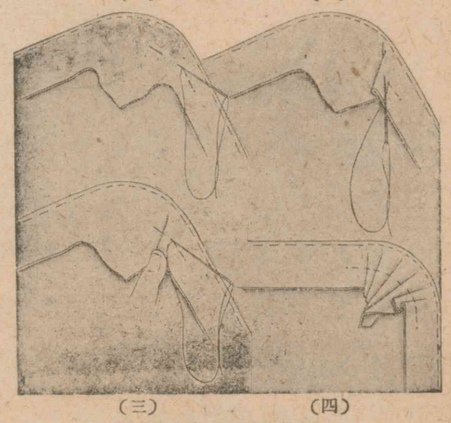
合して待針で押へると,丸みの部分の縫代が立つから,それを襞または縫縮にし,角立たぬやうに丸みのうちにおさめて,表と平らに布合をする。



縫縮と襞で縫代を整へる仕方
㊀縫縮の縫道　㊁襞の整へ方

(ニ)襞の取方　縫目に倣つて一針抄ひ,左拇指で布を押して襞をつくり,針尖を丸みの方に向け,襞の先を開いて角立たぬやうにする〔下圖(一)(二)〕。丸みの縫目に倣つて襞を押へる(圖四)。

注意　出來上り2cmの丸みは襞の數を6とし,1cm增すごとに襞1を加へる。



襞で縫代を整へる仕方

(ニ)正しく出來てゐない丸み

(1)縫代を縮めすぎたものは,被の深さが平らでなく,被山がうねつてゐる。

(2)縫代の縮め方の足りないものは,形が整はない。

(3)角が出來るのは,襞の位置や深さが不自然なものである。

(4)襞が重つて固くなつたもの。

8. 布留　岐際の布を整へて丈夫にする仕方である。布留の種類には,三つ留·四つ留·八つ留·門留などがある。

(イ)三つ留　1枚の布を2枚の布で挾んだ岐際の留をいふ。

三つ留の仕方

留の位置　縫目の絲留より0.3cm先で被山の外に絲が出ない所

針道の順序

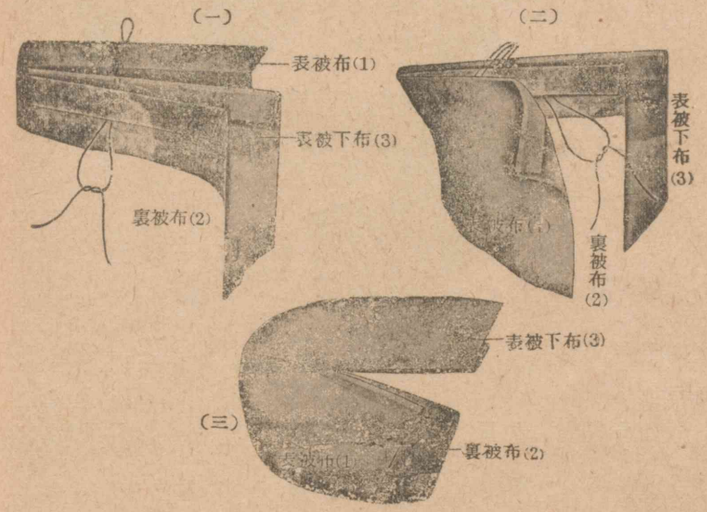
次頁圖說明のやうに,表被布を(1),裏被布を(2),表被下布を(3)とし,2(3)(1)(3)(2)の順にする。

A　(2)は裏側より被山に出す。

B　(3)は被山下を極く淺く摘んで貫く。

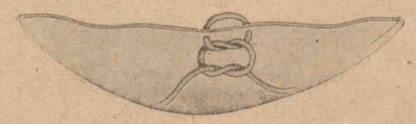
C　(1)は被山の內側で緯3本を抄ふ。

D　(3)(2)は前の絲より布目3本離して貫き,二布の裏で細結にする。



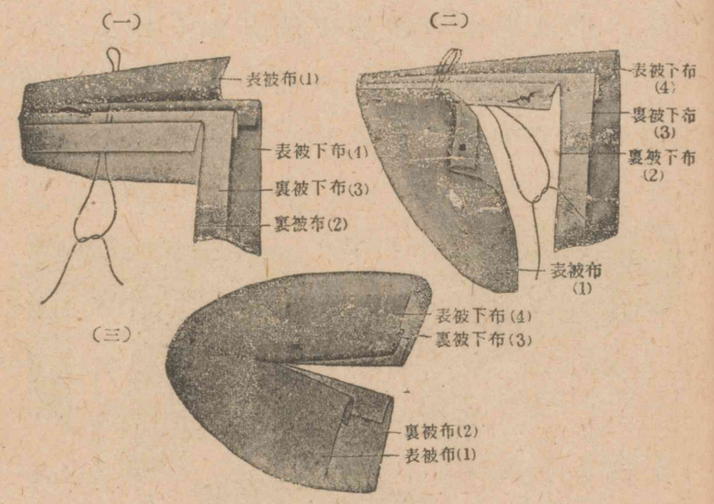
三　つ　留

㊀裏から留める仕方　㊁表から留める仕方　㊂出來上り



細　結

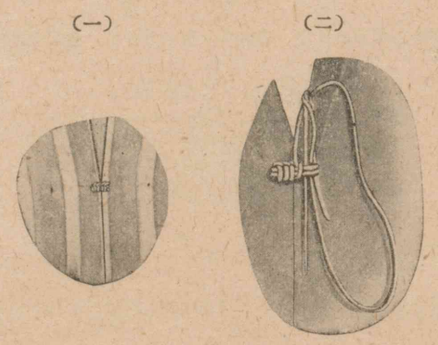
(ロ)四つ留　針道(2)(3)(4)(1)(4)(3)(2)の順序にして,(2)の裏で結ぶこと,大體三つ留と同じである(次頁圖參照)。



四つ留

㊀裏から留める仕方 ㊁表から留める仕方 ㊂出來上り

(ハ)門留　衣服を仕立て上げてから,岐際が綻びぬやうに留めておく仕方である。



門留

㊀出來上り ㊁岐の留際に裏表とも絲を2本わたしてかがり,裏の方で絲留をする。

第二章

綿布單衣

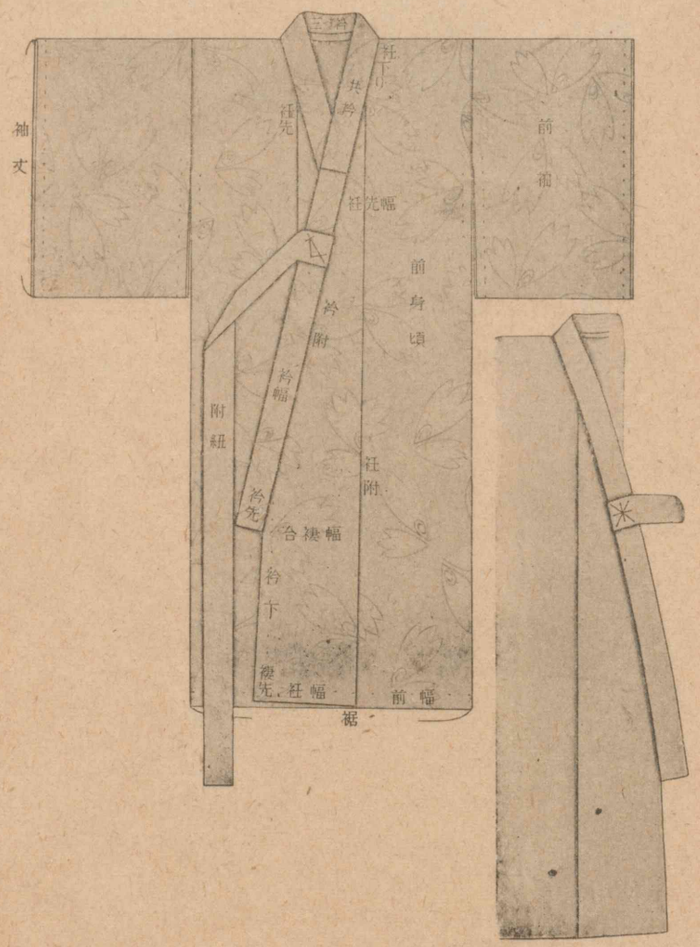
第一節　小裁單衣

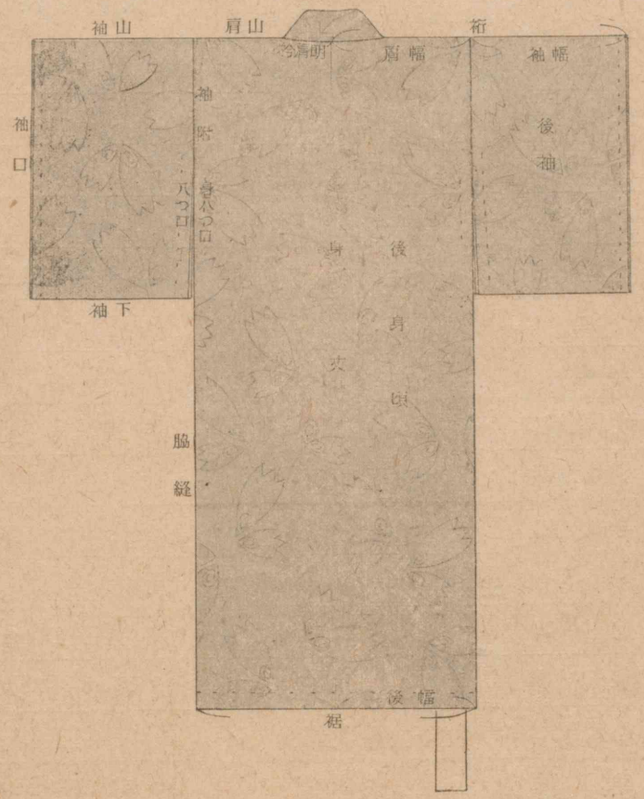
1. **用布**　小兒用衣服の地質は,輕く軟く,染色は,子供の眼に刺戟の少いもの,水に丈夫なものなどが適當である。

2. **身丈·身幅·裄**　嬰兒の着物は,身丈·身幅·裄など身體に比べて大きくつくる。それは,襁褓を用ひるためと軟弱な身體を保護するに必要なためである。3,4歳以上の小兒用は,袖丈·身丈·裄などを短く,揚もなるべく少くして充分に活動が出來るやうにする。

3. 小裁着物の形狀及び各部の名稱

（前）





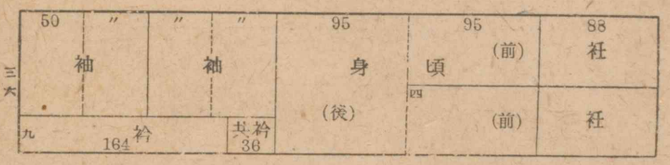
4. 小裁着物仕立上寸法表

名稱		仕立上寸法 年齢 1,2歳	仕立上寸法 年齢 3,4歳	裁切寸法
袖	丈 長袖	濶袖 27cm 祝着 50cm	袂袖50cm	袖丈＋2cm
	丈 筒袖	21cm	23cm	
	丈 元祿袖	23cm	25cm	
	丸み	凡そ7cm	凡そ8cm	
	幅	19cm内外 祝着23cm	23cm 筒袖は＋2cm	袖幅＋3cm以上
	口	13cm内外 筒袖適宜	13cm	
	附	13cm	15cm	
身頃	丈(裁切)	75cm 内外 祝着95cm 内外	90cm	
	衿肩明(裁切)	3.5cm	5cm	
	身八つ口	10cm	10cm	
	後幅・肩幅	いつぱい	同	並幅(並幅を左右の身頃とする)
	前幅	いつぱい	同	並幅の $\frac{1}{2}$
	衽下り	10cm	10cm	衽下り－3cm
	胸明(衽下りの所の縫込)	衿肩明－{2cm / 1.5cm}	衿肩明－4cm	
衽	衽幅	いつぱい	同	13cm以上並幅の $\frac{1}{2}$ まで
	衿下	19cm	23cm	
	合褄幅	衽幅－0.4cm	同	
衿幅		3cm	4cm	衿幅×2＋2cm 裏衿附＝衿幅＋3cm } 以上
裾總幅		90cm乃至98cm		

5. 裁方(一つ身裁)

(イ)說明 (1)嬰兒祝着

用布 並幅 478cm 裁切裾總幅 108cm



積り方

総丈＝袖布丈×4＋身布丈×3－布衽下り
478cm 50cm 95cm 7cm

身布丈＝(総丈－袖布丈×4＋布衽下り)／3

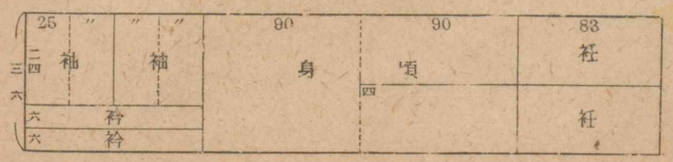
袖布丈＝(総丈－身布丈×3＋布衽り)／4

衿布丈＝(身布丈－衿下＋衿肩明＋衿先縫代)×2
164cm 95cm 20cm 4cm 3cm

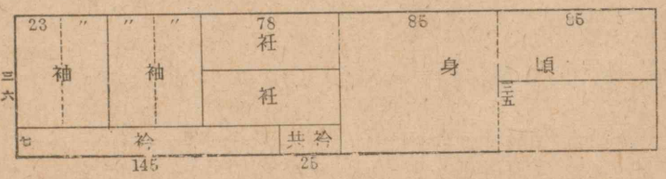
衽布丈＝身布丈－布衽下り
88cm 95cm 7cm

(2)筒袖・元祿袖

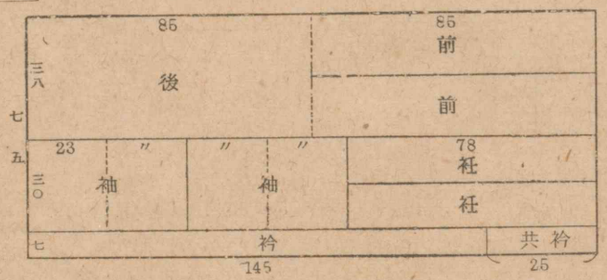
用布 並幅 363cm 裁切裾總幅108cm



用布　並幅 340cm 裁切裾總幅 101cm



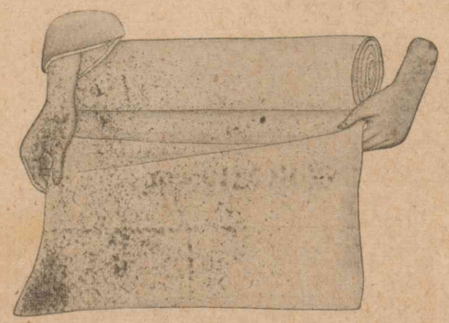
用布　75cm 幅 170cm



用布の幅が並幅の凡そ2倍あるものは,$\frac{1}{2}$の丈で同じほどのものを裁つことが出來る。

(ロ)實物裁方

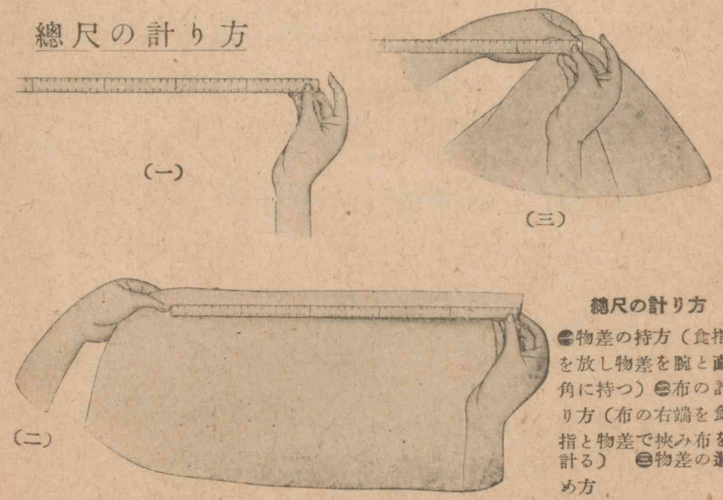
地直し　布全體を調べる。布の或部分が伸び或は縮み,また横の布目が非常に斜になつてゐる時などは,裏から霧を吹き,布目を整へ,卷棒に卷き,暫く置いて火のしをする。



地直しの布目を整へる手付

耳の部分が特に伸びたものは,濕りをかけて縮め,反對に釣れてゐて伸びぬものは,耳に斜の切目を入れて平らにする。

總尺の計り方



總尺の計り方

㊀物差の持方（食指を放し物差を腕と直角に持つ）㊁布の計り方（布の右端を食指と物差で挾み布を計る）㊂物差の進め方

布調べをしながら總丈を計る仕方

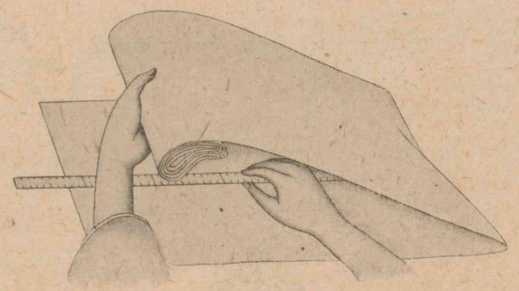
上圖のやうに物差を持ち布を机上に擴げ幅の手前で計る。

注意　用布に織傷・染斑(そめむら)などがある時は,目立たぬ所に廻して裁たねばならぬから,その位置を計つておく。

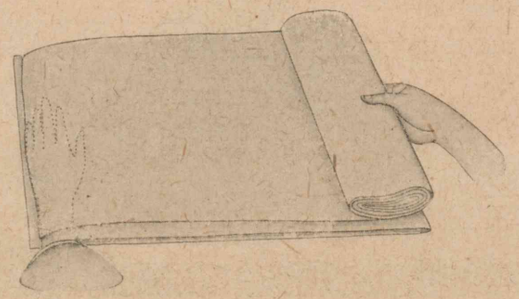
卷方　衿衽にする方から表を中にして卷く。

裁斷　各自の仕立上寸法によつて積り方計算をなし,その寸法通りに折り疊み,誤りがないか,模様などの工合がよいかどうかを調べた上,袖・身頃・衿・衽を切り離す。

(一)



(二)

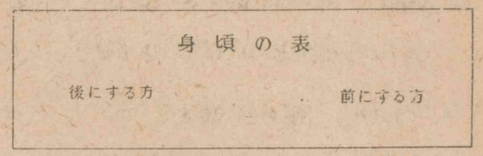


積り方の折疊み手付
㊀ 袖丈の計り方　㊁ 折方

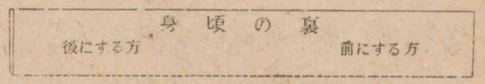
身頃裁方

(1)身頃を裁つには,標附のとき折り直さぬやうに右圖の折方にして裁つ。

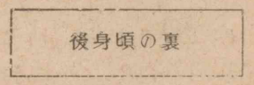
(一)



(二)



(三)

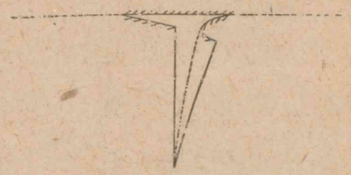


身頃裁方順序

(2)後身頃は模様を選び,倒にならぬやうにする。

(3)衿肩明と前身頃の折目を裁ち切る。

(4)衿肩明をかがる。



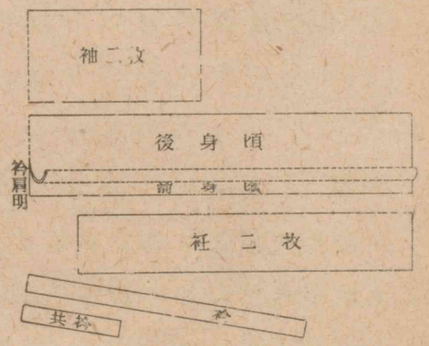
衿肩明のかがり方

6. 仕立方準備

(イ)着用者の特別寸法を調べる。

(ロ)縫絲　用布と同色で布地に釣合つた太さのものを用意する。

(ハ)裏衿　衿布が狹い時は,裏衿布を接ぐ。



裁上り

裏衿布　幅＝(衿幅×2＋縫代×4)－表衿布幅

丈＝表衿布丈と同寸

三つ衿布　幅＝衿幅×2

丈＝凡そ衿肩明の寸法×3

附紐布　幅＝並幅の$\frac{1}{2}$または$\frac{1}{4}$

丈＝80cm乃至90cm

注意　單衣は,全洗をするから,裏衿·三つ衿布·附紐·肩當·居敷當などには白を用ひるか,水に入れて色の落ちぬものを用ひる。

(ニ)古衣の縫直は,汚を洗ひ,傷んだ所を繕ひ,糊張して,裁目の解れ絲を切り,布の部分を前と同じ所に用ひぬやうに注意して,標附に都合のよいやうに疊んでおく。

7. 單衣各部の形狀と縫方の觀察

(イ)身頃の肩山を切り擴げて見ると,平らな風呂敷のやうなものになる。

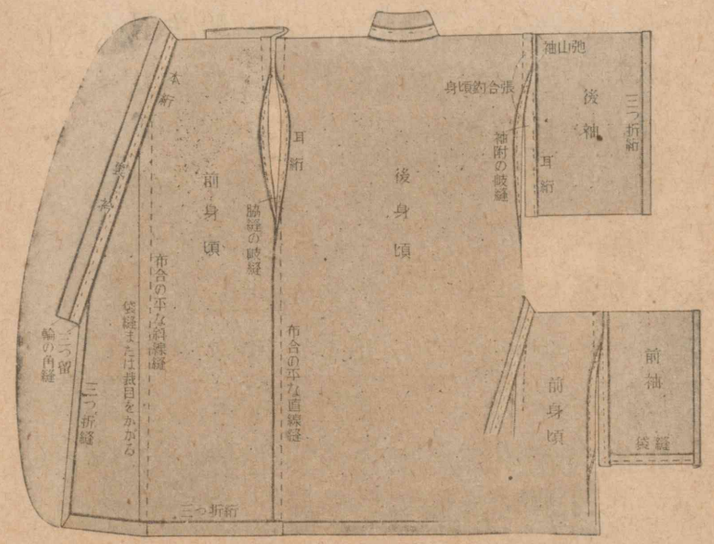
(ロ)後幅は,裾から肩まで同寸である。

肩幅は,後幅より廣くすることは出來るが,狹くすることは不自然になる(着物の法則 1.)。

(ハ)肩山の衿附際から前身頃の經を裾まで通して見ると,前幅は,裾の方が次第に廣くなつてゐる。

前幅は,後幅より衿肩明を減じた寸法より狹くすることは,不自然になつて形が整はぬ(着物の法則 2.)。

(ニ)衽の衽附縫道は,裾から20cm毎に凡そ0.4cmの割合で縫代を深くしてある(着物の法則 3.)。



小裁潤袖單衣の肩を切開いて裏から見た圖

8. 仕立方

(イ)袖(潤袖)

標附　袖下は袋縫にするから,兩端の折り込まれる部分を殘し,0.4cmの深さに綴縫をして兩袖を正しく重ねる。

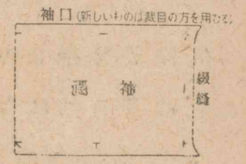
袖丈　袖丈＋0.2cm（被）

袖口折代　1cm

袖幅

袖附(絲標)　袖附＋0.1cm

山標

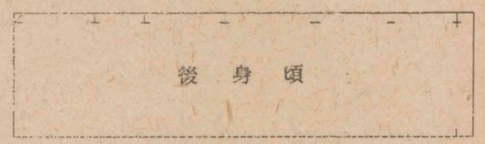


縫方　袖下は,標通りに布の幅全體を縫ひ,縫代は前の方に折り,袖口を三つ折絎にする(縫目の絎方27頁參照)。

(ロ)身頃

標附

置方　後身頃を上に,衿肩明を左手前にし,平らに重ねて正しく置く。



布丈調　山より裾までの寸法を調べ,裾が不揃の時は裁ち揃へる。

裾絎標　2cm

後幅　裾から肩まで同寸で,布の幅いつぱい。

袖附(絲標)

身八つ口

山標

後身頃の標を前身頃に移し,後身頃を靜かに左方にのける。

前幅　いつぱい(裾の脇縫標より計る)。

衽下り

胸明　衽下りの所で,衿肩明一凡そ2cm。

衽附の縫道は,裾の方は前幅と同寸以上眞直にして,胸明標まで自然に斜に標す。但し幅を廣くする時は,裾から衽下りまで眞直にする。

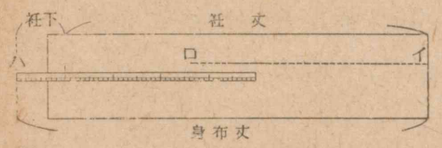
縫方

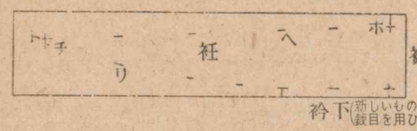
脇縫　布合は平らに,身八つ口際を岐縫にし,裾は10cmの返留にして,縫代を前身頃の方に折る。

表より兩脇縫を合せ,前身頃を外側にして疊む。

(ハ)衽

標附　兩衽の表を合せ,褄先にする所を右の手前にして正しく置く。





イロ＝物差丈(50cmを裾より計り,箆を輕くロに當てておく)。

イハ＝身丈(ロ)で物差目を數へる)。

ハより衽下りの寸法を數へてニを標す。

イニ＝衽丈

裾絎標　2cm　　衿下(絲標)

衿下絎代　1.5cm　　(ホ)＝衽幅

ヘ＝合褄幅(衽幅より0.4cm狹く)

衽附標　先づ絲を張つて衽の位置を正してから,絲をホより衽先の方に張り,絲とへの標とを重ねて衽丈標の12cmほど手前まで絲の通りに標し,衽先の所は,自然より0.3cmぐらゐ斜の度を強くしてトを標す。

チはトより0.3cm。

衿附標　衽先幅リ(衽下りより10cm下つた所)が2.5cmより狹くならぬやうに注意して,チと衿下標の間に絲を張つて絲標をする。

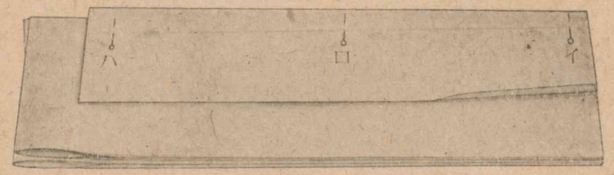
注意　小裁物を大きく縫ふ時は,前幅を裾から衽下

りまで眞直にするばかりでなく,衽先幅にも脹(ふくら)みをつけて,出來るだけ廣くする(42頁右圖參照)。

衿下の三つ折絎　裾の方は3.5cm殘し,上は衿下標より4cm先まで絎ける。

注意　衽附の縫道を折る時は,斜であるから,伸さぬやうにする。

布合



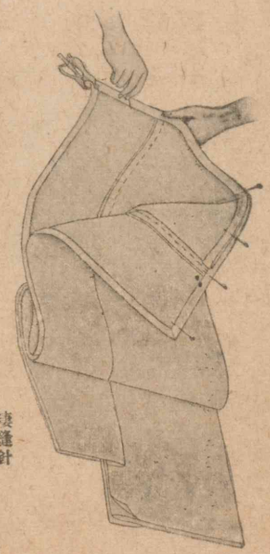
衽附布合　裾絎標を合せて待針イを打ち,前身頃と衽布全體を平らに布合して待針ロハを打つ(手付は12頁布の縫合參照)。

縫方　間の待針は,掛張して適當に打ち,裾の方から縫ふ。裾は,10cmの返留,衽下りの方は標の1針手前で斜返留にする。

衽を被布にして,表より0.1cmの被をかける。

(ニ)裾絎

(ホ)衽附縫代　衿附に入る



裾絎
裾の三つ折絎は褄先を角絎にして縫目と縫代の端に針目を出す。

所を殘して袋縫のやうに綴絎をする(一方が耳の時は,裁目の方だけ折る)。

(へ)衿

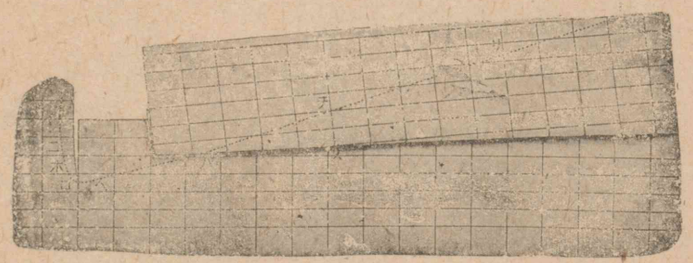
標附　裏衿を表衿より稍弛み加減に接ぎ合せ,縫代を裏衿の方に折つて隱躾をする。

衿丈　仕立上衿肩明(縫道イロ)＋衽下り(縫道ロハ)＋衽下りより(縫道ハト)衿下まで＋弛み(0.3cm)(下圖參照)

衿附縫代　1cm

標附の衿幅　衿幅×2+0.1cm

衿附の縫道說明　(次頁の說明參照)



イ＝三つ衿の眞中で縫代1cm

ロ＝肩山の所の縫代0.4cm

イロの間を櫛形とする。

イニ.ニホ.ホロ.ロヘ＝各衿肩明(イロ)×$\frac{1}{3}$

ハ＝衽下り

チヌ＝衽先幅(衽先より10cm下つて2.5cm以上)

ト＝衿下

トリ＝合褄幅と同寸

衿肩廻の待針(前頁圖參照)

イと衿丈山を合せて待針。

イニ＝平らにしてニに待針。

ニホ＝衿を弛め加減にしてホに待針.

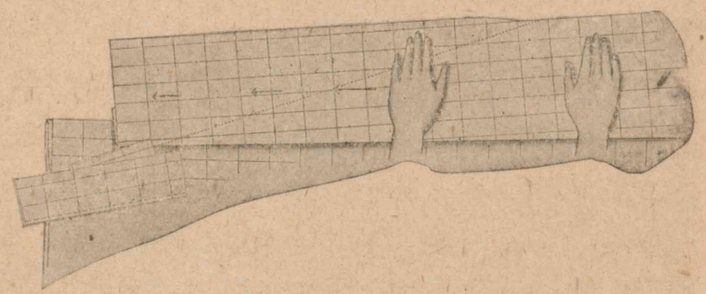
ホロヘ＝食指頭にロと衿布とを被せて,ヘに待針をする(大人物は左右兩食指の爪を合せて,その上に被せる)。

ヘハ＝衿布を$\frac{1}{100}$弛め,衽先の被を正しくして,衽下りの標ハに待針をする。

衽先の整へ方

身頃を疊んだまま机上に置き,兩身頃の脇縫・裾・衿下などを正しく合せ,衽の縫目を眞直にして衽全體の布を正し,右手で合褄幅の所を押へ,左手で衽先を上の方に撫で上げて布を平らに落ちつける(下圖參照)。

注意 衽先は,横の布目が衽附の縫目と直角より衽先の方に小さい角度に落ちつくことになる。



衽先の整へ方手付

衽先より衿下までの待針

衽下りハの待針を中心にして,その部分の衿布を平らに擴げて,その上を下圖のやうに押へ,衿布の端は擴げて持ち,縫道を合せながら靜かに衽の上に置き,掌で全體を押へて平らに布合をして,トに待針を打つてから,ハトの間の待針を次のやうにする。

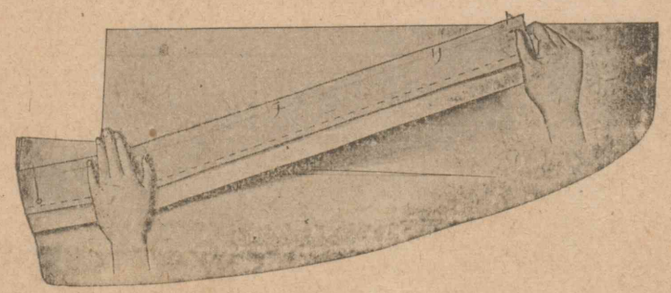
ハチ＝衿布を弛め加減にしてチに待針。

チリ＝布合を平らにしてリに待針。

リト＝ハチを弛めた分だけ張ることになる。

衽先に脹みをつける時は,ハトに待針をしてから衽附を手前に寄せ,チリに待針をする。

注意 衽先幅を廣くするに,衿布だけをそらしてすることもあるが,形としては整はない。



衽先より衿下までの布合手付

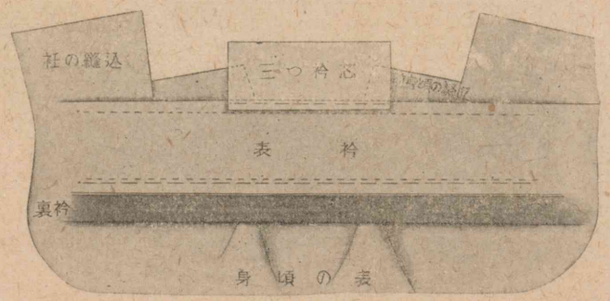
衿附縫方　下前衿下標の0.2cm上から返留にして縫ひ始める。衽先は,衽布を充分に引き上げて2cm置きぐらゐに待針を打ち,布の重つた所は,待針を立てて抄縫または一針拔にし,ハの所は,待針を拔いた穴に入れて縫ふ。

衿肩廻の縫方手付

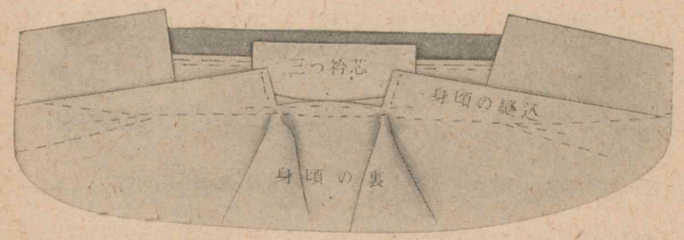
衿肩廻(ヘ・ロ・ホ)の縫方は,山弛の手付と同じにして,左右の拇指で衿布を押し下げ,丸みをつくり,小針に縫ひ,ニイを經て上前も縫ひ,折は表から衿布の方に折る。

注意　上前下前の衿丈・衽先幅を同じにするやう待針のとき調べる。

三つ衿芯と縫込の整へ方



三つ衿芯の入れ方 その一
三つ衿芯丈は，衿布より弛め加減に綴ぢつける。



三つ衿芯の入れ方 その二
身頃の縫込を斜に引伸し，丈を衿布より緩めて三つ衿芯に綴ぢつける。

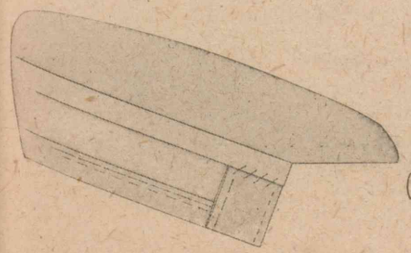
衿幅を折るときは,衿先と衽下りの邊を持ち,布を自然に任せて大きく折り,待針を打つ(4頁基礎布幅を二つ折にする手付參照)。

上前と下前を同じやうにしてから,三つ衿を自然に落ちつけて待針を打つ

衿先の三つ留　衿布で衽を挾み,裏衿の裏で絲を結ぶ〔裏衿(2)衽(3)表衿(1)衽(3)裏衿(2)〕。

衿先の縫方　衿先の裏を出して留より0.4cm先を衿附の縫目と直角に縫ひ,縫込を裏衿の方に折り,紵代でくるみ,綴ぢつけて表に返す。

衿紵　本紵にする。(25頁本紵四圖參照)



衿先の縫代整へ方

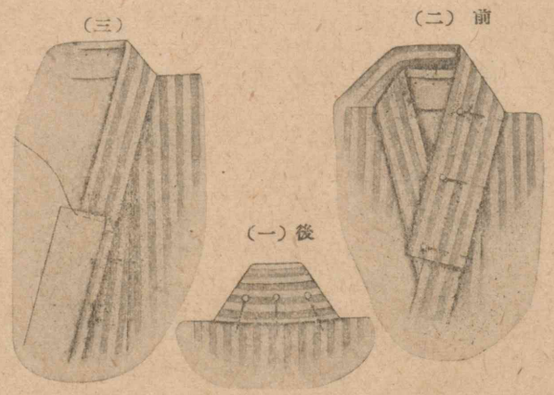
(ト)共衿　共衿丈は,用布の都合で一定されないが,普通,肩明の6倍以上8倍ぐらゐである。

共衿の折方　共衿は,縞または模様を衿に合せ,兩端を直角に折る。

共衿の折方

布合待針　共衿丈の眞中を三つ衿の眞中に合せ,次に衿肩廻を着たときのやうにしておき,共衿を合せて,肩の左右に待針を打ち,前の方は衿幅の中央を標準として布合をする。

共衿の兩端は,衿附と直角に整へ,0.5cm の被がかかるやうに衿布だけ抄つて縫つても絎けてもよい。

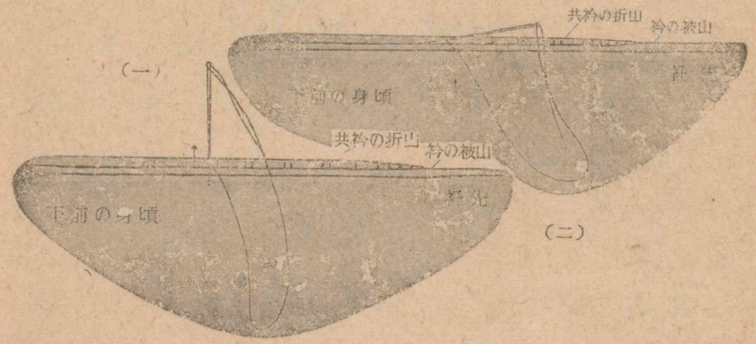


共衿の描方

㊀ 後の待針　㊁ 前の待針　㊂ 兩端の附方

衿附の方の絎道　共衿の方は,折山の0.1cm内で,衿の方は被山である。

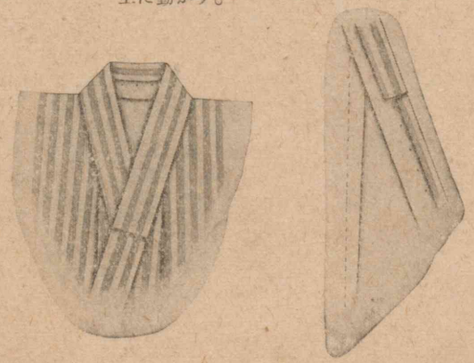
絎方　下前の共衿角より針を出し,1cm の間は0.2cmぐらゐの針目に絎け,肩山の部分は衿の上から深く身頃まで抄つて小針に絎ける。



共衿掛針の使ひ方

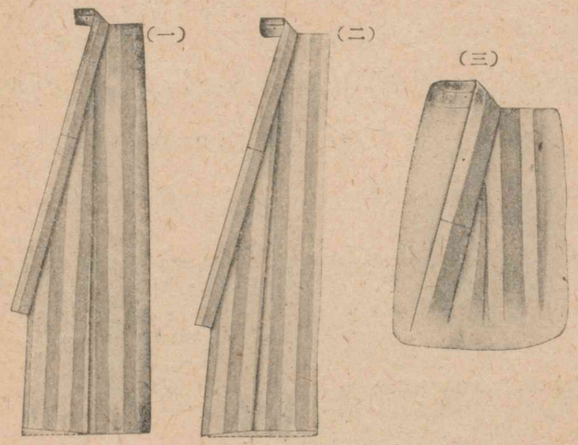
㊀ 掛張を用ひ共衿を絎ける時は,針を横にして向前に動かす。

㊁ 衿を絎ける時は針を縦にして下上に動かす。



出來上り(表)　同上(裏)

衽先と衿附の良否の鑑別



衽先と衿附の良否の鑑別
㊀正しいもの。
㊁不良（衽の縫代が上の方で淺くなつてゐるため，衽先の布が落ちづかない。衽の衿附縫道を伸ばしてあるから前下りになつてゐる）。
㊂不良（前幅の衽附縫道を誤つたため衽先が前方に屈してゐる）。

(チ)袖附　身頃の裾の方を疊んだままでする。

縫道　袖は,幅を仕立上寸法に折り,これが0.1cmの被山になる所。

身頃は幅標通り。

布合　袖を被布にした濶袖形布接の上半分と同じである。仕方は,身頃も袖も各袖附山に狂ひがないかを調べ,袖を手前に身頃と袖の前と山を合せて山に待針を打ち,山の左右6cmの間は,袖を山弛に,殘りは身頃を釣合張にする。

縫方　袖附の兩端は岐縫に,山弛の部分は特に小針に縫ふ。

八つ口·身八つ口絎　袖附は身頃の縫代を,脇

縫は後身頃の縫代を重割にし,岐際に針目を出して耳絎にする。

(リ)仕上　出來上つたならば,絲屑を取り,寸法が豫定の通りに出來たかを調べて,若し大きな誤りがあつた時は直す。

各部分の技術の巧拙をよく見て,拙く出來た理由を考へる。

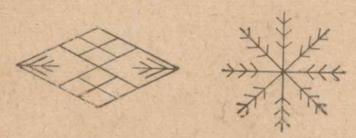
特別に皺のないものは,兩手で伸ばしながら疊み,輕い壓をする。皺の直らぬものは火熨斗をかける。

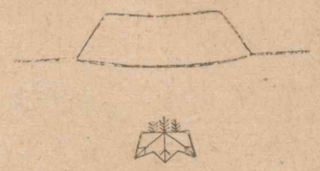
(ヌ)附紐　中表に幅を二つに折り,一方の横と縦を縫ひ,表に返す。

男兒は紐の縫目を下に,女兒は上に向けて,脇縫留の高さに,衿附と直角に二本絲で縫ひつけ,上と下を絎け,紐附飾縫をする。飾絲は,洗つても色の落ちぬものを2本にして裏まで貫き,紐を確とつける。

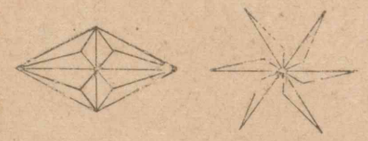
(ル)脊紋·脊守　以前は,一つ身には必ずつけたものであるが,近頃は,祝着などにのみつける。位置は,衿附から2.5cm下つた所である。

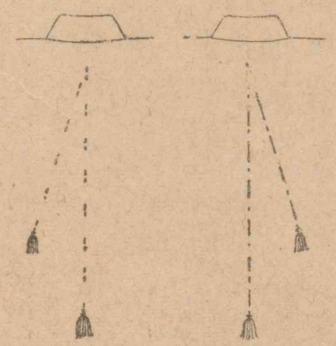
脊紋·脊守·紐附飾縫　次頁圖參照。



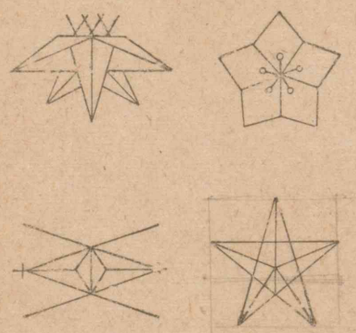


脊紋の位置

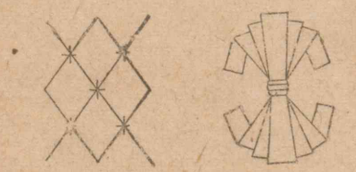




守縫
（左）男兒　（右）女兒



脊紋の例



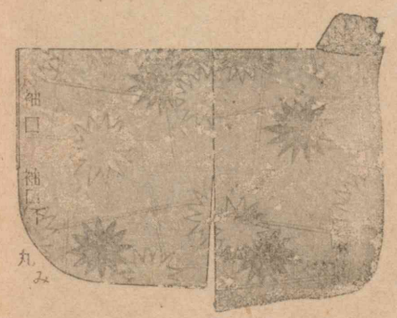
附紐飾縫

(ヲ)3, 4歳用の一つ身　子供が玩具を持つて遊ぶやうになれば肩揚をし,歩くやうになれば腰揚をし,袖は筒袖または元祿袖にして,活動が充分に出來るやうにする。

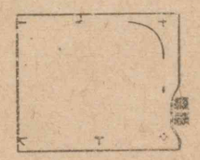
(ワ)袖の標附概説

袖の形は,濶袖の外に元祿袖·筒袖·袂袖などあるが,その標附方は,濶袖のやうに先づ丈·幅·山の標をしてから,必要に應じて袖口·丸みなどの標を加へるだけである。

(カ)元祿袖



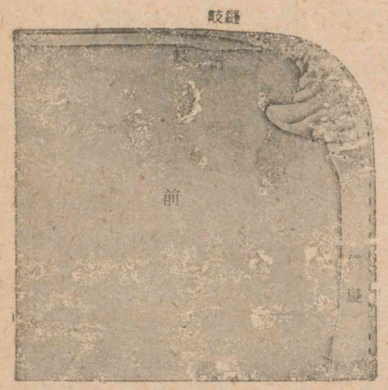
元祿袖



袖丈＝袖口＋袖口下＋丸み
23-25cm　13cm　2-4cm　7-8cm

袖幅＝袖幅＋被
19-23cm　0.1cm

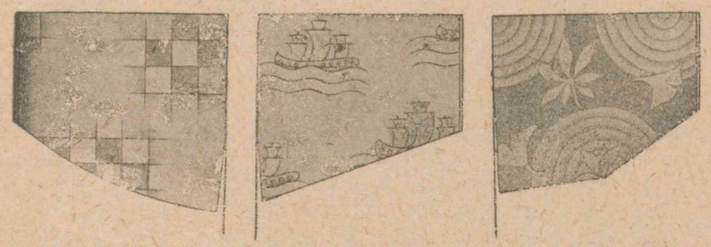
丸みは普通,袖下の方を長くした楕圓丸みにする。



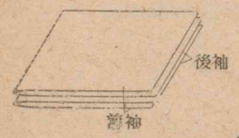
元祿袖の縫方

左圖のやうに縫ふ。袖口は,袖口下の被山から布目を眞直に被山下まで三つ折紵にする。

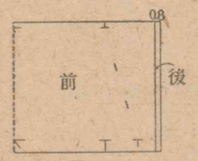
(ヨ)筒袖　元祿袖の袖口と八つ口の方の袖丈標との間を,斜線または曲線など好みの形にして袂をなくしたものである。



筒袖の種類



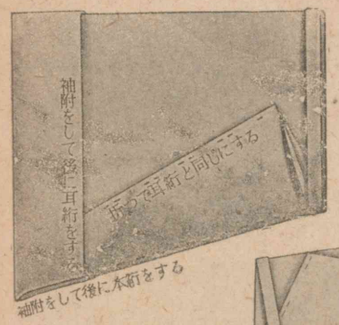
標附は,袖下の縫込を折伏紵にするから,後袖を0.8cm長くして左上圖のやうに重ねてする。



袖丈＝袖附＋8cm
21-23cm　13-15cm

袖幅＝濶袖幅＋2cm
21-25cm　19-23cm

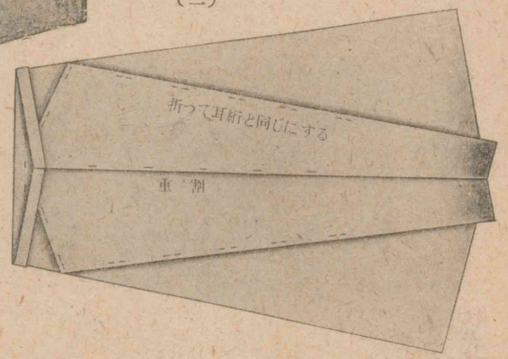
袖口寸法＝好みによつて適宜にする。



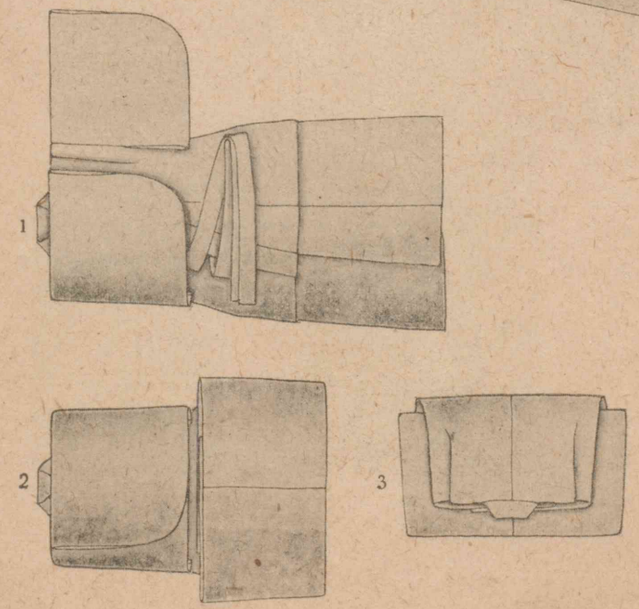
(一)

縫方は袖下の幅だけ縫つて,縫込を綴ぢ,袖口を紵ける。

(二)



筒袖縫込の整へ方
㊀普通の仕方
㊁厚地物の仕方

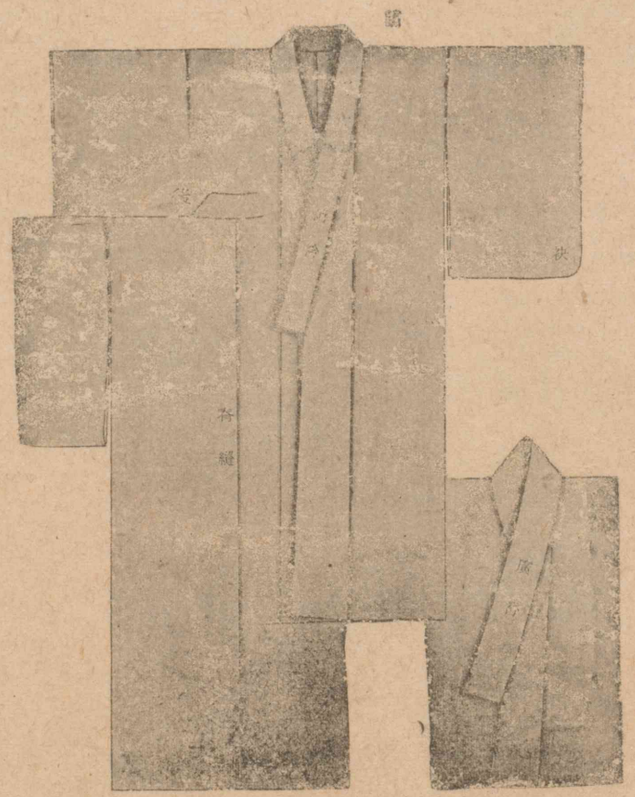


小裁・中裁の着物の疊み方

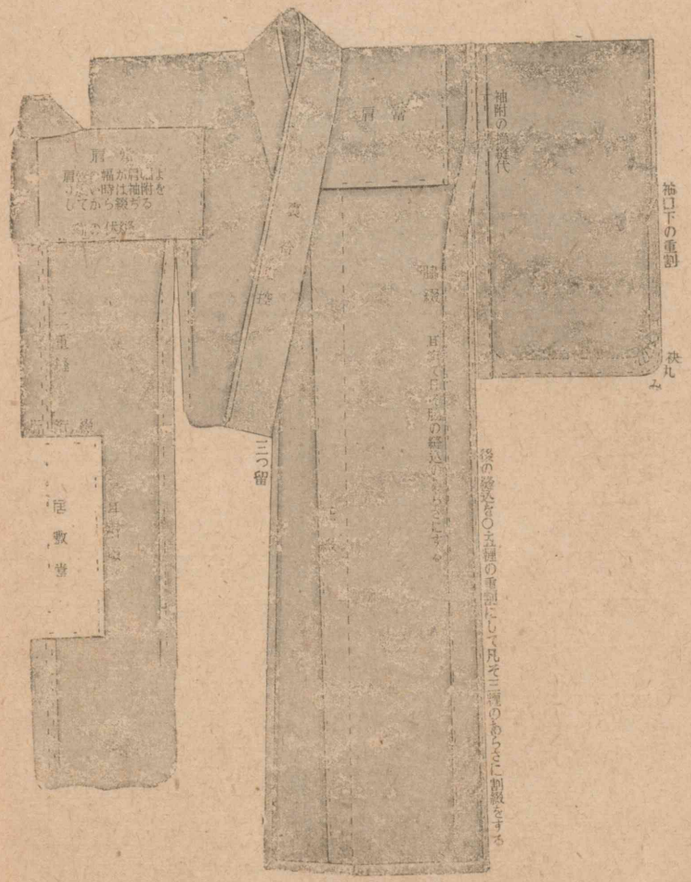
第二節　女物單衣

1. 出來上り圖

（表）



（裏）



2. 女物單衣寸法表

名稱		仕立上寸法	裁切寸法
袖	丈	60 cm 內外	袖丈＋2cm
	幅	32cm	袖幅＋3cm 以上
	口	23cm	
	附	23cm乃至25cm	
	袂丸み	1.5cm	
身頃	丈（裁切）	150cm	着丈＋20cm乃至27cm 着物の着丈は，頸の附根より床の上までの寸法で帶を締ると程よくなる。
	衿肩明（裁切）	10cm 內外	
	身八つ口	13cm	
	後幅	28.5cm	肩幅＋2 cm 以上
	肩幅	30.5cm	同上
	前幅	23cm	普通後身頃幅と同寸
	衽下り	23cm 胸明＝衿肩明－0.6cm	
衽	幅	15cm	衽幅＋2cm 以上
	衿下	75cm內外	釣衽の釣下＝衿下＋12cm以上
	合褄幅	13.5cm	
	衽先幅	20cm下つて4.5cm	
衿幅	紵衿	5.5cm	幅＝11cm＋3cm以上
	廣衿	11cm	丈＝(身丈－衿下＋15cm)×2
裄		62.5cm	〔注意〕胸の幅を衽下りで定めず，脇縫留の所で抱幅 21 cm 內外にして衿肩明から斜にすることもある。
腰總幅		凡そ 126cm	
裾總幅		凡そ 132cm	

3. 女物仕立上寸法の注意

袖丈 年齢と好みにより加減する。

袖口 若い人は普通 2cm ぐらゐ少くする。

袖附 若い人は帶を締める位置が高いから少く，老人は帶幅が狹く，締める位置も低いから，その程度によつて30cm內外にする。

袂丸み 若い人は 4cm 內外または角にする。

衿肩明 好みにより 0.5cm 乃至 1cm ぐらゐ大きくすることもあり，また後に 1cm 乃至 3cm ぐらゐまで繰越すこともある。

後幅 肥瘠によつて加減する。

肩幅 後幅と同寸にすることもあるが，普通は 2cm 廣くする。また特に廣くするために袖附の斜が 10cm について 0.6cm 以上擴がる時は，無理が出來ないやうに脇縫の方から斜にする。

前幅 肥瘠によつて加減する（第二章52頁及び78頁參照）。

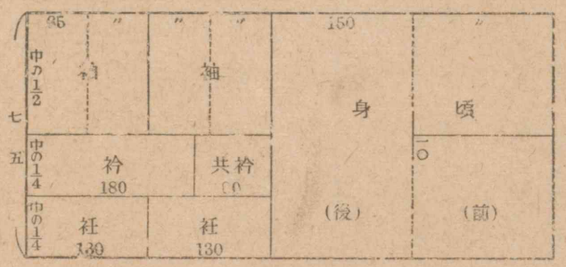
衽下り 凡そ衿肩明×2＋4cm 內外

衿下 $\frac{着丈}{2}$＋10cm，但し帶の位置を高く締める人は，その程度に應じて增す。

4. 大裁　用布　1反

1反＝{並幅(36cm)　長さ凡そ 1100cm
　　大幅(75cm)　長さ凡そ 550cm

(イ)大幅一つ身裁　用布　75cm幅 560cm



積り方

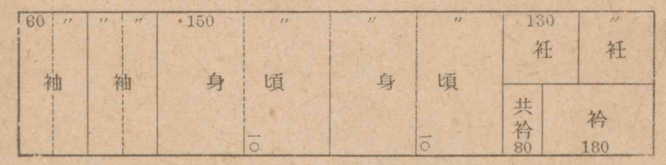
總丈＝身布丈×4－布衽下り×2
560cm　150cm　20cm

身布丈＝$\frac{總丈＋布衽下り×2}{4}$　或は

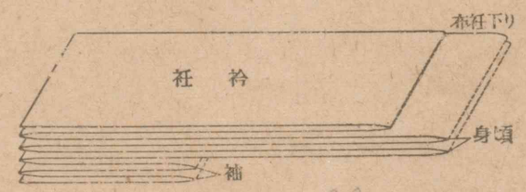
$\frac{總丈－袖布丈×4}{2}$

注意　この裁方は,袖布丈 ×4 と衽布丈 ×2 と同寸になることが少いから,長い方を標準として積り,殘布を居敷當などにする

(ロ)本裁棒衽　用布　並幅 1100cm



積り方



總丈＝袖布丈×4＋身布丈×6－布衽下り×2
1100cm　60cm　150cm　20cm

身布丈＝$\frac{總丈－袖布丈×4＋布衽下り×2}{6}$

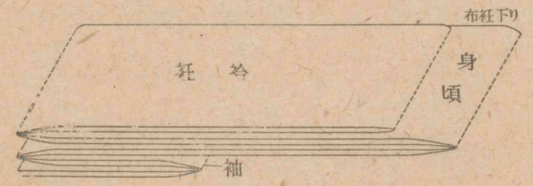
袖布丈＝$\frac{總丈－身布丈×6－布衽下り×2}{4}$

衿布丈＝(身布丈－衿下＋衿肩明＋衿先縫代)×2
180cm　150cm　75cm　10cm　5cm

共衿布丈＝衽布丈×2－衿布丈
80cm　130cm　180cm

折積り裁　總用布の丈を二つ折にして,端の方から袖布丈を折り,殘りの輪の方を布衽下りだけ短くして三つ折にし,袖·身頃を裁ち切る(次頁圖參照).

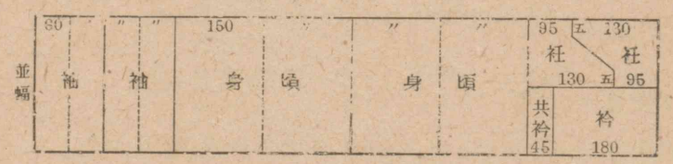
折積り裁



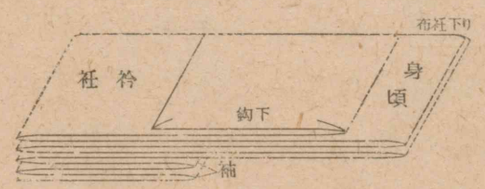
衿肩明を裁つ時は,縞・模様に注意する。

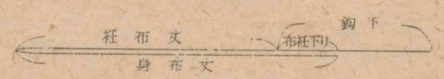
(ハ)本裁鈎衽　この裁方は,用布に表裏の差別あるものは不適當である。鈎衽裁は,棒衽裁より總丈凡そ40cm短くて同寸法の着物になるが,衽の上下を交換することが出來ぬ缺點がある。

用布　並幅 1065cm



積り方



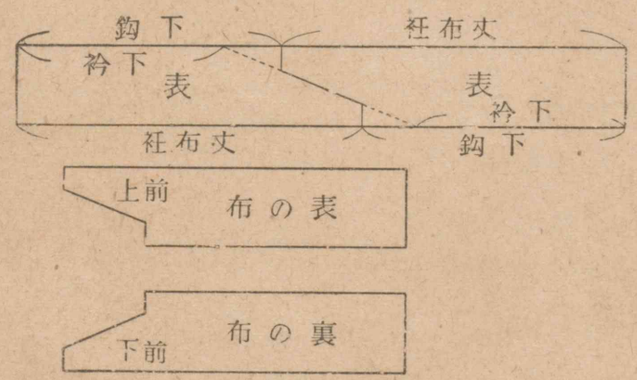


總丈＝袖布丈×4＋身布丈×5－布衽下り＋鈎下
1065cm　60cm　150cm　20cm　95cm

鈎下＝衿下＋12cm以上(高い方がよい)

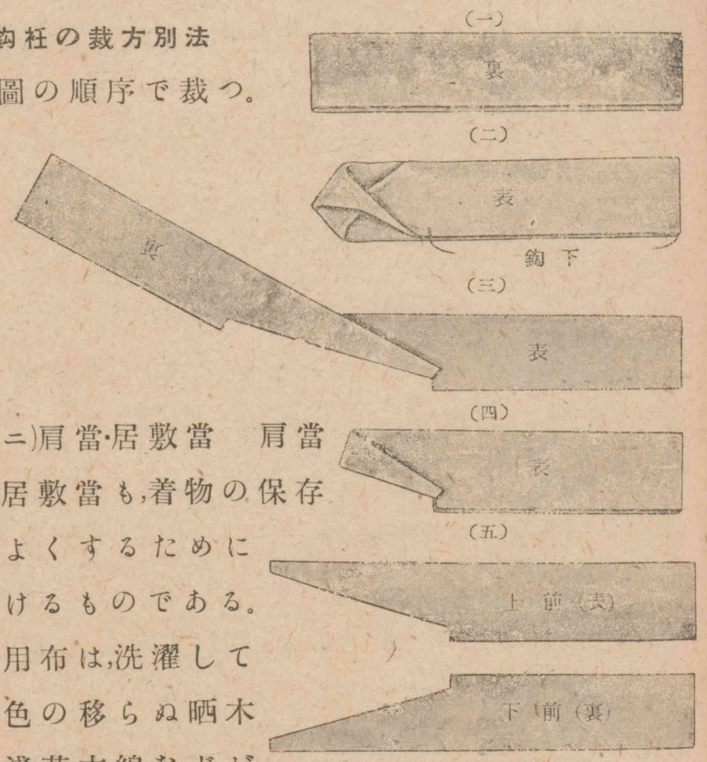
$$身布丈=\frac{總丈-袖布丈\times4-鈎下+布衽下り}{5}$$

鈎衽の裁方　上前には表が出るやうに,また裁目を鈎下にするやうに注意して鈎の切込を入れる。鈎の深さは3cmあれば差支ないが,鈎下の高さに應じて深くする方が縫ひやすいから,下圖のやうにする。



鈎衽の裁方別法

右圖の順序で裁つ。

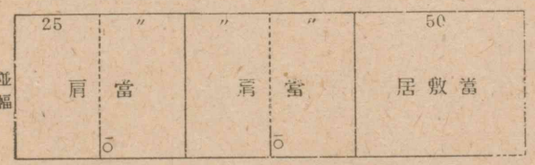


鈎衽の裁方順序
㊁鈎下の切込を3cm入れる。
㊃兩衽先の福を揃へて裁つ。

(ニ)肩當・居敷當　肩當も居敷當も,着物の保存をよくするために附けるものである。

用布は,洗濯しても色の移らぬ晒木綿・淺黄木綿などが適當である。

裁方　用布　並幅凡そ 150cm



注意　肩當は,身幅・裁方・衿肩明など身頃と同樣にして,丈は衽下りより少し長くする(但し一つ身裁はすべてに用ひられる)。

裏衿布　廣衿にする時は,表衿と同寸の裏衿が必要である。

三つ衿布　半幅　長さ凡そ 25cm

5. 仕立方

(イ)着用者に適當な特別の仕立上寸法を調べる。

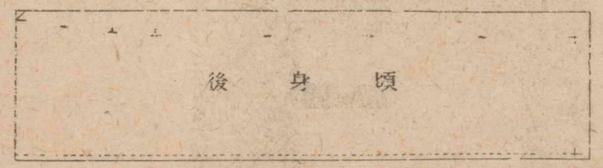
(ロ)袖　丸みをつける袂袖の縫方は,元祿袖と同じである。角袖は袂を角縫にする。

(ハ)身頃

脊縫　本裁は,後身頃を中表に平らに布合して衿肩明の寸法を定め,衿附の縫代に入る部分を 1cm ほど殘し,小針に眞直に縫ひ,裾の絲留は 10cm の返留にする。

注意　着物は,脊縫を中心に左右の丈幅を同寸につくるものであるから,特に丈の布合を確實にする。

標附



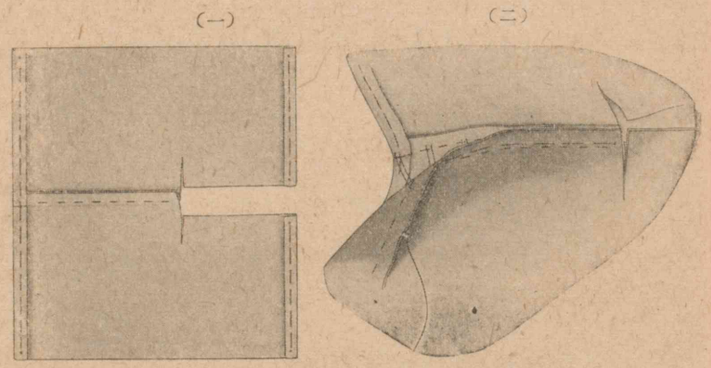
後幅・肩幅には被の 2 倍 0.3cm を加へ,肩山 4 cm ほどは布目を眞直にして八つ口まで斜に標し,

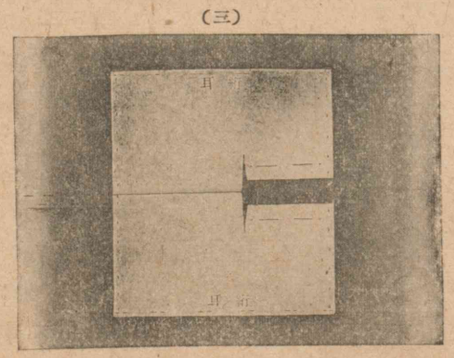
袖附の寸法は斜線に添うて計る。

前身頃の標附は,小裁一つ身單衣と同じやうにする(但し胸明の縫込は,衿肩明−0.6cm)。

注意 前身頃は,裾より前幅と同寸だけ眞直にするのが普通であるが,肥つた程度によつて,その2倍以上衿下ぐらゐまでも眞直にする必要がある。

肩當





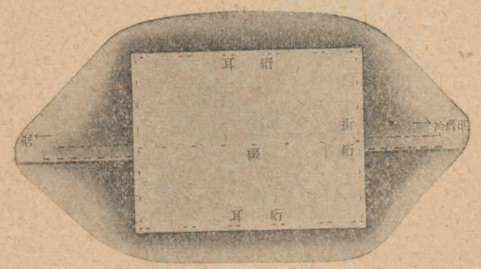
肩當

㊀肩當の縫方 脊縫を身頃と反對に折り,裁目は折つて伏縫にする。
㊁脊縫を合せて綴ぢる。
㊂身頃と平らに布合して兩脇を綴ぢる。
若し肩當幅が肩幅より廣い時は假綴をしておく。

居敷當

居敷當をつける位置 脊縫で$\frac{着丈}{2}$+15cmの高さより下につける。若し用布が小さい時は,裾から40cmの所より上につける。

㊀居敷當布の裁目を伏縫して,幅の眞中を脊縫に合せて綴ぢ,肩當と居敷當の所を除き,脊の縫代を二重縫にする。



㊁平らに布合して兩脇と上の三方を綴ぢつける。

居敷當の附方

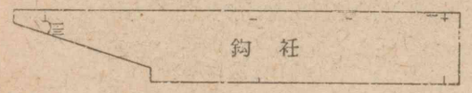
脇縫 縫込になつてゐるから,岐際だけ斜重割にし,それより裾まで0.5cmの重割にして割綴をする。縫込は,後も前も身頃と平らに布合して,身八つ口から裾まで耳紵で綴ぢる。

注意 脇縫が終つたら,疊んでおいて縫つてゆくことは,一つ身の時と同じである。

(ニ)衽標附

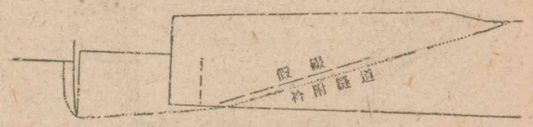
女物の衽先幅は,衽先より20cm下つて4.5cmとし,合褄まで角立たぬやうにする(衽下りと衽先幅の斜の度が釣合はぬ時は,衽先で衿が「く」の字形になつて見苦しくなる)。

鈎衽標附　衽附の標は丈標の所で衿附の方から1.3cm計つて,なるべく法則に近い斜にする。衿下は少し斜になるが裾の方は眞直にする。



鈎衽標附

衽綴　衽附の縫込を平らに布合して,裾から衿下標の10cmほど上まで耳絎で綴ぢ,衽先の假綴をする。



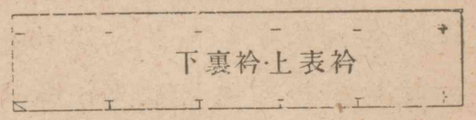
衽先の假綴
衽先の布を整へ,縫道の0.5cm上を絹絲で假綴する。

(ホ)衿附の注意

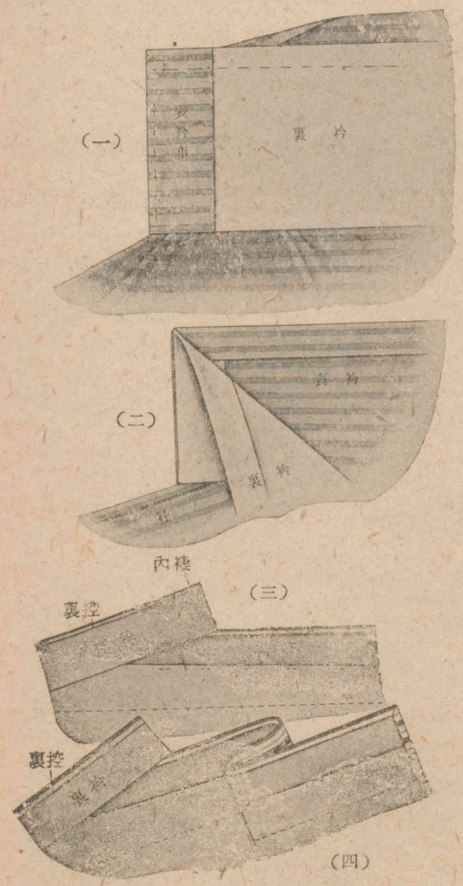
衿肩明の縫代　脊縫の所で1.5cm乃至2cm

廣衿の標附　表衿と裏衿を重ねて普通に標をしてから,丈の合標を衿肩明・衽下り,衽下りと衿下の間にする(次頁圖參照)。

廣衿の縫方　脊縫の被を正して表衿の待針を打ち,次に裏衿の合標を合せて三つ縫にする。



衿先の留　衿下標の所で裏衿の方から三つ留をして,その絲で左圖のやうに縫ふ。



廣衿の衿先
㊀表と裏を平らに縫合せ,三つ留の所から裏衿の方に折つて綴ぢつける。㊁衿先の縫代を表衿にくるみ,裏衿は幅より0.4cm控へて内褄をつくる。㊂出來上り。㊃裏衿が狹い時の仕方。

注意　廣衿先と絎衿先はつくり方は異なるが,出來上りは同じことになる。

半幅共衿の掛方注意　幾度も新しい所を出して掛替へるやうに,衿附の方に多く絎け込むのが

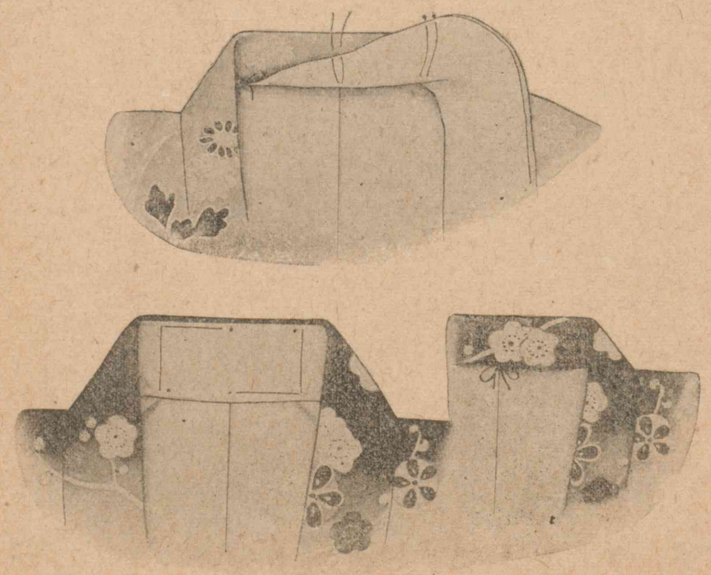
經濟である。また初に幅の中央を山に使用するのも掛替が利く。共衿幅は0.5cm狹くする。

共衿を衿布につけて後に衿附をする仕方は,浴衣などには便利であるが,全洗をすることの出來ぬものには掛替へられぬ不便がある。

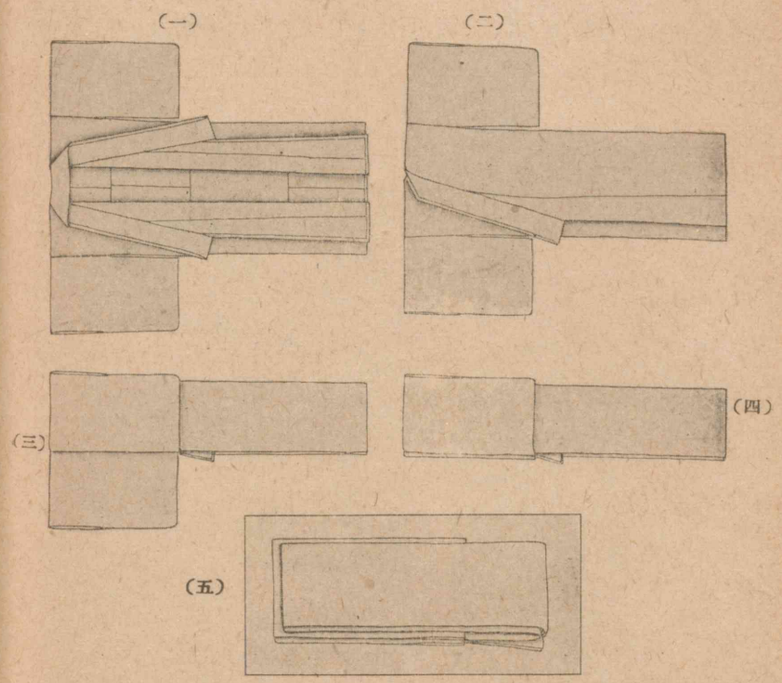
(ヘ)袖附と八つ口紵　身頃の裏を外側にし,標の通り斜の縫道を伸さぬやうに折り,次に0.5cmの摘縫代を折出す(摘縫代の兩端は0.1cm).山弛は,山の左右 8cm ほどの間でする。

(ト)仕上

(チ)衿絲の附方



6. **疊み方**　下圖の順序でする。

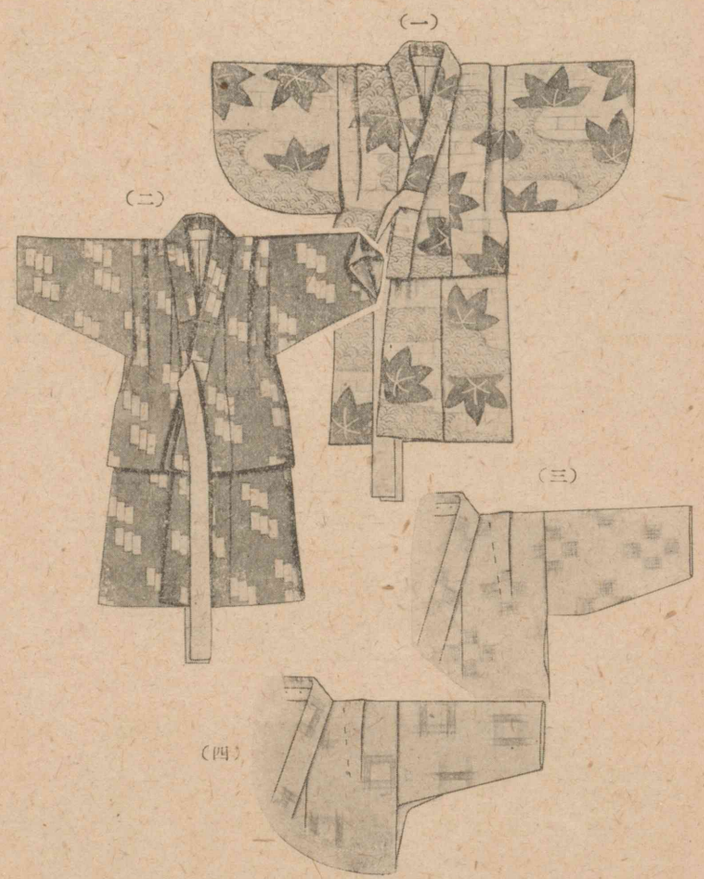


疊み方順序

第三節　中裁單衣

1. **用布**　中裁は,5,6 歳より 11,12歳ぐらゐまでの活動盛りの兒童の着用するものであるか

ら,用布は輕くて丈夫なものを選び,袖·裾を短く,腰揚もあまり多くないやうに仕立てねばならぬ。



中裁單衣

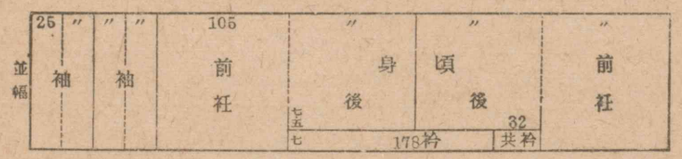
㊀中裁(四つ身單衣)女兒用。㊁同上男兒用。㊂この形は袖附留の所の縫込の仕末が樂に出來る。㊃この袖は袖附が廣がるから着やすい。

2. 中裁單衣仕立上寸法表

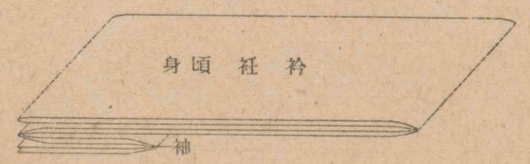
名稱		年齡	6, 7 歳	10 歳前後
袖	丈	袂袖	50 cm	60cm 內外
		筒袖	24 cm	26 cm
		元祿袖	26 cm	32 cm
	幅		25 cm	25 30 cm
	口		15 cm	17 cm
	附		15 cm	17 cm
	丸み		8 cm	11 cm
身頃	丈(裁切)		105 cm	115cm乃至120cm
	衿肩明(裁切)		7 cm	7.5 cm
	後幅·肩幅		23 cm	26cm乃至いつぱい
	身八つ口		11 cm	11 cm
	衽下り		13 cm 胸明=衿肩明−0.4cm	14cm乃至15cm 胸明同
	前幅		四つ身裁は胸明より裾まで眞直	同
衽	幅		いつぱい	同
	衿下	4cm×年齡	26 cm	38cm 內外
	合褄幅		衽幅−0.5cm	衽幅−0.8cm (廣くするときはいつぱい)
衿幅			4 cm	4.5 cm
裾總幅			凡そ 112 cm	凡そ 120 cm

大 47

3. 裁方　四つ身裁　用布　並幅 520cm (裁切裾總幅 130cm)



積り方



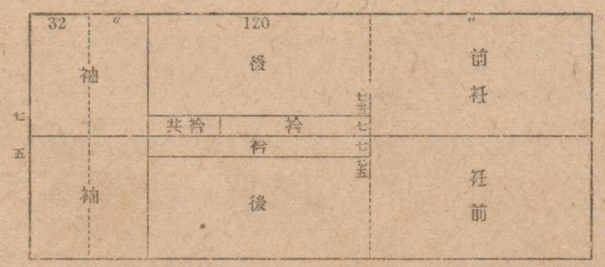
總丈＝(袖布丈＋身布丈)×4
520cm　25cm　105cm

身布丈＝$\frac{\text{總丈}-\text{袖布丈}\times 4}{4}$

衿布丈＝(身布丈－衿下＋衿肩明＋衿先縫代)×2
178cm　105cm　26cm　7cm　3cm

共衿布丈＝身布丈×2－衿布丈
32cm　210cm　178cm

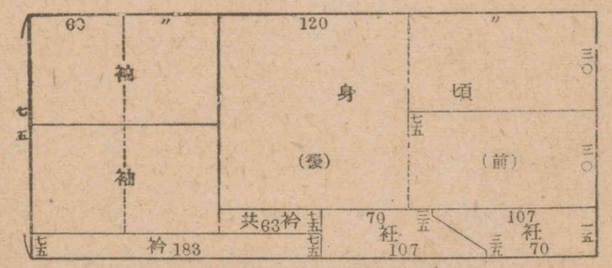
用布　75cm 幅　304cm (裁切裾總幅 136 cm)



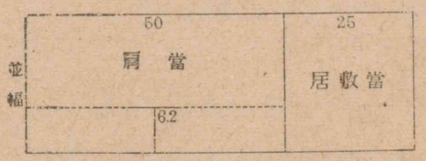
積り方

總丈＝(袖布丈＋身布丈)×2
304cm　32cm　120cm

中裁(一つ身裁)　用布　75cm 幅　36cm (裁切裾總布 150cm)



肩當·居敷當　用布　並幅凡そ 75cm



必要な用布　裏衿布·三つ衿芯·附紐(幅＝並幅×$\frac{1}{4}$　丈 70cm)

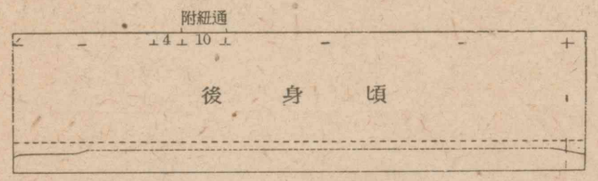
4. 仕立方

(イ)袖　男兒用は普通八つ口無の筒袖にして,袖丈全部を袖附にする。

女兒用は,晴着としては袂袖を用ひるが,平常着は,普通,元祿袖にする(筒袖·元祿袖縫方 66 頁參照).

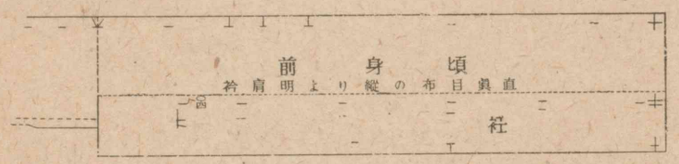
(ロ)身頃·衽の標附(男兒用)

後身頃



脊縫は裁目になるから,肩當の下と裾絎代とを除き,袋縫にする。標は小裁と同じであるが,筒袖に限り左袖附下を4cm乃至5cm置いて附紐通しを10cmほど明ける。

前身頃



前幅標　胸明標を裁切衿肩明より0.4cm少くして,その經にならひ,裾まで眞直に前幅標をする。

衽　前幅標を境に衽布と考へ,なるべく縫代をいつぱいにして,普通に衽附の標をする。衽附は摘縫になる。

摘縫代は,裾で1cm,合褄で1.6cm内外に標す。

〔衽附の法則　20cm毎に0.4cmの割合にする〕

注意　幅を廣くする時は下の方は縫代を省き胸の方だけ普通に標して20cmほど縫ふこともある。

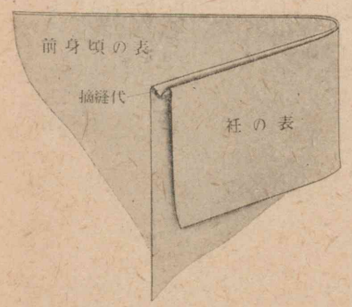
衽先幅　身丈の割合に衿下が短いので,自然にすると,狹くなつて着にくいものになるから,合褄の方は,斜の度を少くし,上の方は脹(ふくら)みをもたせて,胸·腰の幅を廣くする。

(ハ)縫方

肩當　布の兩脇の裁目を伏縫にして,幅の眞中を脊縫に隱躾と同じ針目で綴ぢつけ,兩脇は折絎にする。

居敷當　腰揚の中に入らぬやうに,揚をしてからつける。

脇縫　筒袖は,左脇に附紐通を明けるから,その上下は岐縫にする。



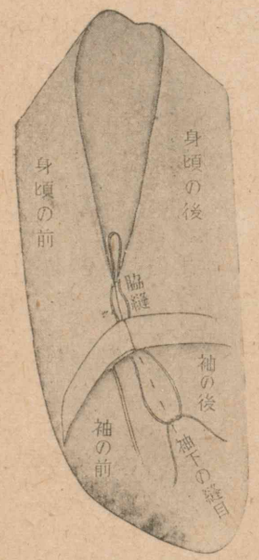
衽の摘縫代の折方

衽の摘縫　前幅標と衽附標を表から折り,次に兩折山を合せ,縫代山を定めて縫ふ。

衿下絎·裾絎

衿附　衿肩明の縫代は1.2cmにして,小裁の通

りにつける。三つ衿芯と衽先の縫込は,仕立上りの衿幅だけ綴ぢ,縫込を屏風疊とし,衿の絎代でくるまずに絎ける。



筒袖の留
袖下の縫目と脇縫を合せて留め,その絲で袖附をする(留の前後 4cm ほどは半返縫)。

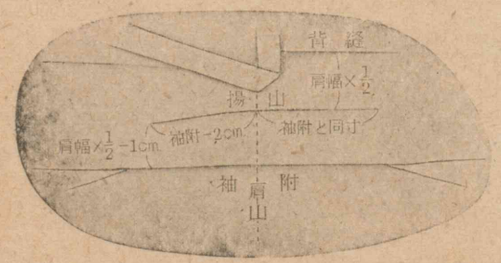
男兒用筒袖の附方　脇縫は岐際の縫代を重割にし,袖附の方には淺く摘縫代をつくり,左圖のやうにする。

(ニ)仕上(揚·附紐附は仕上の後にする)

子供物は,肩揚·腰揚の仕方で格好が出來るものであるから,注意が必要である。

肩揚

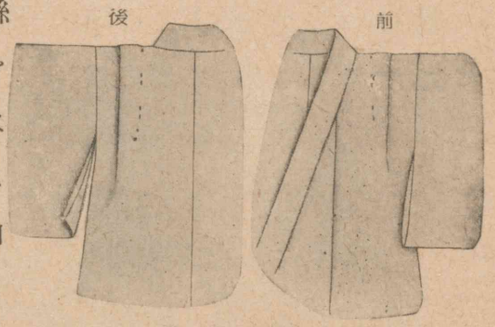
$$肩揚代=\frac{仕立上衿-着衿}{2}$$



肩揚山の定め方

肩揚代の山　揚代の多い時は,山を脊縫の方に寄せて,14,15歳ぐらゐのものは,山を袖附の方に寄せると釣合がとれる。

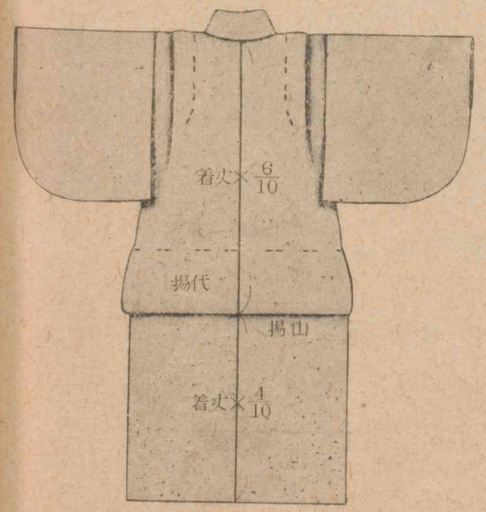
縫方　二本絲で始終の絲留を丈夫に,表針目は小さく二目落にして,肩山だけ山とその左右とに3針出す。



肩揚の縫道
(後)袖附だけ揚代を眞直に,終の方は 0.5cm 淺くする。(前)下の方は揚代を 1cm 淺く肩より斜にする。

腰揚

$$腰揚代=\frac{身丈-着丈}{2}$$

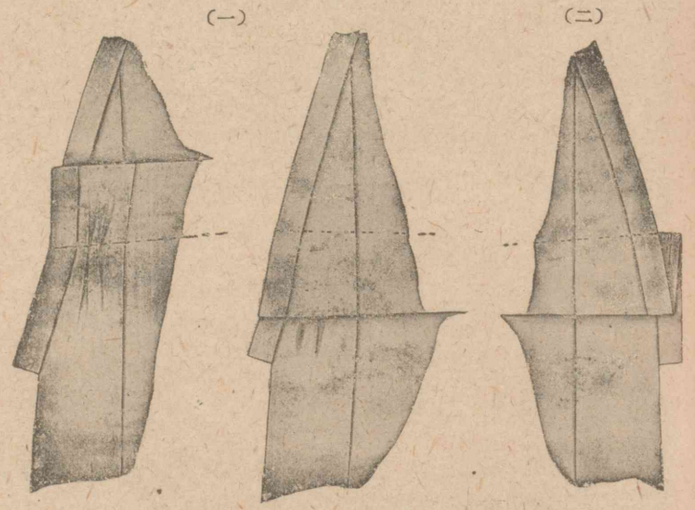


腰揚山の定め方

腰揚山　脊縫で上から,着丈×$\frac{6}{10}$下つた所。但し着丈を短くするものは加減する。

縫道　後身頃は揚代通り,前身頃は衿山で揚代を 1cm 多くして脇から斜にする。

縫目は二本絲で二目落に縫ひ,縫目や襞の所は返針にして留を確とする。



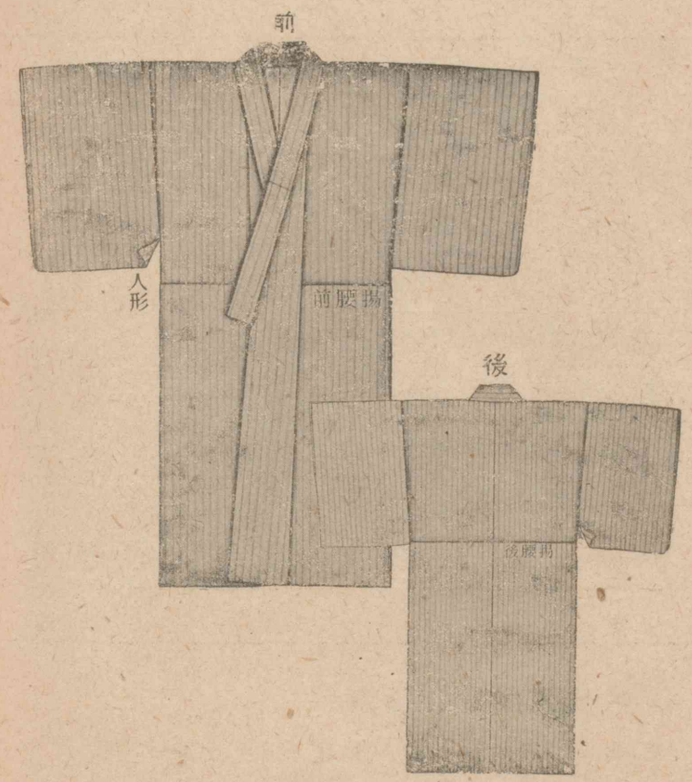
㊀上前の縫方　衿幅を合せ，衽幅の廣い分を襞にして整へる。
㊁下前の縫方　圖のやうに襞をとらずに縫ふ。但し衿幅より多くずれ出る時は，その分だけを襞にする。

第四節　男物單衣

1. 男物の女物の形と異る點

(イ)袖丈全部を袖附にしたもの,または八つ口の部分を縫ひつめて,人形としてある。

(ロ)身丈を着丈にするから,布の長い分を帶の下になる所で內腰揚にする。



2. 男物單衣仕立上寸法表

名稱			仕立上寸法	名稱			仕立上寸法
袖	丈	袂袖	50cm乃至53cm	身頃	丈		着丈135 cm 內外
		筒袖	40 cm		衿肩明(裁切)		9.5 cm 內外
	幅		34 cm		後幅		30 cm
	口		28 cm		肩幅		32 cm
	附		42cm乃至44cm		前幅		25 cm
	袂丸み		2 cm		衽下り		20 cm 胸明＝衿肩明－0.6cm
衽	幅		15 cm		內揚	後	肩より50cm內外
	衿下		65 cm			前	後より4cm下
	合褄幅		13.5 cm	衿幅			共衿の下になる部分5.5cm 下の方 6cm
裄			66 cm	腰總幅			凡そ133 cm
				裾總幅			140 cm

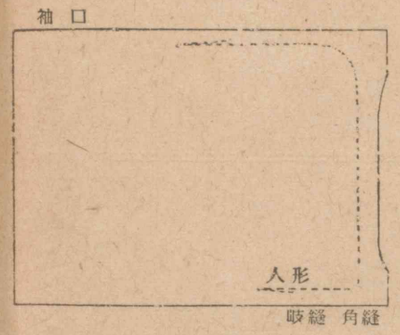
3. 本裁男物裁方注意

(イ)裁方　寸法が異るだけで,女物と同じである。

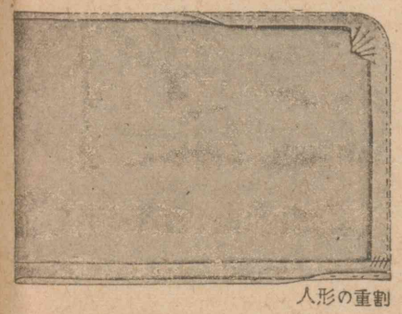
(ロ)身布丈　着丈に衿附の縫代と裾絎分を加へれば足りるが,普通,1反で出來るだけの長さに裁つて內腰揚をする。

(ハ)衽布丈と身布丈との關係を普通にしておけば縫直には便利であるが,特に必要ではない,

(ニ)裏衿　表衿布丈と同寸のものをつける時と30cm內外のものを衿先にのみつける時とある。浴衣などには裏衿をつけぬ方が多い。



男物袖の縫方



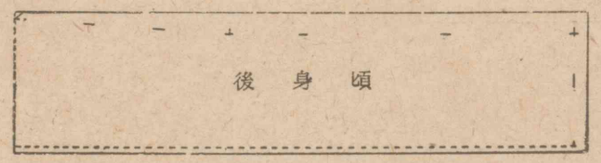
男物單衣袖出來上り(裏)

4. 仕立方

(イ)袖　標附は,普通の袂袖と同じで,袖幅は仕立上寸法＋被×2にする。

縫方　人形の上は岐縫,下は角縫で,その間の寸法が短いから,重割をしたまま角の綴をすることもある.

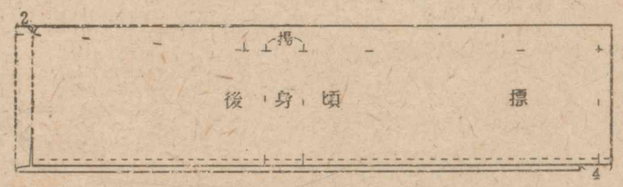
(ロ)身頃　標附



後身頃の標附をして揚寸を調べる。

揚寸＝身布丈－(着丈＋3.5cm)

3.5cm＝衿附の縫代＋裾の紐代＋内腰揚の被

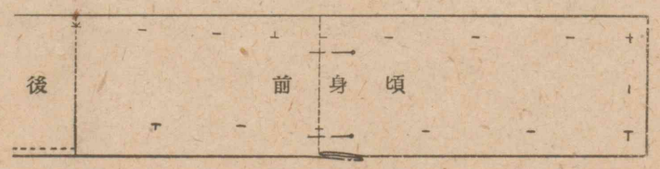


前身頃を後に 2cm 繰越して,肩より 50cm 内外の所に内腰揚の標をして,前身頃までよく通す(上圖).

前の揚は,後より 4cm 下ることになる。

注意 揚は帶を締めて見えぬ位置にするから,人により多少加減しなければならぬ。

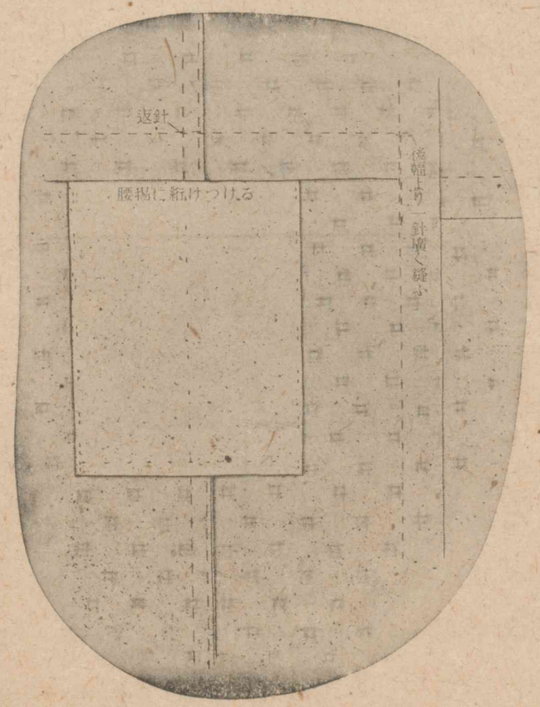
前幅は,揚標を合せ,待針で押へて標す(下圖).



縫方

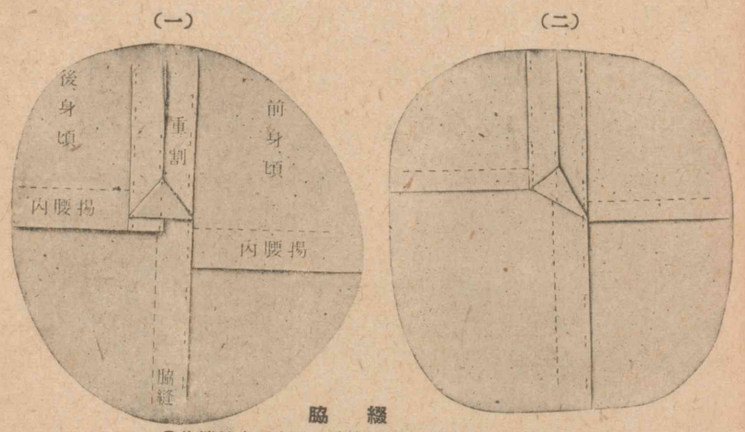
肩當をつけ,揚を縫ふ。前の揚は,布の幅全體を,後の揚は脊縫で拔針にして1針返し,脇縫標より0.4cm廣く縫ひ,居敷當をつける。

脇縫　揚の部分は被を整へて,一針拔または半返縫にする。



內腰揚と居敷當

脇綴



脇　綴

㊀後縫込を重割して割綴をし，脇縫代を綴ぢる。
㊁揚代が脇の縫込より少いもの。

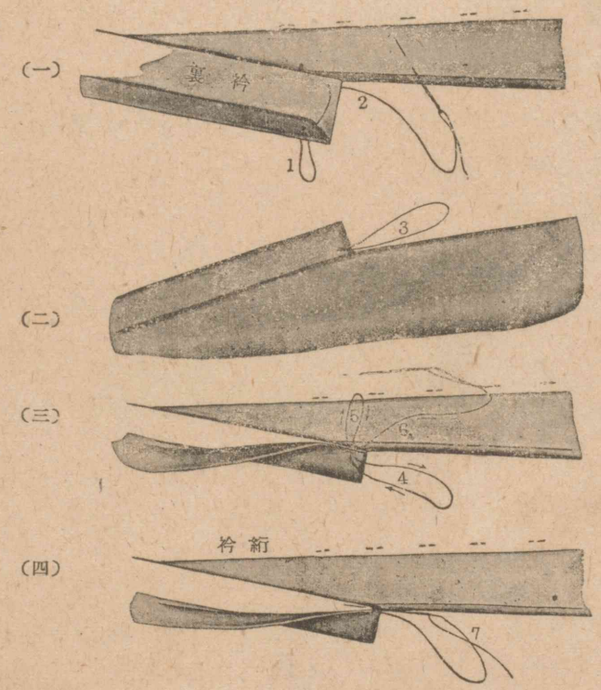
注意　揚が少いほど脇の縫込の重割は下の方に延び,揚が全くなくなれば,女物と同じになる。

(ハ)衽附・裾絎・衽綴

(ニ)衿附　三つ衿の縫代を凡そ1.3cmにして,衿肩明の$\frac{2}{3}$ぐらゐまで眞直にする。男物は前下りになるのを最も嫌ふから,特に衽の縫道を伸さぬやうに注意する。

衿先は女物の廣衿と同じに三つ留をして,衿先の表を山弛と同じ釣合に縫ひ,縫代を裏の方に返して綴ぢ,表に返す。

衿先の綴方



男物の衿先の綴方

㊀3の針目は,表布1枚だけ絲の出た穴に針を入れて針目をしのばせる。
㊁1針返絎をして,衿絎をする。

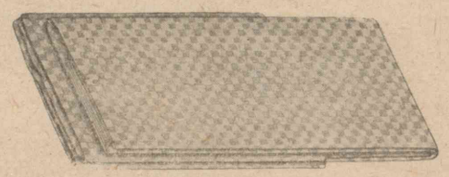
(ホ)袖附　袖幅は,人形の被山を眞直に折つて,折山の0.1cm内を縫道とする。布合は,人形から10cmほどの間は平らに,他は女物と同じにし,人形の際で四つ留をする仕方は,袖で身頃を挾み,袖の方で絲を結び,その絲で袖附をする(留の左

右 4cm ほどの間は半返縫)。

注意 脇縫には,被がかかつてゐるから,留も,留際の袖附縫道も,その被山ですることになる。

袖丈全部を袖附にする仕方の留は,男兒用筒袖と同じである(90頁參照)。

(ヘ)疊み方



男物着物の疊み方

第三章

着物の裁方總論

古くから裁方として傳はつてゐるものは,袖・身頃・衽衿などを取るのに無駄切を出さず便利に裁つやうに工夫されたものに過ぎない。それ故,その意味に叶へば,各布はどこから取つても差支ない。

裁方には,一つ身裁・二つ身裁・三つ身裁・四つ身裁・本裁などの種類がある。並幅二つ身裁・三つ身裁は,並幅一つ身裁より身幅が却つて狹くなるから,實用には餘り用ひられぬ。

1. 一つ身裁 用布の幅が(肩幅+縫代)×2ある時は,この裁方にすることが出來る。

(イ)並幅(36cm乃至38cm)のものは,1歳より3,4歳までのものを裁つことが出來る。

(ロ)用布が中幅物(45cm)の時は,5,6歳のものを裁つことが出來る。

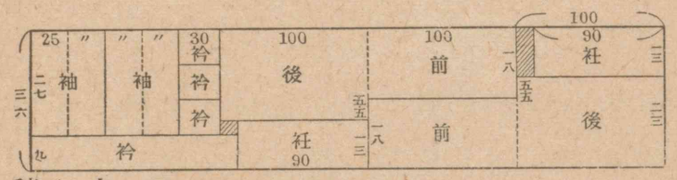
(ハ)用布が大幅(75cm)またはその2倍ある時は,大人物を裁つことが出來る。

2. 三つ身裁 用布の幅が,肩幅+衽幅+縫代

×4 ある時は,この裁方にすることが出來る。

(イ) 4,5 歳用　並幅兩面物

裁切裾總幅 108cm

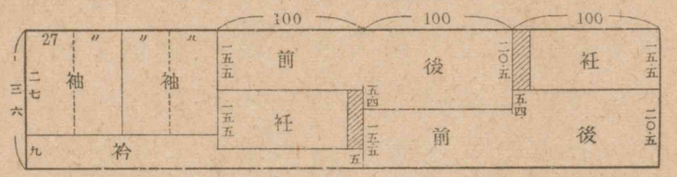


積り方

總丈＝袖布丈×4＋身布丈×3＋衿たし布
25cm　100cm

$$身布丈=\frac{總丈-(袖布丈\times4+衿たし布)}{3}$$

(ロ)並幅片面物　裁切裾總幅 103cm



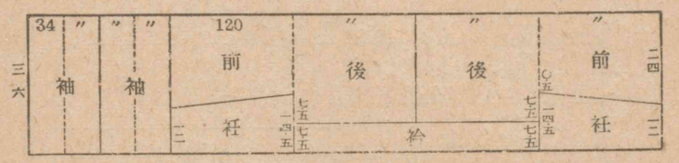
(ハ)用布が中幅物(45cm)あれば,7,6 歳より 11,12 歳のものを裁つことが出來る。

3. **四つ身裁**　用布の幅が,前總幅(前幅・衽幅)＋縫代×4 ある時は,この裁方にすることが出來る。

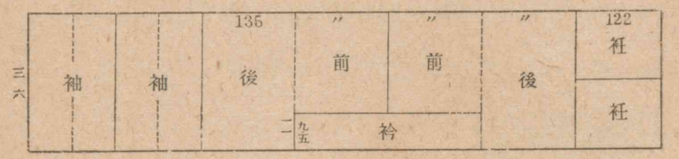
(イ)用布並幅の時は,5,6 歳より 11,12 歳までのものを裁つことが出來る。

四つ身には逆衽裁・前衿裁などがある。

(ロ)逆衽裁　裁切裾總布 135cm



(ハ)前衿裁　裁切裾總幅 161cm　14,15 歳用



脊縫で 3cm 縫込む。

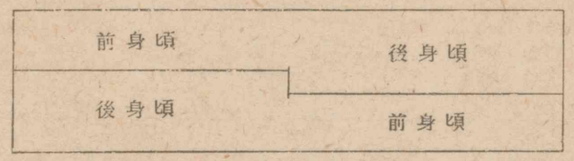
積り方

總丈＝袖布丈×4＋身布丈×5－布衽下り
13cm

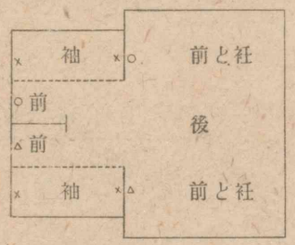
$$身布丈=\frac{總丈-袖布丈\times4+布衽下り}{5}$$

4. 二つ身裁·胸接裁·肩接裁の身頃の裁方

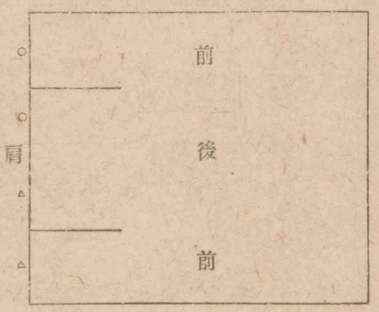
二つ身裁



胸接裁



肩接裁



肩接裁の脇の裁目の寸法は接代＋袖附＋身八つ口＋脇縫(10cm)

(1)和服は,袖·身頃·衽·衿など,幅や丈にゆとりを取つて方形に裁ち,縫方で形をつくるのであるから,縫直の時は,傷んだ部分を隠し,新しい部分を出して用ひることが出來る特長があるから,その點を注意して裁つ。

(2)裁違(三つ身の身頃·鈎衽など)は,用布を節約することが出來るが,縫直の時,布の部分を取りかへて使用することが出來ぬ缺點がある。

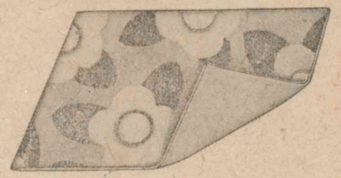
裁違または方形でないもの(縫合の個所が一定したもの)を裁つ時は,特に布の表裏に注意せねばならぬ。

第四章

袷基礎縫

第一節 袷の布合

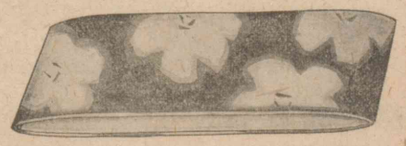
袷の布合は,2枚の布を糊で貼りつけたやうに平らに合せて,厚味のある1枚にするのである。



袱紗形布合

1. **袱紗形布合** これは,同形の2枚の布を平らに合せて縫ふ仕方をいふ。

2. **二つ折形布合** 袱紗形に縫つたものの丈を二つ折にして見ると,内側の布は丈全體に端から出加減になる。これを正しく合せるには,内側の布を外側の布の厚さだけ輪の部分で詰めるのである。

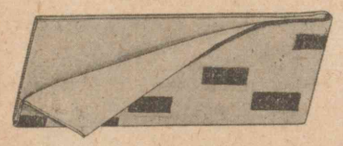


潤袖形布合

3. **潤袖形布合** 潤袖の形にして,表と裏を正しく合せる仕方をいふ。この布合は,幅は平らに,丈は裏を二つ

折形の2倍だけ詰める。

4. **筒袖形布合** 表と裏は,圓筒形の鑵の蓋と盒のやうな關係になるから,裏を表よりその布の厚さだけ全部にわたり小さくすれば,その形のままで表裏が平らな布合となる。



袂形布合

5. **袂形布合** 表の寸法より裏を丈も幅も布の厚さだけ詰めれば,平らに正しく布合が出來る。

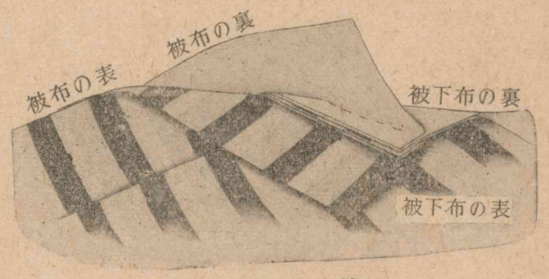
注意 若し山弛の部分に縫目がある時は,なほ縫代の厚さだけ多く裏を詰めることになる。

第二節 袷の縫目

1. **表裏別縫** 表と裏とを別々に縫つてから,兩方の被布を外にし,縫目を合せて躾絲で綴ぢる。

2. **四つ縫** 裏表を別々に布合して,兩被布を外側にし,4枚の縫道を合せて縫ふ仕方をいふ(縫目を確實にする時は,抄縫か一針拔にする)。

四つ縫の長所



四つ縫

(1) 裏表別縫に比べて手數が省ける。

(2) 表・裏が一緒に縫つてあるから,縫目は確實で,布合が狂はない。

四つ縫の短所

(1) 4枚を1本の絲で縫ふから,縫目の力は別縫に比べて弱く,綻び易い。

(2) 縫目が固くなる。

(3) 一本絲で縫ふから,表と裏の地質や色が違ふ時は,布地を害ふことがある。

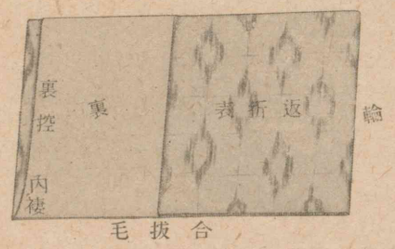
第三節 袷の端の整へ方

表裏を布合して,その丈または幅の端を整へる仕方に,表折返(輪)・毛拔合・裏控・裏袱などがあつて,縫合せることも絎けることもあり,また別布で縁取にすることもある。

端の表裏を縫合せる釣合は,形によつて加減

すること布接の通りである(31頁參照)。

1. **表折返**　表布の丈幅などの寸法が裏布より非常に長い時に,表を折返して裏にする。この接目の折は,普通,裏の方に返す。



裕の端の整へ方

2. **毛抜合**　表裏兩方とも仕立上寸法に被の分を加へて縫合せ,兩方を被山にして揃へる仕方である。これは端が固くしつかりする。

3. **裏控**　裏の方が表に出るのを嫌ふ時にする仕方で,裏を0.5cm乃至1cmぐらゐ控へるので,表布は控の分だけ廣く必要であるが,裏布はそれだけ少くても出來る(女物單衣廣衿のやうに,裏の方を被布にして,角に內褄をつくるときは表裏同寸)。

4. **袵**　裏の丈または幅を表より袵の2倍多くし,普通表を被布に裏をふかせる。

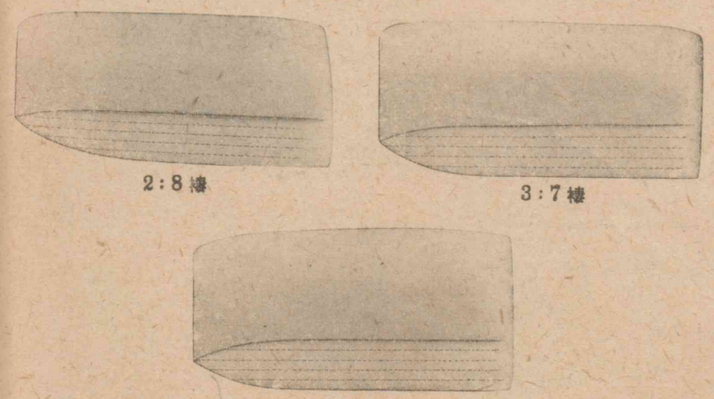
5. **褄**　袵の兩端には,褄をつくつて形を整へる。

(イ)褄の種類

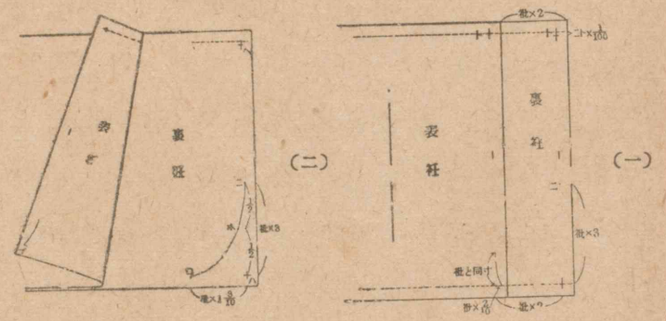
內褄　裏控の褄で,表を直線にして,裏だけ繰つて褄の形にする。

袖口褄　表を直線にして,袵だけで褄形をつくる仕方で,主に袖口袵の褄にする。

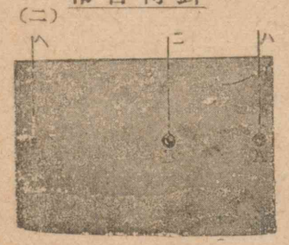
裾褄　袵の少いものは袖口の褄と同じにすることもあるが,普通は表を繰下げ裏を引上げて褄形をつくるので,その表裏の割合は,下圖のやうに 2:8 3:7 4:6 など,好みの形にする。2:8褄は表を袵×$\frac{2}{10}$繰下げ,裏を袵×$1\frac{8}{10}$の楕圓丸みにして縫合せたものである。3:7褄,4:6褄など同樣の計算で次頁のやうに標附をする。


2:8褄　3:7褄　4:6褄

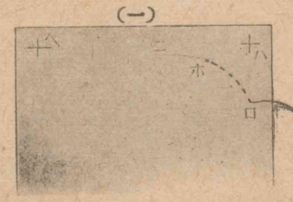
(ロ)2:8褄　標附



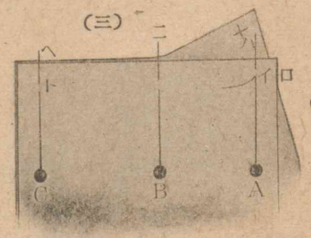
布合待針



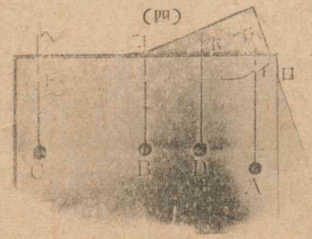
㊀A＝表の幅標の裏とハを合せる。
B＝裏ハ＝間を表と平らに合せる。
C＝表ト裏ヘを合せる。
(BC間で表がその $\frac{1}{100}$ 弛む)。



㊁縫縮の引絲
小針に口よりホの一針手前まで縫ひ，ホの方に結留をつくる。



㊂A＝表イと裏口を合せ打ち直す。



㊃D＝裏ニホを表と平らに合せて打ち，次に引絲を引き裏ホロを表と同寸に縮める。

㊄皺消の手付（ハを持ち布を充分に引いて皺を消し，ADの間の縫道を合せ待針を打つ）

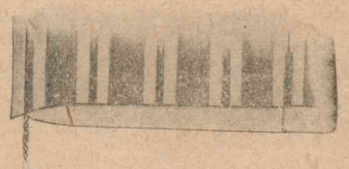
縫方　普通の針目に縫ひ,褄先の絲留は,表1枚を縫つて返留にする.

褄の隱躾

裾も褄も,被は表から0.3cmかけ,褄先の方だけ0.2cmにして,褄先を正しく整へる。

隱躾の道は被山から0.5cmの所とし,表針目を褄先より1cmの所に一針出し,他は殘りの衽幅を四分して三針出す(メリンスなどは針目の間を近くする)。

褄先の縫方　表裏の衽幅標を折り,褄先の被を整へ,右圖のやうに躾絲を表裏にかけて通し,撚つて引絲にする。次に裏に返して褄先を4cmほど縫ふ。仕方は,表裏兩衽幅を合せて待針を打ち,被だけ廣く縫ふ。褄先の縫代は,表布の方に裾·衿下の順に折つて表に返し,引絲を引いて褄先と衽を整へ,假綴をする。

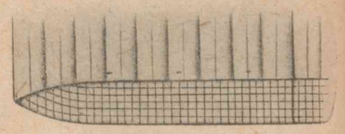


褄の隱躾と引絲の附方

正しい褄

(1)形が整つてゐる。

(2)褄の縦の布目は皆表と同じ向に整つてゐる。



正しい褄

(3)横の布目は皆褄の形に落ちついてゐる。

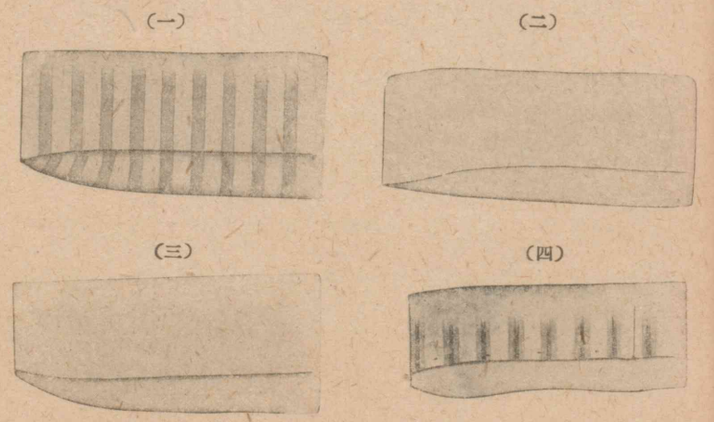
不出來の褄

(一)皺消の悪いもの(布合を誤れば,表の方に反つたり裏の方に屈したりする)。

(二)表の縫道を誤つたもの。

(三)表裏とも縫道を誤つたもの。

(四)附標を誤つたもの。



不出來の褄

第五章

袷着物

第一節 仕立上寸法及び裁方の大要

1. 仕立上寸法 小裁より大人物まで,すべて單衣と同じである。

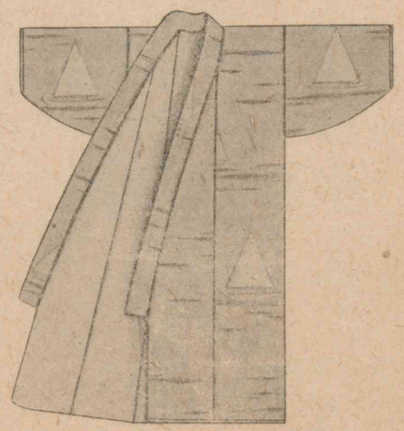
袵 { 袖口=0.2cm(毛抜合にすることもある)
　　裾=0.4cm ぐらゐ

2. 裁方 { 表=すべて單衣と同じに裁つ。
　　裏=通し裏と裾廻附とある。

第二節 小裁(一つ身袷)

1. 裏の裁方

(イ)通し裏 表と同じ裁方で,身頃と衽の布丈を袵の2倍長くすることが異るのみである。



小裁(一つ身)袷通し裏

通し裏總丈の積り方

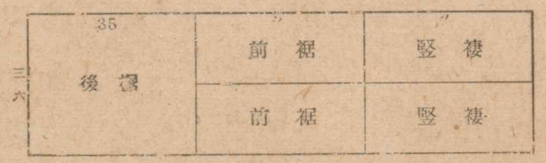
總丈=表總丈+(袵×6)

(ロ)裾廻附裏　奥裏と裾廻とで1枚の裏になる。奥裏は,裏袖·胴裏·衽先·裏衿などをいふ。用布の地質は輕く軟いメリンス·新モス類で,色は普通赤または黄·白などを用ひる。嬰兒用には,白か黄が適當である。

裾廻は,嬰兒用の外は丈夫な地質で表布と配合のよい色を選ぶ。

(ハ)表總丈478cm,袖布丈50cm,身布丈95cmの裾廻と奥裏の裁方

廻裾　用布　並幅105cm



裾布丈＝表身丈×$\frac{4}{10}$内外

竪褄布丈＝衿下＋5cm以上

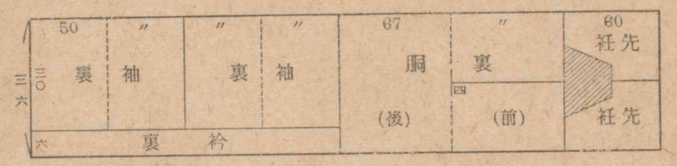
幅＝表衽布幅と凡そ同寸

裾廻總丈＝裾布丈×3
105 m　35cm

袖口布丈 { 濶袖＝袖丈×2
元禄袖·筒袖＝(袖口＋凡そ4cm)×2

注意　濶袖は,並幅を3分して袖口布と附紐をとると便利である(1枚の丈を2分して兩袖口布とする)。

奥裏　用布　並幅394cm



奥裏總丈＝表總丈－裾廻總丈＋(袍＋胴接代)×6
394cm　478cm　105cm　0.5cm　3cm

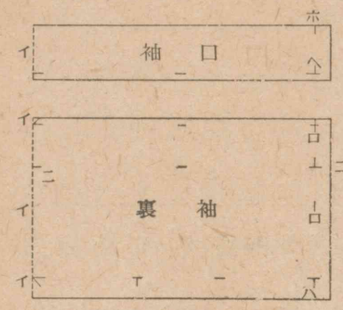
2. 仕立方

準備　用絲は表布·奥裏·裾廻と同色のものを用意する。

袷仕立特別注意

(1)袷を仕立てるのに最も大切なことは,その形のままで表裏全體を平らに布合することである。若し布合が不完全の時は,褄·袖口などの部分が如何に正しく出來てゐても,直ぐに着崩れがして見苦しくなる。

(2)袷は,違つた色の布を縫合せるところがある。その時は,布を汚さぬやうに薄い方と同色の絲を用ひる。例へば黑と赤の縫合には赤を,赤と白の縫合には白を用ひる。



(イ)袖(濶袖) 標附・縫方

表袖 單衣に同じ(但し袖幅は仕立上寸法＋0.2cm)。

裏袖

袖丈標イロ＝表の寸法－0.1cm イハ＝表－0.4cm(凡そその$\frac{1}{100}$)

袖口縫代＝1cm

幅＝仕立上寸法＋被＋袱×2
(0.2cm)

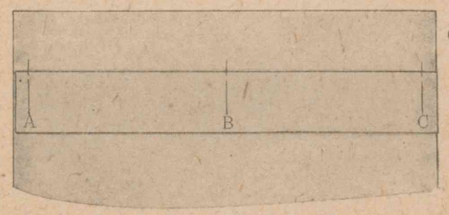
袖附＝表の寸法－0.1cm

ニ＝端より袖口布の幅標と同寸

袖口布丈イホ＝イロ－凡そその$\frac{1}{100}$強

イヘ＝イロ－凡そその$\frac{1}{300}$

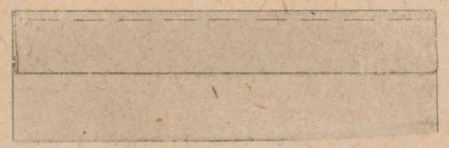
袖口布掛



(一)

㊀BA・BCは標通りに袖口布を張つて縫ふ。

(二)



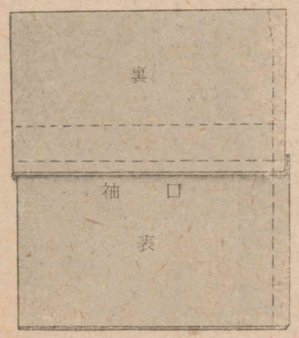
㊁袖口布と裏袖布と兩丈標を合せ，掛張して，袖口布の張を平均にして假綴をする。

袖口合 表を緩めて濶袖形布接にし,表から0.2cmの被をかける。

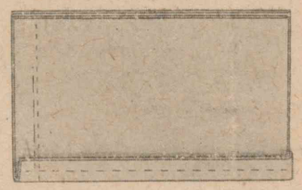
袖下 袖口合の表縫目を合せ,表袖より裏袖まで標通りに縫ふ(縫目の所は拔針して)。

袖下綴 後袖を中に,袖下を袱山から折り,八つ口の方を8cm殘して綴ぢる(八つ口の方だけ別々に縫ひ,殘りを四つ縫にする仕方もある)。表に返し,袖口の被と袱を整へ,躾をかける。

(一)



(二)



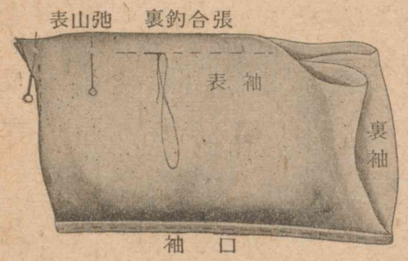
(三)

袷濶袖の縫方
㊀袖口を合せ袖下を縫つたもの。
㊁袖下の綴。
㊂袖下袖口の躾。

表裏の袖幅を仕立上寸法に折り,山標・袖附標・袖下の縫目などを合せて表裏の關係を調べ,釣合ぬ所は直す。

注意 八つ口の上の方は裏を釣合張に,下の方は表

を山弛にする。袖下の山弛は縫代があるから,熟練するまでは,表の方から八つ口を合せ,縫目の左右 8cm の所に絲で合標をしておく方が誤りがない。

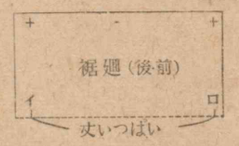


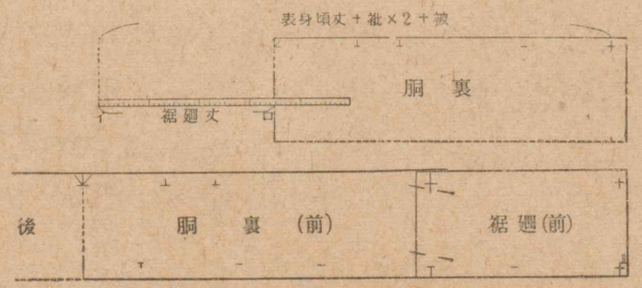
八つ口の縫方
縫道は袖幅の折が 0.2cm の被になる所。右袖は前,左袖は後の方より表を見て袖附標から 0.4cm 離して袖下まで縫ひ,表に返して殘りの方を縫ふ。

(ロ)身頃の標附

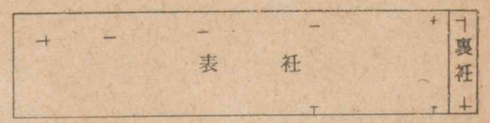
寸法
- 表　裾の縫代を1cmにする外,單衣に同じ。
- 裏　丈＝表丈＋袍×2
　　袖附＝表袖附－0.1cm
　　裾口＝後前とも,表の幅－その $\frac{1}{100}$

裾廻附裏の標　丈標と前幅標は圖のやうにして標す。





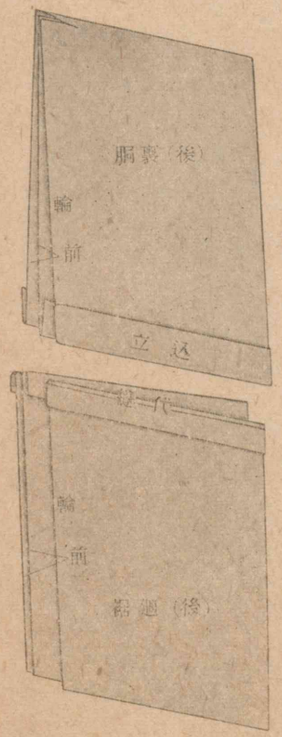
(ハ)衽標附　衽先布と竪褄布を接ぎ,衽先の方に折り,隱躾をして,表衽も裏衽も各,表を中に合せ,裏衽の裾を,袍×2出して表衽を重ね,單衣のやうに標附をしてから褄の標をする。



衽先の脹(ふくら)みは,衽下りの斜との釣合になるから,標附を省いて,衿附布合の時適當にするのもよい。

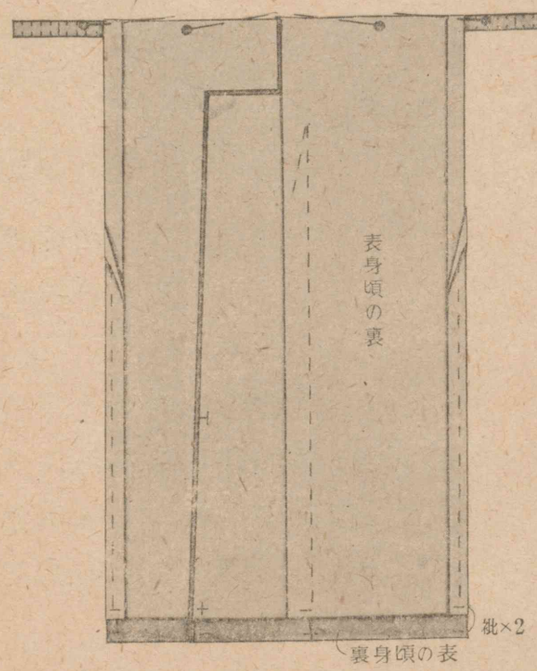
(ニ)縫方　表·裏を單衣のやうに脇縫と衽附とをする(脇縫留は,身八つ口標の0.4cm手前で返留にし,裏の裾口は小針に縫ふ)。

裾廻附は,胴接標を各裏の方に折り,後·前を間違へぬやうに正しく置いて接ぎ,薄地の方に折を返し,隱躾をする。



胴接の仕方

(ホ)身頃丈調　表と裏を中表に重ね,衿肩明を正しく合せ,脊·兩肩山·兩脇山に待針を打ち,表·裏の標を調べ,裏が,袵×2長くない時は絲標で直す。



丈　調

(ヘ)裾合　表裾の方を手前に各縫目の丈標を合せ,裏幅が表より $\frac{1}{100}$ 張るかを調べながら待針を打つ。

注意　縫目を縫ひ合せる時は,被を整へ,兩被山を縦に4cmぐらゐ正しく合せて待針を打ち,縫目の間は掛張し,布の釣合を平均にして待針を打つ。

褄·裾を縫ひ,衽幅だけ表から隱躾をし,他は掛張して,被と袵を整へながら表裏を一緒に躾で押へる。

(ト)脇縫綴　表裏を肩山から裾まで平(たひら)に合せ,身八つ口際は重割にし脇縫を3cmぐらゐの針目に躾絲で綴ぢる。

(チ)身八つ口　岐際に四つ留をする仕方は兩前身頃で後身頃を挾み,裏の方で絲を結ぶ。留の被山から肩山まで布目を眞直に袖附の折を表·裏ともつけ,身八つ口は折山が0.2cmの被山になるやうに縫ふ。

(リ)袖附　表袖幅の折が被山になるやうに縫ひ,岐際に四つ留をする(兩袖で身頃を挾む)。次に裏袖をつけ,縫代を身頃の方に返す。

注意　(1)上達したならば,四つ留を先にして,その絲で表袖附をするのも便利である。

(2)裏袖附の縫代を表と反對に折るのは,縫代が重ならぬやうにするためであるから,着物·羽織·袷·綿入の別なく皆同樣にする。

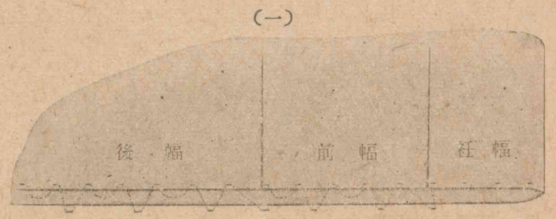
(3)留の裏被山がねぢれるのを嫌ふ時は,變り四つ留法による(仕方は卷二13頁で說明)。

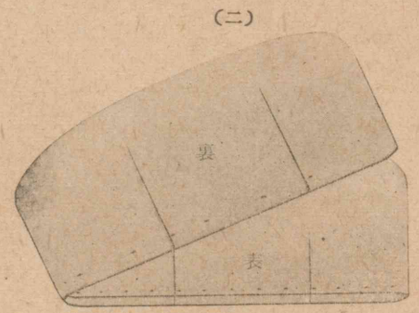
(ヌ)衽附綴　衿肩明から裾まで表·裏を平らに合せて待針を打ち,衿下の間は縫絲で小針に,殘りは衽先の 8cm 手前まで普通に綴ぢる。

(ル)衿下　表裏の衽幅を折り,褄先を 4cm ほど縫ひ,絲を切らずに褄先を整へて表に返し,次に衿下を合せて,折山が0.2cmの被山になるやうに縫ひ,表に返す。

(ヲ)衿附　衽先の表·裏を平らに整へ,衿附縫道の內を假綴しておき,單衣と同じやうに衿附·衿紬·共衿掛をする。

(ワ)裾綴





裾綴の仕方

●綴道＝被山より 0.5cm　表針目＝0.1cm 距離＝3cm乃至3.5cm にして幅を奇數に等分し，針目を 4·6·8·10などの偶數に出す。裏針目は表針目より稍大きくして數は表針目の$\frac{1}{2}$にする。　●出來上り

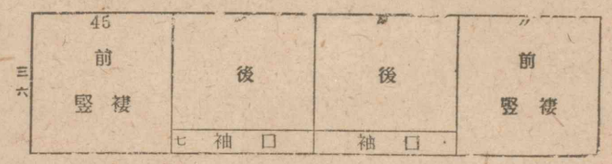
(カ)仕上。

第三節　中裁四つ身袷

1. 裏の裁方

(イ)表總丈 688cm, 袖布丈57cm,身布丈 115cmの裾廻附裏の裁方

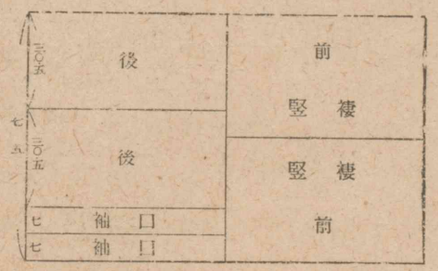
裾廻　用布　並幅 180cm



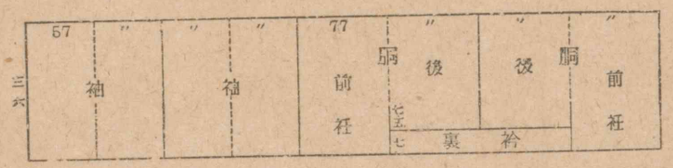
積り方

並幅總丈＝裾布丈×4
180cm　45cm

用布　75cm幅



奥裏　用布　並幅 536cm



積り方

胴裏布丈＝表身布丈－裾布丈＋(袱＋接代)×2
77cm　115cm　45cm　0.5cm　3cm

奥裏總丈＝表總丈－裾廻總丈＋(袱＋接代)×8
536cm　688cm　180cm　0.5cm　3cm

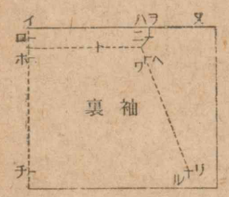
通裏積り方

裏總丈＝表總丈＋袱×8

2. 仕立方

(イ)袖(筒袖)　表裏の布合は筒袖形となり,その上に袖下の縫込が多いので,裏の寸法は多く詰めることになる。

標附　表袖は單衣と同じで,幅標は被の0.2cmを加へる。



裏袖

イロ・ハニ＝1cm(縫代と被)

ロホ・ニヘ＝袱×2

ト＝袱山

ホチ＝袖幅

ヌリ＝イチと同寸

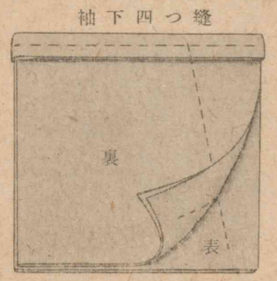
ル＝袖丈(表袖丈－その $\frac{1}{100}$ 强)

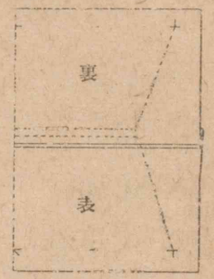
袖口標 $\begin{cases} ヲ＝表の寸法－その\frac{2}{100} \\ ワ＝ヲ－0.3cm \end{cases}$

ヘワ・リル兩交叉點に物差を當てて,袖下を標し,被山ト線まで延長する。次にト線よりニヲ交叉點まで斜に標す。

縫方

袖下別縫





袷筒袖の縫方

袖口は表を綴めて筒袖形布接にする。
縫代は袱を出す時は表に,毛抜合の時は裏の方に返す。袖下は四つ縫または別縫にして綴ぢること濶袖と同じである。

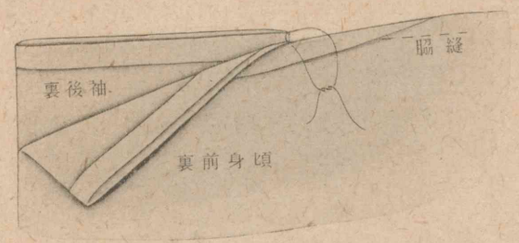
(ロ)身頃標附　表は單衣のやうに標をつける。裏の裾廻と胴裏に丈幅の標をする。但し前幅と摘縫の標は,胴接標を合せ,待針で押へてからすること一つ身袷と同じである。

縫方　表と裏を縫ひ,裾を合せ脊綴をし,附紐通しの上と下を重割にして脇綴をする。

次に紐通し口の四つ留をして口明を縫ふ。

(ハ)袖附　表は單衣の通り。

裏袖附



筒袖の裏袖附の留方

裏袖附は,表袖附の中に無理がなく納まる位置で留め,その絲で縫ひ,縫代を身頃に返す。

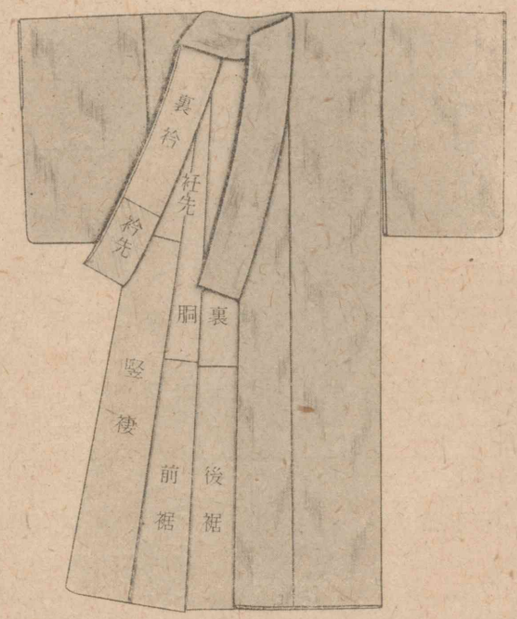
(ニ)衽綴

(ホ)衿下縫

(ヘ)衿附　表裏の衽先を整へ,假綴をして一つ身袷のやうに衿附をする。若し衿幅の中に衽先の布を折込んで見苦しいほど厚くなる時は,衽先の縫込の多い分を身頃の方に折込み,衿綴をして,衿紵·共衿掛·裾綴などをする。

(ト)仕上

第四節　女物袷



女物袷裾廻附

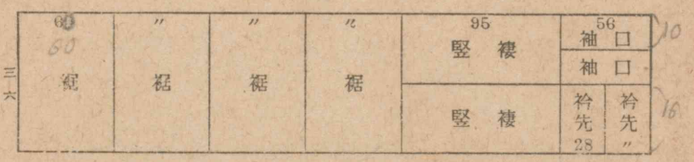
1. 裏の裁方

(イ)裾廻布の寸法

身頃の裾丈	60cm内外(凡そ身丈×$\frac{4}{10}$)
竪褄丈	95cm内外(衿下＋凡そ20cm)
衿先布	25cm内外
袖口布丈	56cm内外(袖口＋5cm)×2
ミミミカ	10cm内外

(ロ)表總丈 1100cm,袖布丈 60cm,身布丈 150cm,衽布丈 130cm,衿布丈 180mc の裾廻附裏の裁方

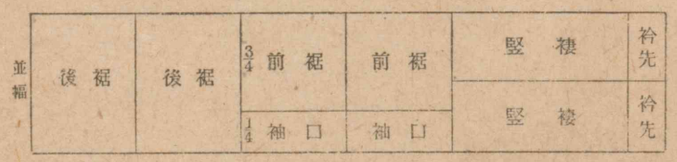
裾廻　用布　並幅 391cm



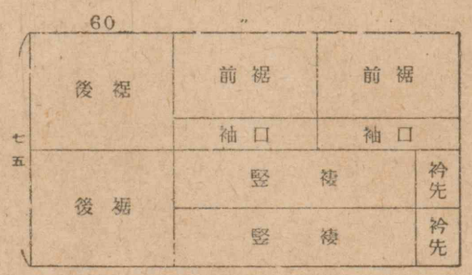
積り方

裾廻總丈＝裾布丈×4＋竪褄布丈＋袖口布丈
391cm　60cm　95cm　56cm

$$裾布丈=\frac{裾廻總丈-竪褄布丈-袖口布丈}{4}$$



75cm幅　180cm



奥裏　用布　並幅 770cm

積り方

胴裏丈＝表身布丈－裾布丈＋袵×2＋接代と縫込
100cm　150cm　60cm　0.5cm　9cm

裏衿布丈＝表衿布丈－衿先布×2＋接代×4
130cm　180cm　28cm　1.5cm

衽先布丈＝表衽布丈－竪褄＋袵×2＋接代と縫込
45cm　130cm　95cm　0.5cm　9cm

奥裏總丈＝(袖布丈＋胴裏布丈)×4＋裏衿布丈
770cm　60cm　100cm　130cm

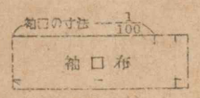
注意　奥裏を大體積る時は,表總用布より裾廻用布を減じ,これに60cm内外を加へる。

2. 仕立方

(イ)袖(袂袖・元祿袖)

標附　表袖は單衣に同じ。但し幅標は袖口下を縫つてから表裏を一緒に標す方がよい。

袖口布



丈も幅もいつぱいに標して,その寸法の通りを裏袖に標す。

裏袖

丈標イ＝表－0.1cm
ロ＝表＋0.5cm
ハ＝表－0.4cm（凡そ$\frac{1}{10}$）
袖口ニ＝表より詰加減
ホ＝袖口の縫代 0.8cm
ヘ＝留標（袖口縫代＋被＋枇×2）
ト＝袖口下の縫代ヘより 0.2cm 深く（裏袖幅の内側の詰分）
袖附標＝表－0.1cm

八つ口布をつけるときの標附。

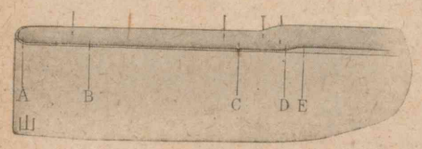
八つ口布は幅丈をいつぱいに標す。

袖は八つ口布の丈を袖下標より，幅を袖幅標より同寸に標す（このときは袖幅を先に標す）。

縫方

袖口布・八つ口布掛　袖口布を袖口の部分だけ張つて假綴をし，兩端は被をかけずに絎ける。八つ口布は被をかけずに平らにつける。

袖口の布合



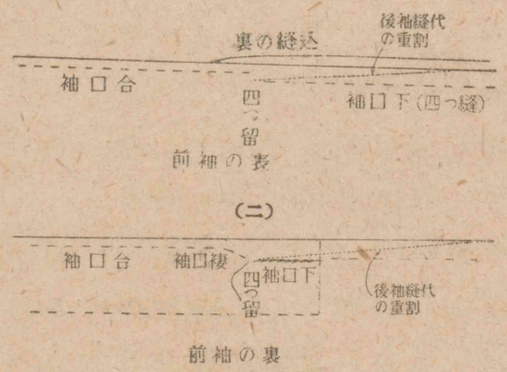
袂袖・袖口合の待針

AB＝表山弛（凡そ8cmの間）
C＝袖口標Eより凡そ 4cm
BC＝裏鈎合張
D＝Eより袖口褄にする寸法
CD＝表裏平
DE＝始め縫代ホより眞直に平らに布を合せてから，裏だけ待針を抜き，ヘに刺しかへて棲形にする。

袖口を縫ひ，表から被をかけ，前袖の表・裏で後を挾み，四つ留をする（袖口褄の部分は縫ひ殘し，四つ留で形をつくる仕方もある）。

袖口下を表裏別縫にする仕方　四つ留の被山が袖口下の被山になるやうに，表・裏を別々に10cmほど縫ひ，前袖を外側にして4枚の袖丈標を合せ，待針を打つ。袖下は八つ口の方を8cmほど表・裏を別縫にする。次に袖口下の別縫の所を重割にして綴ぢ，袖口下と袖下の縫殘りの部分を四つ縫にする。

袖口の留際から四つ縫にする仕方　後袖の表・裏に極く淺く摘縫代をつくり，表・裏を別々に布合したものを4枚合せ，袖口布の部分は半返縫にして四つ縫にする。

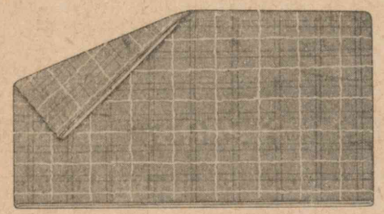


袖口下の四つ縫

㊀表布の方から見たもの。㊁裏布の方から見たもの。

袖幅標　袖口より下は,裏の縫目から袖幅に0.2cm加へて標し,袖口の部分は,表の被山から出來上り幅に絲標をして,表裏の袖幅をなるべく布目眞直に折つておく。

袂の角または丸みを整へて表に返す。



袷袂袖出來上り

八つ口の縫道は,幅の折より表0.2cm,裏は0.1cm廣い所にして縫ひ,被をかけずに,そのまま表に返す。

躾　袖下・袖口下は前袖を見て一束に,袖口は被・袵を整へながらかける。

(ロ)身頃　表・裏(胴接をして)の脊縫・脇縫・衽附・裾合・脊綴・脇綴・身八つ口合まですする。

(ハ)袖附　表は單衣の通りに縫ひ,裏は身頃を摘まずにつけて,身頃の方に折る。

(ニ)衽　縫絲で細かく綴ぢ,衿下を縫ふ。衿下は20cm置きに合標をして表に返しながら縫ふ。

(ホ)衿附　裏衿に衿先布を接ぎ,裏衿の方に折り,隱躾をする。次に裏・表の衿を重ね,丈・幅及び丈の合標をして衿附を四つ縫にする。縫込の

仕末・衿紬などは單衣の廣衿と同じである。

(ヘ)裾綴

普通は｛前幅　表6針　裏3針
　　後幅　表8針　裏4針

(ト)仕上

(チ)袷類仕立方特別注意　袷・綿入などは正しく仕立てたものであつても,着用中自然に狂ふ個所があるから,熟練した後は,次のやうに加減をしておくことも必要である。

(1)後裾袵は吹き出して來るから,詰め加減に仕立てる。

(2)前及び衽の裾袵は次第に詰つて來るから,寸法より少し多く出して仕立てる。

(3)上前の裏衽幅は自然にふき出るから,裏の幅を控へ加減にする。

(4)裏袖附は,袖附の中程で後の方は身頃幅を0.2cm(綿入は凡そ0.3cm)詰め,前の方は身頃幅を0.2cm廣くする(綿入は凡そ0.3cm)。

第五節　男物袷

1. 裏の裁方　普通は通し裏にする。

積り方

裏總丈＝表總丈＋袖×10

注意　總用布の長い時は,身布丈を長く裁ち,肩に揚をして,縫直の時に裾のいたんだ所を切つて再三用ひることが出來るやうにする。また總用布の短い時は,衿を接ぐこともあり,また下圖のやうに裁ち,衿先にだけ附けることもある。

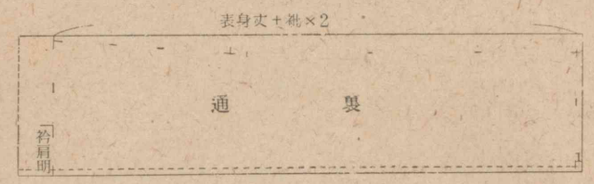
2. 仕立方(袵附を四つ縫にする仕方)

(イ)袖　女物袷と異る點は,袖口を毛拔合にすること,八つ口を人形にすることである。

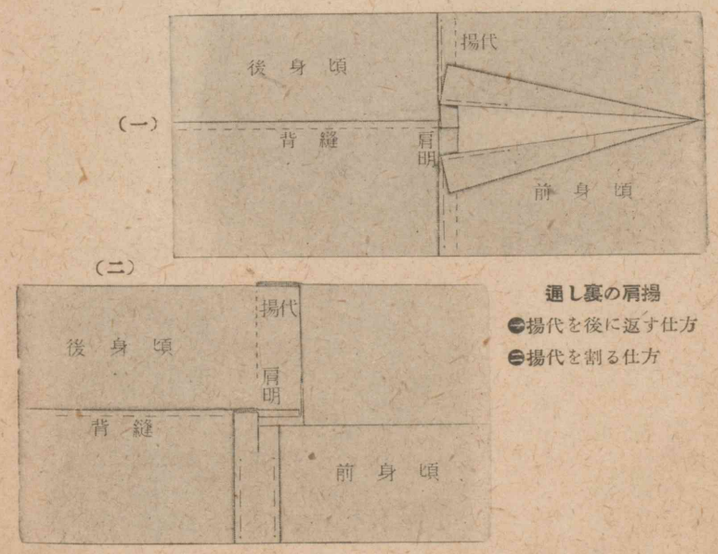
人形の縫方　人形から袖下の方を8cmほど表と裏を別縫にし,人形の表縫代を重割にし,裏は割つて兩方を綴ぢ,角を折つてかがる。

(ロ)身頃

通し裏の標附　裾から丈を計つて揚の標をし,それを肩山にして,下圖のやうに後身頃を標し,次に前身頃を標す。



縫方　表身頃の揚をして脇を縫ふ。次に裏身頃の揚をして脇を縫ひ,裾を合せ,脊・脇を綴ぢる。

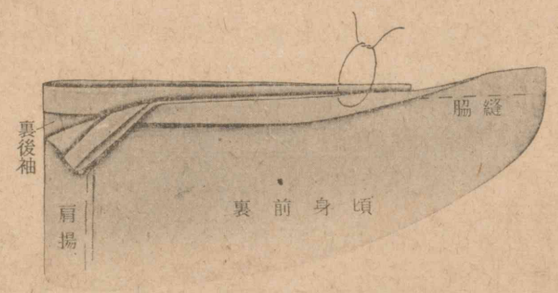


通し裏の肩揚

㊀揚代を後に返す仕方

㊁揚代を割る仕方

(ハ)袖附　表袖附は單衣の通りに,裏袖は次圖のやうにする。



人形袖の裏袖附

表の留より 0.4cm あげてかち合はぬ所で留め,その絲で袖附をする。肩に揚のあるものは縫代を袖の方に返す。

(ニ)衽附　衽の標をつけ,裾·褄を縫ひ,表·裏の衽附の縫代に丈の合標を3個所ほどしておく.前身頃は表裏を平らに合せ,幅標の直ぐ際に假綴をする。

身頃に衽の表を合せて,合標の所に待針を打つ.次に裏衽の合標を合せて待針を直し,四つ縫にする。

(ホ)衿下を縫ふ。

(ヘ)衿附をする.衿先のつくり方は,單衣と同じである.

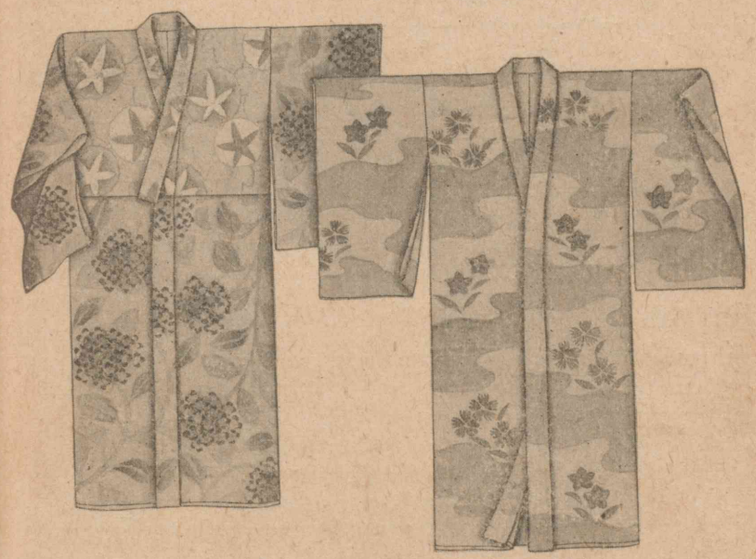
(ト)裾綴

(チ)仕上

第六章

襦　袢

第一節　女物袷長襦袢



摘　衿　　並　衿

1. 女物長襦袢寸法表

名稱		寸法（着物を標準とする）	裁切寸法
袖	丈	1 cm 詰	
	幅	0.5 cm 詰	
	附	0.5 cm 詰	
身頃	丈	着丈（弛2cm乃至4cm）	後＝着丈＋3cm 以上 前＝後と同寸または後丈＋弛
	衿肩明	0.2 cm 詰	
	後幅	2 cm 増	
	肩幅	同寸	
	身八つ口	1cm乃至2cm増	
	前幅	2 cm 増	
衿幅	三つ衿	5 cm	幅＝並幅の$\frac{1}{2}$ 丈＝(身丈＋16cm外内)×2 16cm＝衿肩明10cm＋弛3cm＋衿先縫代2cm＋山接代1cm
	下	7 cm	
裄		同寸または0.5cm詰	

2. 裁方

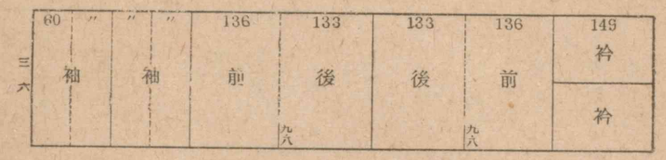
寸法の積り方

後布丈＝着丈＋三つ衿縫代＋裾の縫代と被
133cm　130cm　1.5cm　1.5cm

前布丈＝後布丈＋弛
136cm　133cm　3cm

衿布丈＝後布丈＋弛＋衿肩明＋接代＋衿先縫代
149cm　133cm　3cm　10cm　1cm　2cm

表用布　並幅 927cm



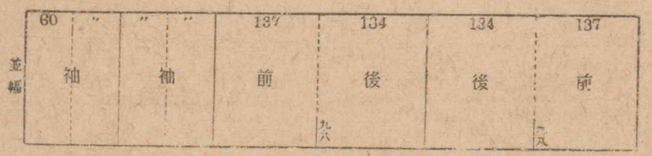
積り方

總丈＝(袖布丈＋後布丈)×4＋前後の差×2＋衿布丈
927cm　60cm　133cm　3cm　149cm

注意 (1)用布の短い時は,半襟の下になる部分に別布を用ひる。

(2)身布丈は前･後の差をつけず同寸に裁ち,後身頃に内揚をして弛をする方が縫直には便利である。

裏用布　並幅 782cm



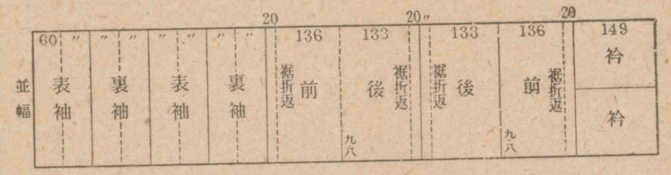
積り方

裏後布丈＝表後布丈＋袍×2
134cm　133cm　0.5cm

裏總丈＝(袖布丈＋裏後布丈)×4＋前後の差×2
782cm　60cm　134cm　3cm

裾廻布　着物と同じやうにすることもあるが,表身頃を長く裁つて折返すことも,横布を用ひて袖口をかけるやうにすることもある。

袖無双共裾　用布　並幅1247cm



積り方

總丈＝袖布丈×8＋(後布丈＋裾折返)×4＋前後の差×2＋衿布丈
1247cm　60cm　136cm　20cm　3cm　149cm

注意　(1)用布不足の時は,裏袖を半幅にして八つ口の方につける。

(2)袖は表裏を裁ち切らないでも縫ふことが出來るから,布を利用するには,つづけておく方がよい。

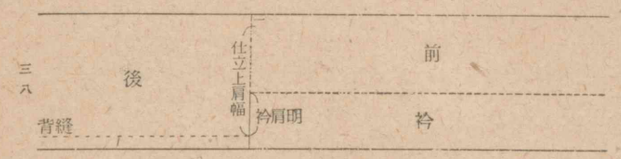
摘衿裁　並幅　上衿には別布を用ひる。

前布で衿を摘むから衿肩明の切込を多くする。

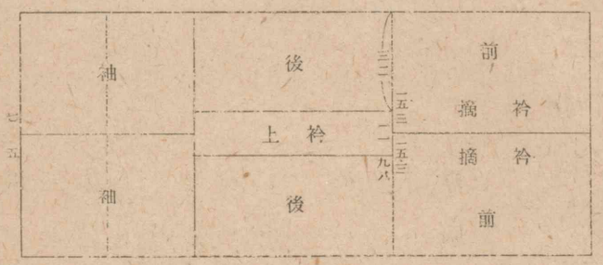
脊の縫込＝布幅－(肩幅＋袖附の縫代)

衿肩明の切込＝仕上衿肩明－0.4cm＋脊の縫込

摘衿の衿肩明裁方



75cm 幅



3. 仕立方

(イ)袖　濶袖にする。

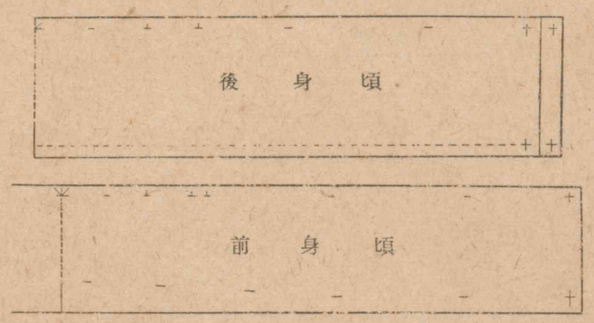
縫方は袖口合の折を裏の方に返し,隱躾をして裏控にするのが普通である。

裏控は,平常着は1cmぐらゐにして八つ口の方に縫込んで縫返が利くやうにし,晴着は表布幅をいつぱいにして裏の方に返し體裁をよくすることもある。

無双のときは,袖口を毛抜合にする。また表裏をつづけて裁つたときは,袖口と八つ口を縫つてから袖下を四つ縫にする。

(ロ)身頃

標附



前幅標 ｛裾より衿下と同寸ぐらゐの間眞直.
　　胸では1.3cmほど脹みを持たせる。

弛標は身八つ口の下にする。

裾廻の丈·幅を標す。

裏身頃は丈を袵×2 長くして裾廻附の標をする。

縫方

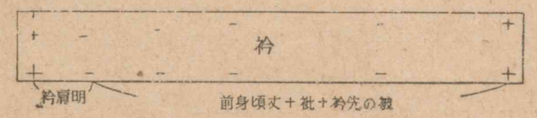
表·裏の脊脇を縫ふ。脇縫は裾から合せて,弛を身八つ口に出しておく。

裾廻布を袖口掛のやうにしてつけ,隱躾をして裾合をする。

脊·脇を綴ぢ,身八つ口は,前の方が多いままで縫ひ,袖附をする。

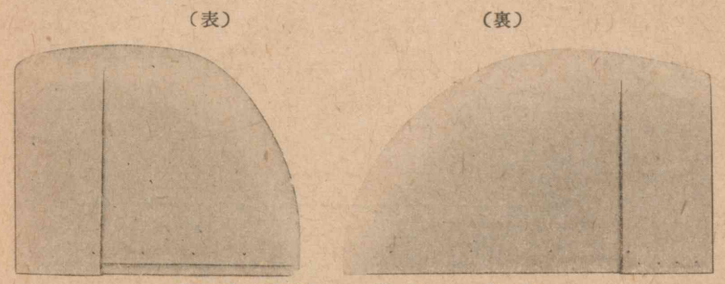
前身頃の表と裏を平らに合せて,衿附際に假綴をする。

(ハ)衿　標附



衿附縫代＝1cm　紵代＝三つ衿の外は斜

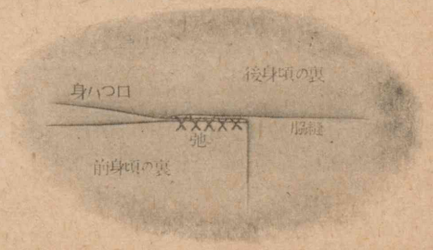
衿の山を接ぎ,縫代を割り,布地の薄いものには芯を入れて衿をつける。衿先は,着物と同じにつくり,裏側に隱躾をして衿紵をする。



袷長襦袢の衿先と裾綴

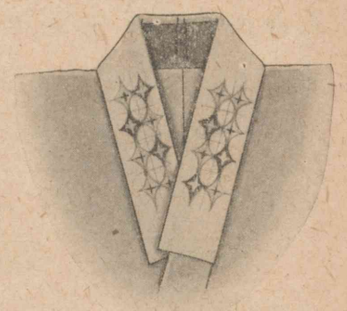
(ニ)裾綴　衿附の縫目には針目を表裏に出し,着物の綴よりも針目の間を近くする。

(ホ)前身八つ口の弛分を襞にして,裏の脇縫に綴ぢつける。



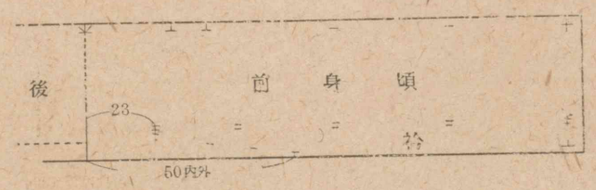
弛の縫方

(ヘ)半襟　模様の釣合を考へて衿幅を定め,裏衿と縫ひ合せ,躾をかけ,0.5cmの裏控にして芯を入れる。下の端は,衿幅より廣い部分を縫つて表に返し,半襟の表と裏で衿を挾んで絎けつけ,三つ衿に衿絲をつける。



半襟のかけ方

摘衿標附

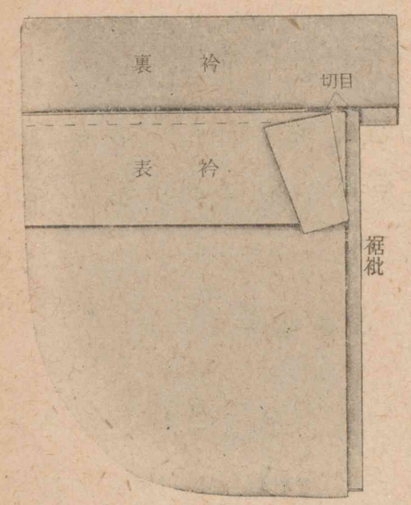


表・裏の前身頃を重ねて,幅をいつぱいに標す。

縫方

(1)摘縫代の山を表・裏とも裾の方だけ 2cm ほど切込を入れる。

(2)表・裏の衿附の摘縫を衽下りのあたりまで別々に縫ふ。



摘衿の衿先

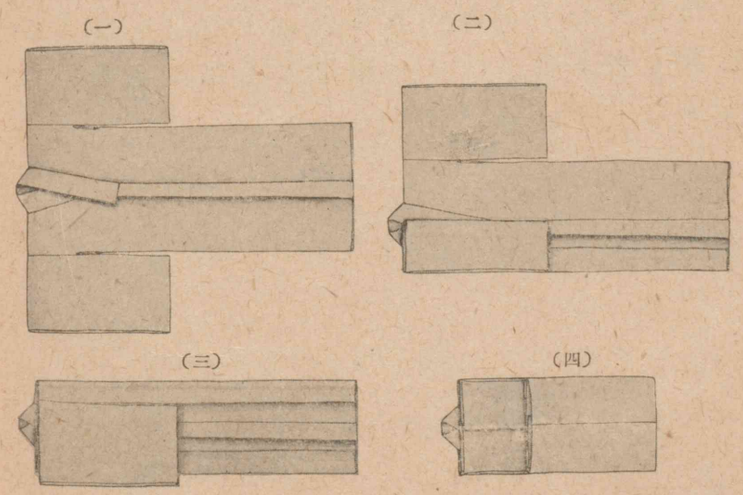
(3)裾合をする。

(4)表・裏の衿の縫目を綴ぢる。

(5)衿先を縫ひ,隱躾をして衿芯を入れ,衿絎をする。

(6)上部の衿附をする。

(ト)仕上



長襦袢の畳み方

第二節　男物袷長襦袢

裁方も仕立方も,大體女物と同じであるが,袖附は着物に倣つて人形にし,前身頃の弛はつけない。

第三節　單長襦袢

形は袷長襦袢と同じで,縫方は單衣のやうにする。但し袖口は耳のまま用ひる。

第四節　半襦袢

袷も單衣も,身丈は着丈の$\frac{6}{10}$ぐらゐにして,袷は裾を表折返にする。脇縫の下部は凡そ13cmほどの馬乘(岐縫)にする。

第七章

女　帶

1. 種類　腹合帶(晝夜帶·鯨帶ともいふ)
半幅帶(老人·子供用)
全帶
名古屋帶

2. 用布　帶地には繻珍·緞子·絲錦·綴織などの厚地の紋織類の外に繻子類·博多·琥珀·鹽瀨などがある。價格は,純絹絲織·人造絹絲織などで非常な相違がある。また普通の縮緬·羽二重·紹·麻·メリンスなども帶模樣にして用ひる。

3. 仕立上寸法(大人物)

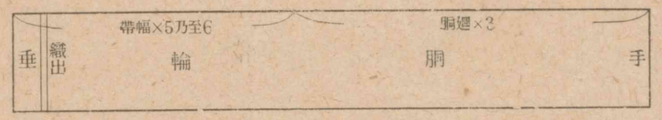
幅　28cm乃至30cm(凡そ着物の後幅＋2cm內外)

注意　儀式用の全帶などは幅を普通よりも廣くする。

丈　320cm乃至400cm(胴廻×3＋帶幅×5乃至6)

注意　厚く固い地質のものは,薄地物·軟質物よりも丈が長く要る。また好みによつて特に30cmぐらゐ長くすることもある。

4. 名稱



第一節　腹合帶

腹合帶は,2枚の帶側を袱紗形布合にし,四隅を角縫にし,芯の丈を弛め加減に入れてつくつたものである。

腹合帶は兩側の色の取合に注意することが大切である。

仕立方

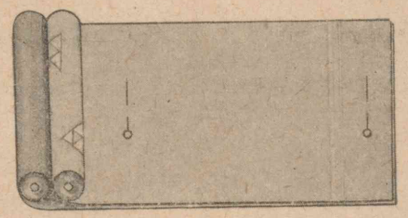
(イ)地直　全體に火熨斗をかけ,布地を平らにしてから兩耳を伸す。その加減は,帶地の兩端を持つて引張り,兩耳が自然に少し垂れる程度にする。耳に鋏を入れても伸びぬものは裁ち切る。

注意　帶は地直が大切である。地直が充分に出來てゐるものは,布合が容易である。

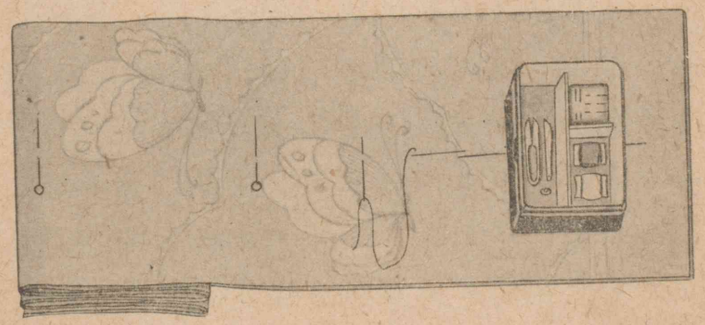
地直をした帶側の厚地の方は表を中に,薄地の方は表を外にして,各々手にする方より卷棒に卷く。

芯地　特に帶芯用として出來てゐるものや古芯は,そのまま使用しても差支ないが,眞岡木綿・三河木綿などは,そのまま用ひると狂ふから,地直をする。その仕方は,木綿を水に入れて,絞らずに生乾にしたもの,または霧を充分に吹いたものを卷棒に卷きながら布目を整へ,數時間ほどおいて火のしをする。

(ロ)布合

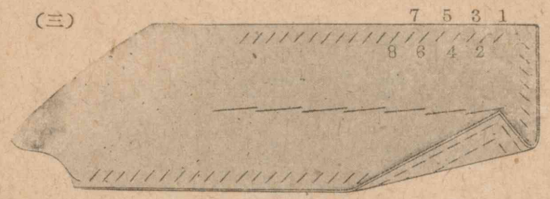


厚地の方を下に,薄地を上に,織出しの位置に注意して兩表を合せ,幅の中央で全體の丈を平らに合せながら待針を打つ(上圖)。



上圖の如く幅の中央に假綴をし,待針をとる。

(三)



幅を平らに合せて端の假縫綴をする。

注意

(1)假綴の針使は,布合の方向と直角にする方が狂はない。

(2)一方の帶側が長過ぎる時は,手の方で折返しても縫込んでも差支ない。また手より 100cm の所に摘んでおく仕方もある。

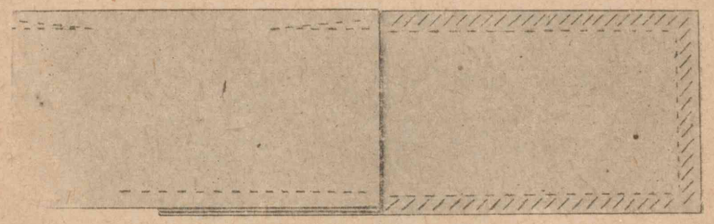
(ハ)標附

幅標＝仕立上寸法＋被(0.2cm)×2(10cm おきぐらゐに計り,輕く通し篦をする)

丈標＝幅標と直角に通し篦をする(垂の方は織出より凡そ 10cm 下げる)

仕方は端から 50cm ほどの間幅を輕く二つ折にして,兩方の幅標を正しく重ねて丈標をするか,端を 30cm ほど折つて幅標を正しく合せ,輪から同寸に計つて標してもよい(第一章基礎 22 頁,裁目の歪みを正しく裁切る仕方の應用)。

(ニ)縫方

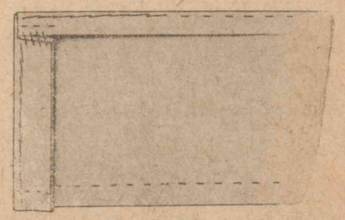


縫方

兩端の縦 20cm と横とは半返縫に,角は角縫にする。返口は斜返留にして丈の中央より手の方に凡そ帶幅だけあける。

縫代は厚地の方に,同質のものは薄色の方に折り,角を正しく整へて綴ぢる。

注意 芯は厚地・薄色の方に入れると,特に厚く見えるから,縫代の折方に注意する。

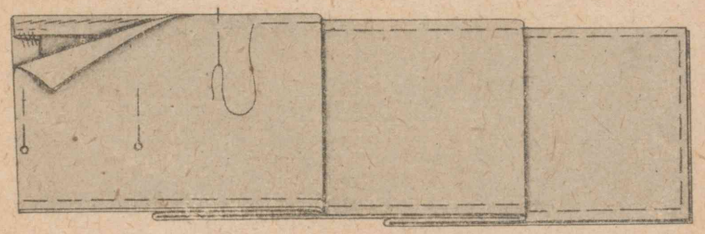


角の綴方

(ホ)芯の拵へ方 芯布の幅を輕く二つ折にして,仕立上幅の $\frac{1}{2}$ を計り,通し篦をして一端を裁ち,次に仕立上幅と同寸に正しく標して裁ち切る(帶側が厚地の時は 0.1cm 狹く)。2 枚芯は 1 枚を縫代だけ狹くして平らに合せ,躾で綴ぢておく。

芯の附方 帶幅の中央で,芯丈を凡そ $\frac{1}{100}$(芯の軟いものは多く,固いものは少く)弛めて重ね,待針を打つ。次に返口だけ殘して縫目の際に

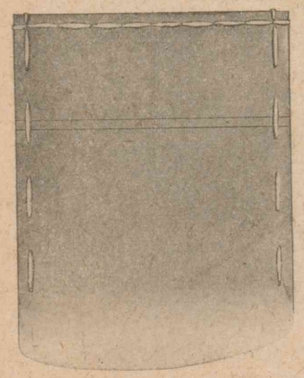
躾絲で3cmのあらさに綴ぢつける。



芯の附方

芯に眞綿を引く時は,一面に眞綿を引き,火のしで落ちつけてから,帶側に眞綿の方を合せて綴ぢ,次に他の面も同じにして表に返す。

返し方　四隅とも角を裏の方から表に押出しておき,次に眞綿を引いたものは,芯の方を中に兩端から20cmぐらゐに折り,返口の方に向つて緩く卷き,眞綿を崩さぬやうに注意して表に返し,角を整へ,兩端を持つて全體を引き合せ,返口の一方に芯を綴ぢつけ,小針に絎ける。

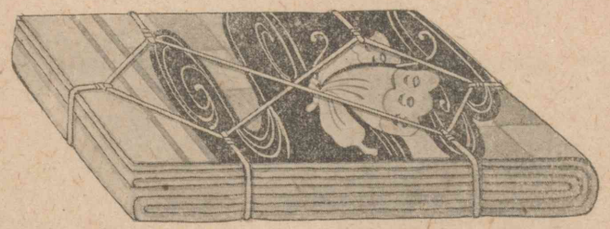


帶の躾

幅の針目＝$\frac{幅-0.8cm}{8}$
丈の針目＝3cm
躾道＝端から0.4cm
躾をそのまま取らずに使用するものは白または帶と同色の絹絲を用ひる。

(ヘ)仕上　紙または白新モスなどの上から火のしをかけ,大きく疊み,折目を押へぬやうにして壓を置き,疊み直して折目の部分にまた壓をかける。

(ト)疊み方　帶の丈によつて六つ折・七つ折・八つ折などにして,下圖のやうに飾綴をする。



帶の飾綴

第二節　各種帶側についての注意

1. **厚地物**　並縫では縫目の締りが悪いから,全部半返縫にする。

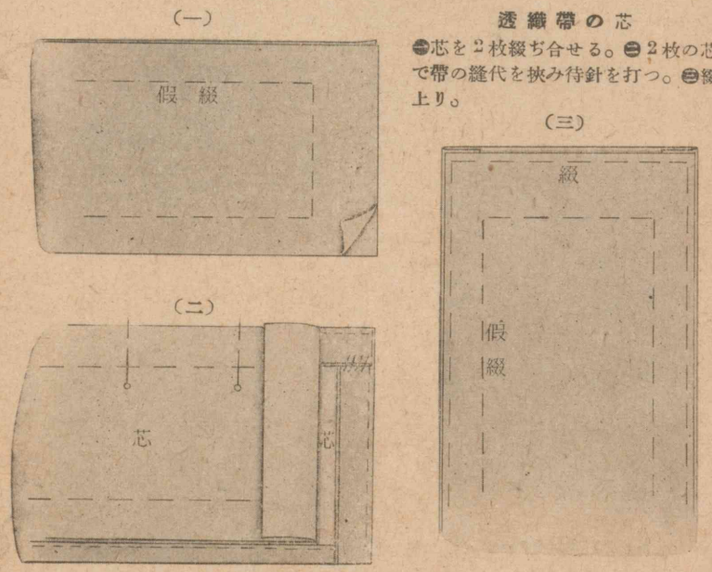
2. **縮緬**　軟く垂れる縮緬と他のものとを合せる時は,縮緬の幅を少し詰めて布合をする。その加減は布地によつて異る。

3. **絞**　布幅を,仕立上寸法＋縫代と被×2の寸法に伸す。その仕方は,絞をつぶさぬやうに注意して,火伸または湯伸をする。

裏うち　白新モスなどの上に絞地を載せ,待針で押へ,裏から共色の羽二重絲で表は極く小

針に模様を崩さぬやうに工夫して綴ぢておく。

4. 絽·紗　兩側とも透織のものは,下圖のやうに芯を2枚とも帶幅に裁つて奥の方を假綴しておき,帶側の縫代を挾んで綴ぢつける。



透織帶の芯
㊀芯を2枚綴ぢ合せる。㊁2枚の芯で帶の縫代を挾み待針を打つ。㊂綴上り。

第三節　名古屋帶

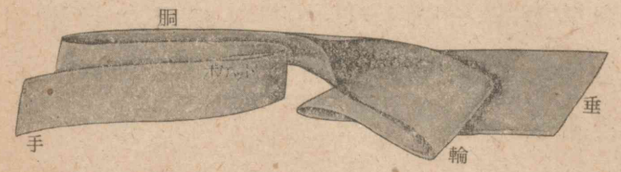
名古屋帶は,文化帶·輕裝帶などともいふ。

帶側は,普通の帶の$\frac{1}{2}$で出來る。輕くて夏向の帶には適當である。

1. 仕立上寸法

手·胴 ｛ 幅＝垂幅の$\frac{1}{2}$……(15cm內外)
　　丈＝胴廻×3 ……(210cm內外)

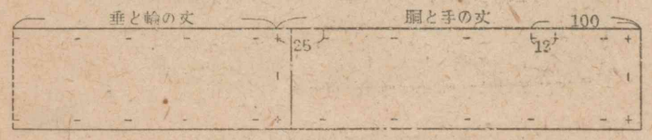
垂·輪 ｛ 幅＝30cm內外
　　丈＝｛ 帶幅×3……(90cm內外)
　　輪を二重にする時は,帶幅×5



名古屋帶

2. 仕立方

(イ)標附



胴幅は1枚のままで輪の幅と同寸.

ポケットの口は手より100cmを計り,手の方に12cm

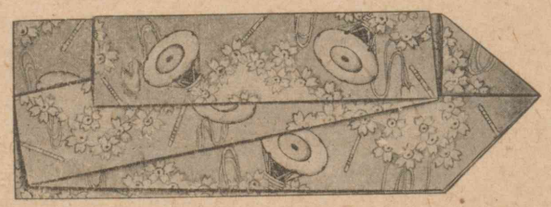
返口は輪と胴廻の界より胴の方に25cm

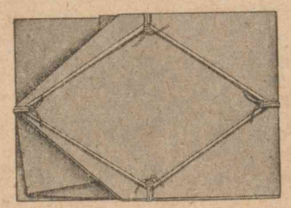
(ロ)縫方　垂の方は幅標の通りに返口まで縫ふ。

ポケット布を,帶のポケット口に0.5cmの裏控にして縫ひ合せ,四つ留をする。次に,その兩端を縫つて袋にし,胴を半幅帶のやうに縫ふ。

(ハ)芯の附方　輪の方は裏側に當てて縫代に綴ぢつけ,胴の方は芯幅を二つに折り,縫代を挾んで綴ぢる。

輪の方は表に返し,布の端を幅二つに折つて標の通りに縫ひ,胴は返口から表に返し,よく引合せて,岐際に四つ留をして小針に絎ける　なほ岐際には閂留をする。





名古屋帶の疊み方

第四節　裏附帶

裏には同色の布を用ひる。

第八章

綿布補綴

布の傷んだ部分を繕ひ,または不足の部分に布を接ぐことは,衣類を仕立直すときに必要なことであるから,その技術に充分熟達しておかねばならぬ。

第一節 接方

接方には,片返接·割接·掛接·重接·突合接などがある。

接道は,仕上げてから布全體の形が正しく出來るやうに,また接目は横縦の布目·縞目·模様などを合せて定める。

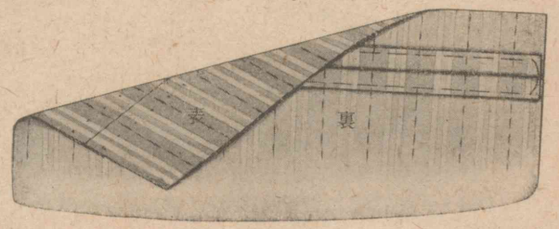
1. **片返接** 伏縫と同じである(第一章20頁參照)。

2. **割接** 縞または模様などを合せ,要所に待針を立てて,極く小針に縫つて縫代を割り,隱躾をする。

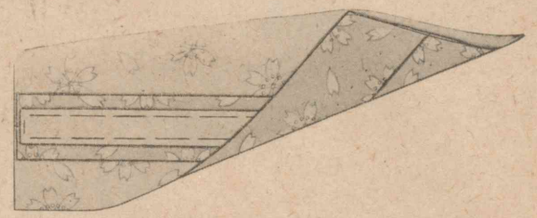
注意

(1)表用布の割接に隱躾をする時は,布の織絲を解いてする。

(一)



(二)



割接

軟い布を割接にして帶などにする時は力布を當てる。

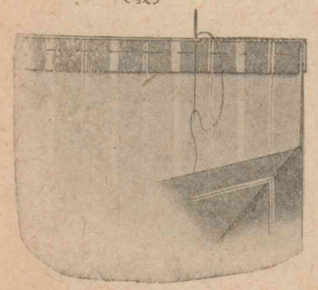
(2)地質の硬いものは半返縫にする。

仕上 裏から濕布を當てて烙鏝をかける。

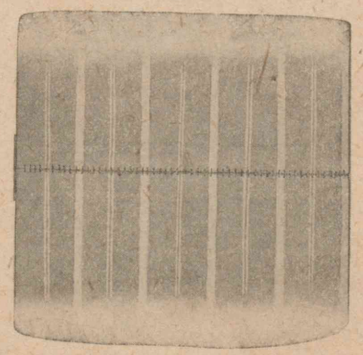
以下掛接·突合接·各種繼方などの仕上も皆同じやうにする。

3. **掛接** 絹の縫針布と同質·同色で細目の丈夫な絲とを準備する。

(裏)

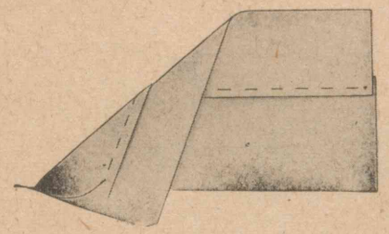


(表)



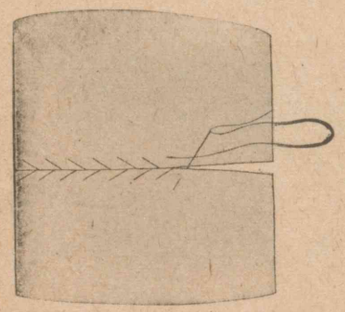
掛接

掛張して,針は横の布目に1,2本づつかけて刺し,縦の布目を2,3本おきに進める。



重　接

4. 重接　主に芯地を接ぐ時に用ひるが,裏袖幅の不足の時は,袖口布の中に入る所の接にも用ひる。



突　合　接

5. 突合接　用途は,芯地の接または厚地毛織物の裂目などを繕ふ時に用ひる。

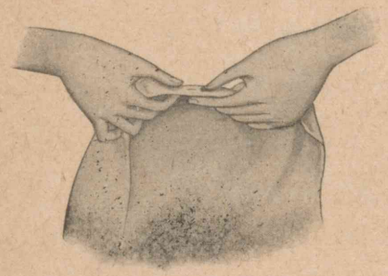
仕方は兩布を正しく裁ち合せ,針はいつも下から出して進める。

第二節　繼　方

準備　針　絹の縫針。

絲　布と同色の木綿繼絲のなるべく細く丈夫なもの。

繼方運針(刺方といふ)　左手の食指を次頁圖のやうに1cmほど出して布を持ち,左右の手を極く近くして,左食指で表針目を加減しながら細かく動かして進める。



刺方運針の手付
右手の無名指と小指の位置を圖のやうにすると輕く細く動かし易い。

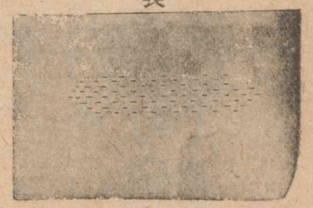
注意　この針目は,普通の運針と異り,なるべく針目が不明瞭に布の間を刺して行くやうにする。

1. 刺繼　布の一部が少し薄くなつた時にする仕方で,經が主に傷んだ時は縱に,緯(よこいと)が傷んだ時は横に刺すのである。

用絲は,なるべく目立たぬもの,またはその布の織絲を解いて使用する。

(一)

裏



表

(二)

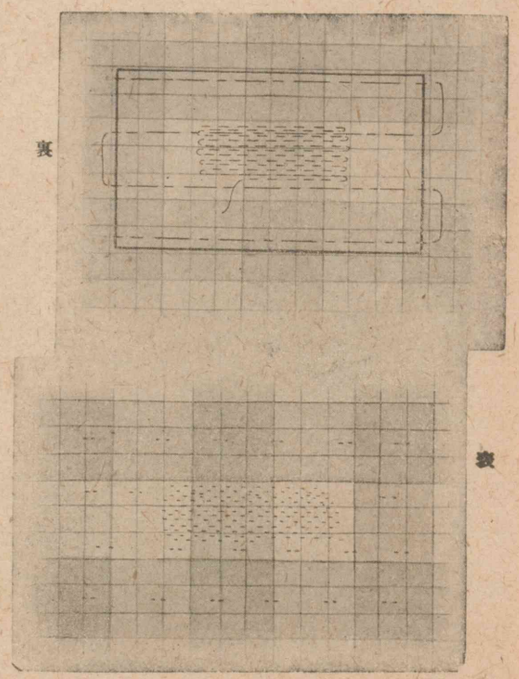
刺　繼

㊀左は裏右は表(針目を交互に,刺目の始終は裏の方で絲を引き殘す)
㊁表裏なし(兩面とも極小針にして各刺目の始終で絲を切る)

(一)の仕方は,表裏が出來るから,裏返しをするものには不適當である。

2. **色紙繼** 布が薄くなつて刺繼も出來ない時は,損所より少し大きい共布を,横縦の布目·縞目·模樣などが合ふやうに,平らに布合して,鞍で押へおき,下圖のやうな針目に刺す。

注意 共布がない時は,同地質で色合の似たものを用ひる。



色紙繼
表針目は極く小さく,裏針目の大は凡そ 1.6 cm, 小は凡そ0.4cm とする。
刺道の間は傷んだ程度で加減するが, 1.3cm 內外にして, 特に傷んだ所には刺繼をする。

注意

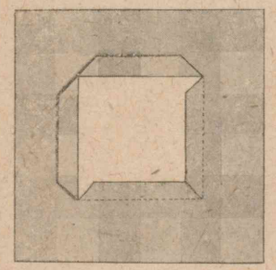
(1)表針目が次の列と並ばぬやうに,また正しく交互にならぬやうにする。

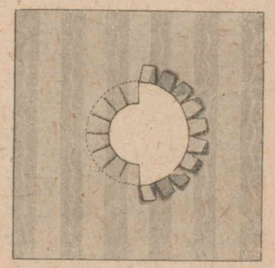
(2)縞物は繼絲の目立たぬ所を針道とし,大きい縞物は,繼絲の色を取りかへて見苦しくないやうにする。

3. **穴繼** 丈夫な布に鈎裂や燒穴などが出來た時に繼ぐ仕方である。

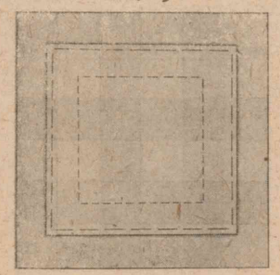
仕方 傷ついた穴を圓または四角など便利な形に整へ,下圖のやうに鋏を入れて縫代を裏の方に折り,烙鏝または鞍で押へておく。

(一)





(二)



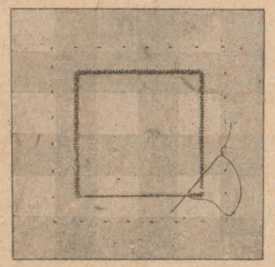
穴繼その一
㊀切目の入方, 紵代の折方
㊁當布のあて方

當布 縞や模樣が合ふやうにして,穴より少し大きく切り,平らに布合して,布の周りを隱鞍

で押へ,穴の周りは躾絲で假綴をする。

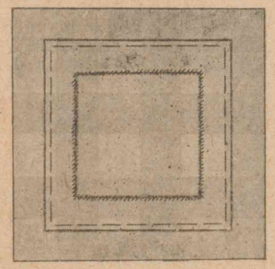
穴のかがり方　針を裏の方から折山の布目に1,2本かけて出し,次に折山と絲が直角になるやうに穴際(あなぎは)の當布に針を刺して,布目2,3本おきに針を進める。

(一)



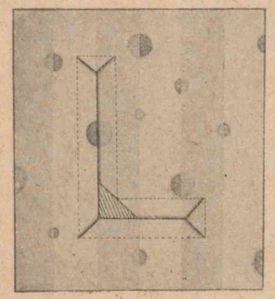
穴縫 その二
㊀穴のかがり方
㊁出來上りの裏

(二)

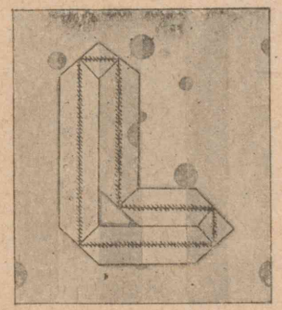


接目を割る時は,當布の方に1cmの縫代を殘して切り,その縫代に切込を入れて割り,隱躾で押へる。

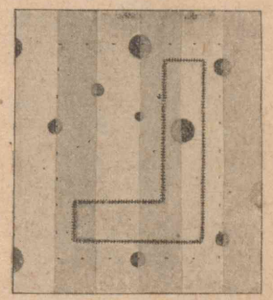
(一)



(二)



(三)



穴縫 その三(鈎裂の時の仕方)
㊀切目の入方,紵代の折方
㊁接目を割る仕方
㊂出來上りの表

第九章

綿　入

第一節　木綿綿

1. 衣類用木綿綿の幅及び丈

幅＝75cm内外　丈＝150cm内外

1包(3枚入)は125kg乃至300kgぐらゐで,厚さは一様でない。

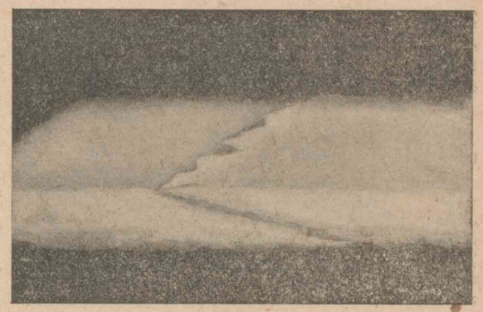
2. 保存法　綿は,紙などに包んで日光や風に當てぬやうに,また重いもので押へぬやうに注意しておかぬと,扱ひにくくなる。

3. 扱ひ方

(イ)切方　疊んであるまま必要な幅に定め,その部分に手または物差などを當て,手で摘み切り,端から靜かに擴げ,丈を定めて切り,形を直し,厚みを平らにする。

注意　木綿綿を切るには鋏を用ひない。

(ロ)接方　2枚の綿の端を次第に薄く引きのばし,他の部分と厚さを平均するやうに接ぐ。



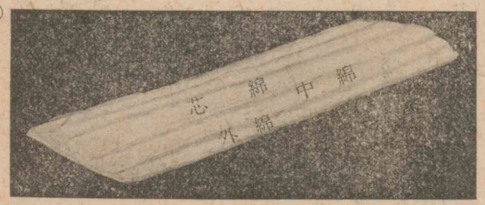
綿の接方

(ハ)繼方　綿の薄くなつた所や穴のある所には繼綿をする。その仕方は,兩方の繼目を引きのばし,次第に薄くして厚さを平均にすること,接方の時と同じである。

4. 袱綿のつくり方　綿入の袖口袱・裾袱などには,袱綿を特別につくつて入れる。

(イ)綿を重ねてつくる仕方

(一)



綿を重ねてつくる仕方

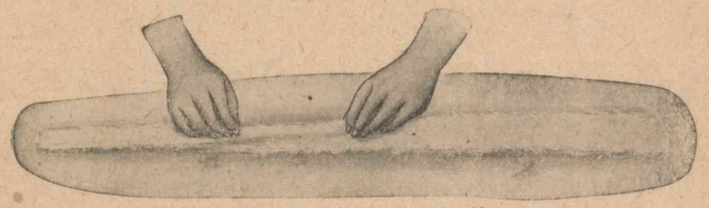
幅 { 芯綿＝凡そ袱×2
中綿＝芯綿＋2cm
外綿＝中綿＋2cm

丈＝入れる部分の長さ＋その$\frac{2}{100}$

●綿は幅を正しく切り,厚みを平らにして重ねる。
●幅を少しずらして折る。

(二)

(ロ)綿を卷いてつくる仕方　袱の凡そ5倍ほどの幅に綿を切り,斜にゆるく卷いてつくる。



袱綿を卷く手付

5. **綿片(わたきれ)の仕末**　なるべく綿片をつららぬやうに注意して取扱ふ。若し綿片の出來た時は,その綿の端をまるめぬうち,直ちに大きい綿に接いでおけば,綿屑にせずに使用することが出來る。

第二節　綿入の着物

1. **仕立上寸法**　普通寸法でよいが,極く寒い時は厚い下着を用ひるから,身幅は單衣より少し廣くつくる方が自然である。

	薄い綿入	厚い綿入
袖口袱	0.3cm	0.4cm乃至0.5cm
裾　袱	0.8cm	1cm乃至1.2cm

2. **裁方**　表・裏とも袷と同じである。

3. **綿入仕立の概說**　綿入は,表と裏を別々に單衣のやうに縫ひ,裾を合せて綿を入れ,廻りを絎けて各縫目を綴ぢたものである。故に,表と裏が外側・內側の關係になる部分は,表布の厚さと綿の厚さだけ裏布の寸法を詰めて縫ふことになる。

第三節　一つ身綿入(絎仕立)

1. **袖**(濶袖・筒袖)

標附
- 表　單衣の通り。
- 裏　袷の通り(詰める寸法＝袷の詰める寸法＋綿の厚み)

縫方　袖の表・裏を縫ひ,表だけ袖口の絎代と袖下とに躾をかける。

2. **身頃・衿・衽**

標附
- 表身頃　單衣の通り。
- 裏身頃　丈＝表丈＋袱×2
  後幅・前幅＝表幅－0.2cm乃至0.3cm(綿の厚さで加減する)
- 衽・衿　袷の通り。

縫方

表　脇縫·衽附·衿附をする。

裏　胴裏と裾廻の脇縫を別々にしてから,胴を接ぎ,衽附をする。

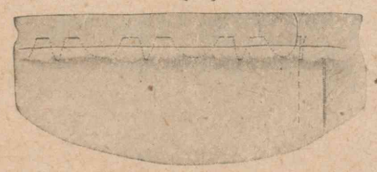
裾合をして,衽幅には隱躾を,前幅·後幅には並躾をかける。

表·裏の袖附をする。

3. 綿含

(イ)袖口の綿含　袱綿をつくり,裏袖口を裏の方に袱＋紵代だけ輕く折り,そこに袱綿丈を弛め加減に入れ,袖口下の縫目から綴ぢ始める。

(一)



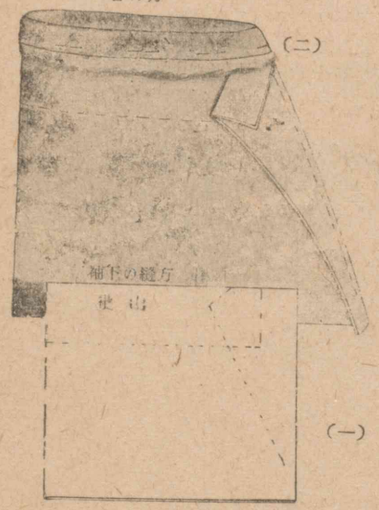
(二)

袖口綿含（その一）
㊀綿含の針目(山には表針目を出すことをさける)
㊁綿を含める時の針の使ひ方

綴道は袱山から袱＋0.5cmの所とし,袖下の縫目だけ拔針にする。次に針で綿を整へ,一針大きく綿だけ抄ひ,次は綿を整へて針を斜に入れ,表側に小さく針目を出す。(針を斜にするのは,綿を絲で

強く締めぬためである。

綿の含め方



(三)

袖口綿含その二
㊀筒袖の裏の縫方
㊁筒袖口の綿含
㊂濶袖口の綿含

(ロ)綿含の良否の見分け方

(1)綿が袱山までよくはいり,ふつくりしたのがよく,固く入れたものはよくない。

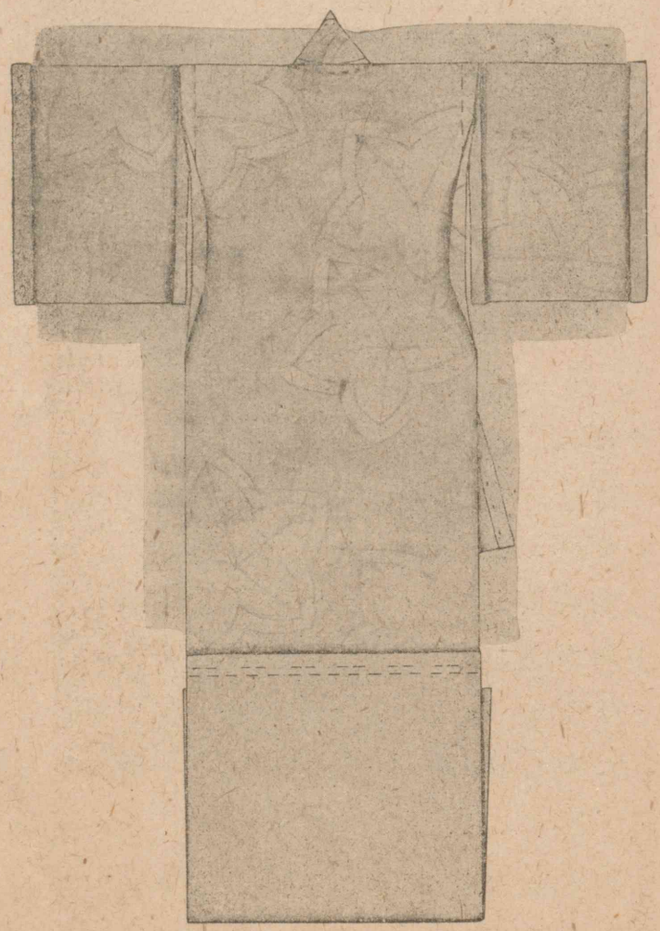
(2)袱の面に皺や凹凸のあるものはよくない。

(3)袱山を縦にして,片眼で見て眞直に出來たものはよい。

(ハ)八つ口·身八つ口の綿の厚さ　着物に入れる綿と同じにして3cm幅ぐらゐに切り,幅標の上に載せ,布とともに折つて,袖口と同じ針目で含める。

4. 綿の入方

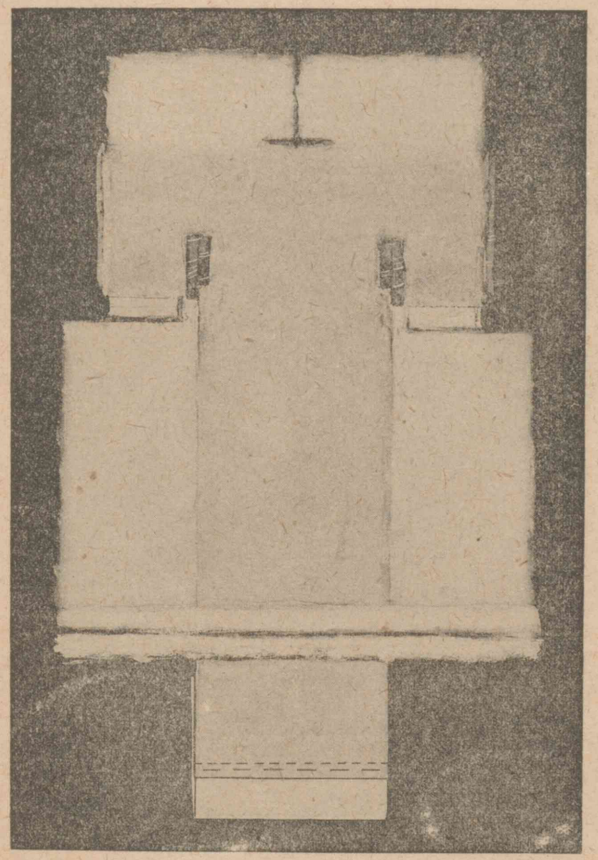
(イ)裏を外に夜着疊にして後を上に擴げ,眞綿を薄く引く。眞綿は,裾と袖口の外は,周りから



綿の入方 その一(眞綿の引方)

10cmほど出す。

(ロ)綿の擴げ方,切れ目の入れ方



綿の入方 その二
綿は接目を少くするやうに工夫して擴げる。

(1)綿は,表身頃の裾より10cmほど長くして,肩の上まで擴げる。

(2)兩脇には,綿を前幅＋衽幅＋2cm出す。

(3)袖口は衽綿の部分だけ控へる。

(ハ)切目の入方

(1)表に倣つて衿肩を切る。

(2)袖下から8cmの所を切る。

眞綿を引かぬものは,袖附の部分から切つて前幅の綿を長くし,袖の方には別の綿を接ぐ方がよい。

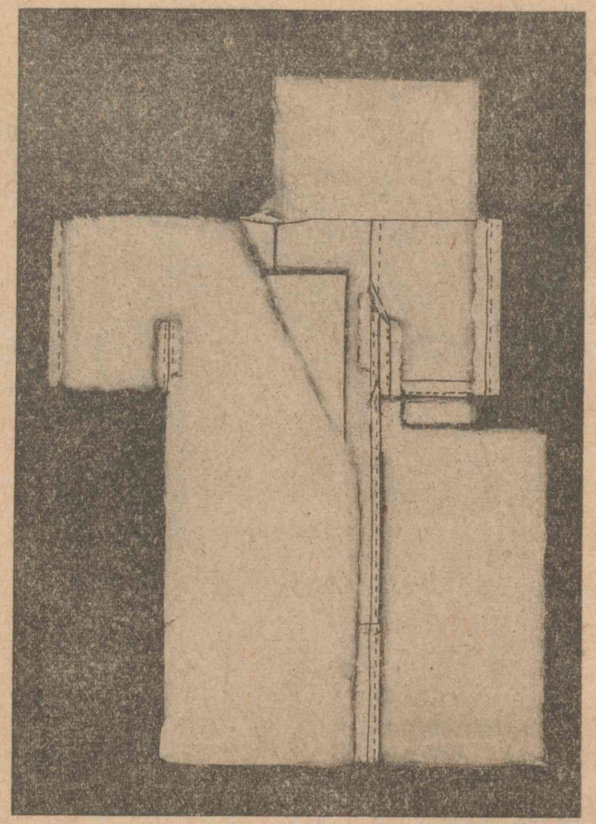
(3)八つ口綿の部分をとる。

(ニ)裾に衽綿をくるむ(薄綿入の時は,身頃の綿丈を $\frac{2}{100}$ 長くにして緩めて入れる)。

(ホ)眞綿を綿の上に引く。

(ヘ)裾衽の所に物差を置き,裏の身頃と袖を表の上に正しく重ねる。

(ト)次頁の圖のやうに,前の裏全體に眞綿を引き,綿を折返して整へ,その上に眞綿を引く。



綿の入方その三(前身頃の綿の入方)

(チ)返し方は,普通2人で肩と裾とを持つて,下圖のやうにするが,1人のときは,着物の脇を前にしてする。

綿の入方 その四 (返し方手附)

(リ)引合の仕方

(1)衿肩明とその部分の裾とを引合せる.

(2)肩は袖附まで手を入れ,裾は後幅·前幅を持つて引合せる.

綿の入方 その五 (丈の引合の手附)

(3)前幅·後幅と脇縫 袖幅と袖口下の縫目,袖丈と袖下の縫目などを正しく合せて疊む.

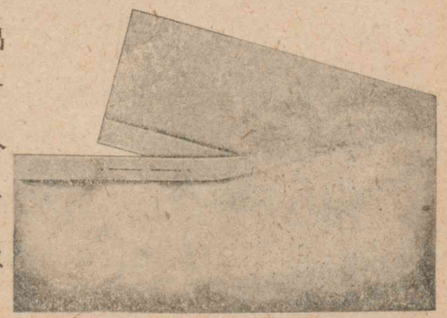
(ヌ)綴方及び絎方は,なるべく疊んだままでする.

(1)裾袵に綿を含ませて假綴をする.

(2)衽附の裾と衿肩を持つて衽附の縫目を合せ,裾から衿下の20cm上まで綿を挾んで袷のやうに縫絲で細かく綴ぢる.

(3)褄先を4cm縫ひ,縫代を表の方に折つて袵綿を合せ,餘りを引切り,褄先の綿を褄の表裏から拇指と食指とで持ち,表に返し,表より針で綿を押へてから指を離し,褄の綿を整へ,假綴をする(引絲をつけて返してもよい).

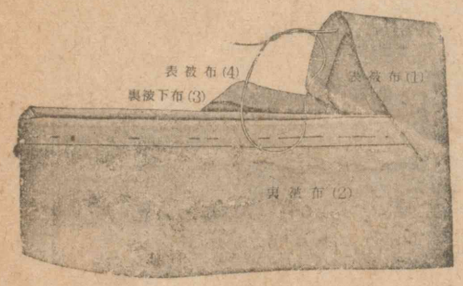
(4)衿下絎 裏衽の綿を平らにして,上前は裏幅を控へ綿と一緒に折り,假綴で押へ,衿下とその左右とに3針出して綿止の綴をする. 次に,表裏を合せ,綿も一緒に絎ける(綿も絎けるのは衿下に限る).



女物廣衿·衿下の綿止

(5)衿綴　衿肩明·前幅·衽先幅など表裏をよく合せて衿綴をする。

(6)袖口絎　袱綿と全體に入れた綿の端を平らに接ぎ合せ,袖口の表裏の關係によつて濶袖は濶袖形に筒袖は筒袖形に合せ,假綴で押へ,0.2cm の被にして綿を抄はずに向の針目を小さくして絎ける。



綿入の四つ留

(7)八つ口·身八つ口の布合を袷と同じくして,袖附と身八つ口の岐際に綿入の四つ留をする。

(8)衿絎　三つ衿布を袷のやうに入れ,綿は,縫込のある部分は控目にして,衿の厚みを平均にする。衿先は,表側に綿を入れて絎け,共衿をかける(廣衿の綿は,衿先は裏に,他は表に入れる)。

(9)縫目綴　脇の縫目を引合せ,待針を打ち,掛張して,3cm の針目で本絎綴にする。

(10)裾綴　針目は衿と同じで,1針は綿を抄ひ,次は裏に出すこと,袖口の綿含と同じである。

(11)仕上

第四節　袂袖の綿入

1. 標附

表袖　單衣の通り。

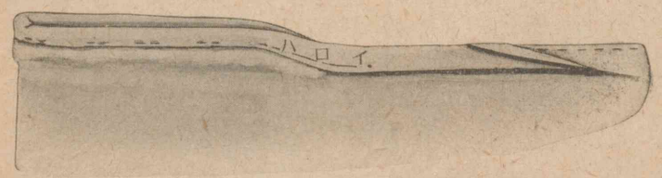
裏袖　袷の通り。但し,幅·丈を詰る寸法は,袷の寸法＋綿の厚み。

2. 縫方

表　單衣のやうに縫つて,袖口の絎代を折り,袖下·袖口下·袖口に躾をかける。

裏　袖口絲留は,返留にして,袖口布の部分は割り,その下の方で重割をする。

3. 袖口の綿含



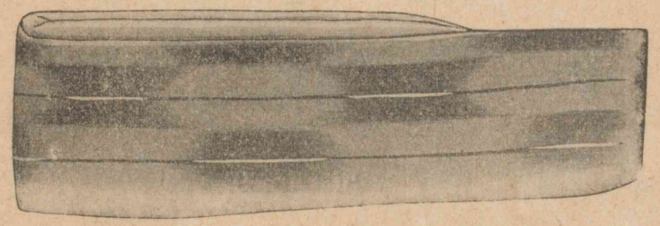
袂袖袖口の綿含

イ＝袖口より 2cm 下で綿を入れずに縫代を割つて押へる。
ロ＝袖口留際に被を少しかけ，綿を含めて押へる。
ハ＝ロより褄だけ離して袱＋絎代の寸法にして，向側の袖口褄まで濶袖と同じにする。

4. 袖口絎

表裏を合せ,留は綿入四つ留にし,結び目が出ないやうに一度絲を向側に出して戻し,褄の部分だけは1針綿を抄ひ,表布を張つ

て褄の形をつくり,他は綿を抄はずに絎ける.



綿入袂袖の袖口

袖口下全體と袖下の八つ口際 8cm の所を絎綴する

5. 男物の人形の部分は,裏袖が釣上るから,特に0.8cmぐらゐ長くする.

第五節　古綿の入方

1. 夜着疊にした表の後を普通に擴げ,綿の後の眞中を脊縫に合せ,袖の方まで平らに重ねる.

2. 綿の兩前身頃と袖を表の下に入れ,綿で表を包み,綿の後を繕ひ,袖口·八つ口·裾などの袱綿を取り,新しいのにかへる。

3. 着物の裏を綿の上に擴げる.

4. 綿の前を返して裏をくるみ,綿の前を繕ふ

5. 表の前を返して表裏を引合せる。

——終——

昭和十一年四月二十三日印刷
昭和十一年四月二十六日發行
昭和十一年十一月二十三日訂正再版印刷
昭和十一年十一月二十六日訂正再版發行

新裁縫教科書（全三册）

【定價】卷一・金八拾六錢
卷二・金八拾八錢
卷三・金壹圓拾壹錢

著作權所有

著者　磯畑せい
村瀨初代

發行者　合資會社 冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者　坂本嘉治馬

印刷者　新井修平
東京市京橋區木挽町三丁目十一番

發行所　合資會社 冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田(25)二一七一～二一七八番
振替口座東京五〇一番

電新堂印刷

二年桜
17 四一 [redacted]組
天津豊子
縣立浜女

二月分支拂明細表

目	内訳		
	氏名	天津豊子	
収入	給料	3,600.00	
	家族手当	—	
	計	3,600.00	
支出	源泉所得	—	
	国保	—	
	計	~~3,600.00~~	
差引支拂高		3,600.00	